

2013 年度 修 士 論 文

対無生物コミュニケーションの諸相
18 人の事例とその知覚体系
Communication with inanimate objects
18 cases and their system of perception

南 さくら
Minami. Sakura

東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

【序論】

動物や木や石などの無生物に命を見だし、人間と同等に扱おうとするアニミズムの思想は、現代から見ると未開な発想であり、人類がとうに乗り越えた世界観として語られる。物質主義と経済で成り立つとされる世界観は現代社会で広く共有され、こうした場において、人間は外部環境から独立して存在し、建築や土地は人間によって一方的に利用されるべき無機質なものとして存在する。

しかし、一方で近現代人の中にも無生物に生命を見だし、それらと語り合うという人々がいる。イギリスのエリカ・エッフェルという女性はエッフェル塔と結婚した。彼女は建造物やモノに人と同じような愛情を抱く対物性愛者と呼ばれる人々の一人だ。その深い愛情や絆は人に対するのと同じで、また、彼らがモノに話しかけるだけでなく、モノも彼らに話し、愛情を向けていると主張している。また、手塚宗求という人は無人の境地であった長野の霧ヶ峰に山小屋を開いたが、彼は山の生活道具であるストーブと話をし、まわりの自然物に人格を見いだす。このようにモノと話す人々は近現代の様々な分野に実際に存在する。

人文学者のフレーザーはアニミズムは人類の発展の経過であったと述べたが、これらの人々は、物に生命があると感じる知覚の普遍性を示しており、未開人の幼稚な科学に起因するものでないことを示している。この研究は無生物と対話する近現代人の事例をもとにして、人間の普遍的な性質と物質主義をこえた人体イメージを明らかにすることを目指す。

＜都市と建築と景観にまつわる現実的な問題＞

物質主義と経済の上に成り立つ世界では場は均質であり、物は消費され、土地は資源として活用されるべきもので、建築は私たちが一方的につくり、に鑑賞するものとなる。物質主義的世界観の限界に我々はどうに気がついており、決して万能視してはいないという考えは、たしかに個人のレベルでは共感もされ、主観的な意見としては表すことが許されている。しかし、公の場で実際の意見としては黙殺されるか、あるいは事実として扱われることはほとんどない。また、意見を言う側でも、そのような論法はタブーであるかごときいっさい避けるようにするのである。たとえば建築の提案をするのに手持ちの根拠が主観的なものだけであると、我々はとたんに不安に襲われ、機能の合理性や、高さ、長さ、温度、湿度、光など計測可能な共通言語を探そうとし、今の日本であれば環境への優しさへ結びつけようとする。このように、何を言うにも科学に基づいた合理的な裏付けが必要となるということは、いいかえれば、物質主義で説明できる範囲のことしか言い得ないということである。これがいかに私たちの周辺の環境や都市の形態を縛っていることだろう。我々の頑迷なまでの物質主義への固執は、もはや非合理的で不健全といえる域にまで達している。

＜私的な問題＞

このテーマについて研究したいと思ったもう一つの理由は、私にとって個人的に重要な場所や風景が私の許可なく勝手に変えられていくという現状に堪え難いものを感じているからである。私は私の感性を育んでくれた小学校の通学路や畑が失われるとき、何もできなかった。私は自分を形成してくれた景観を失うとともに、自分の記憶と性格の一部も同時に失ったようである。その場所に行かないと発現しないいくつかの感覚や性格があった。たとえ苦い思い出でも勝手に切り取られたいわけではない。また、私にとって重要な土地や建築がいつも理性的な冷たい手で触れられ、血の通わない言葉で語られることも神経を逆撫でされる。それは、母親や妹の体を人体実験に使われているようだ。それは自分が被験体になるよりも辛いことかもしれない。

自分の大切なモノ、大切な場所を失ったときに味わう痛みは、客観的な理由を見つけるのが難しい。ある人々

たり、裁判を起こしたりする。それはその建物から遠くに住んでいる人から見たら、ヒステリックと映るかもしれない。しかし、彼らの痛みは計測できなくとも、確かに存在しているのだ。それは肉体を傷つけられてはいないからといって軽微なものではない。もっとも不気味なのは、痛みを通り過ぎると、痛みがあったことすら思い出すのも難しくなる性質のものだということである。

愛着や愛情の問題は、景観論でも建築論でも誰にとっても納得のいくように取り扱うことができない。しかし、万能な方法はないにしても、これの複雑さを直視し取り組んでみるべきである。この研究では、モノや場所への愛着やそれが失われることによる痛みの存在を明らかにし、問題の複雑性を少しでも表すことがしたい。

目次

序論	－ 1
研究の概要と方法	－ 4
第1章 事例の研究	
近藤麻理恵	－ 6
手塚宗求	－ 13
立原道造	－ 20
石原良純	－ 26
宮沢賢治	－ 29
岩崎紘昌	－ 36
西岡常一	－ 38
星野富弘	－ 40
三遊亭あほまろ	－ 43
L. カーン	－ 46
E. エッフェル	－ 49
F. シュバル	－ 53
V. パートン	－ 59
L. モンゴメリ	－ 62
W. カーウエイ	－ 67
A. フランク	－ 70
A. ランボー	－ 78
H. ダーガー	－ 81
聖テレジア	－ 85
第2章 傾向の分析	－ 90
第3章 解釈と考察	－ 91
謝辞	－ 99

研究の概要

近現代人の著作や芸術作品の中から、モノと話す、モノが感情をもっているとする表現のあるものを探し、対象の部分を抜き出して全容を観察する。モノと言葉や感情のやり取りをすることをこの研究では「対無生物コミュニケーション」といい、対無生物コミュニケーションをする人を「対物対話者」という。

対無生物コミュニケーションの対象は、山や木などの自然物とあらゆる人工物である。植物は生命であるが、「話す」「笑う」などの本来植物がしない感情表現のあるものを対象に含める。対無生物コミュニケーションと擬人法の判別は、具体的な人物像に擬人化されておらず、モノがモノとして感情表現をしていることを基準とした。ぬいぐるみや昆虫など顔のあるものは含まない。

研究の手順

1. 事例集め

事例は1年あまりで18人を見つけた。近代からは、詩人の立原道造、宮沢賢治、宮大工の西岡常一、L. カーン、アウトサイダー・アーティストの F. シュバルと H. ダーガー、絵本作家の V.L. パートン、アンネ・フランク、小説家の L. モンゴメリ、詩人の A. ランボーを参照する。現代人からは、先に紹介した手塚宗求とエリカ・エッフェル、片付けコンサルタントの近藤麻理恵、テレビタレントの石原良純、映画監督の W. カーウアイ、画家・詩人の星野富弘、写真家の三遊亭あほまろ、アンティーク評論家の岩崎紘昌を参照する。全部で6カ国から18名となった。事例のうち10人は、過去に読んだ本で心当たりのあったものを読み直して、対無生物コミュニケーションの表現を発見した。他は日常生活でたまたま出会う、知人に教わるなどして見つけた。モンゴメリに関しては『赤毛のアン』を調査の対象としている。これはフィクションであるが、筆者の内面を投影したものとして読む。カーウアイにおいても同様にとらえる。

2. 著作から対無生物コミュニケーションの箇所を抜き出す

文献と映像から、対無生物コミュニケーションの現れている部分を抜き出した。また、人物の行動の特異な箇所も抜き出し、コミュニケーションの個別の様態を観察する。

立原、宮沢、石原、聖テレジア以外は、参考文献に挙げた書籍に関しては限無く取り出してある。

3. 傾向分析

集めた事例をコミュニケーションの方法や外から見た様子などの観点で分類し、全体の傾向を見る。傾向を分析し、対無生物コミュニケーションの様相と対物対話者の持っている一般的な傾向を調べる。

4. 解釈と考察

対無生物コミュニケーションの現象をアニミズムやシャーマニズム、心理学と並べて、対物対話者らの思考と内的体験を調べる。

第 1 章

事例研究



近藤 麻理恵

服や日用品に話しかける片づけコンサルタント

『人生がときめく片づけの魔法』著者。「乙女の整理収納レッスン」主宰。片づけコンサルタント。幼少期から ESSE やオレンジページ等の主婦雑誌を愛読。小学校では整頓委員をつとめ、家庭でも家中を整頓することに凝り、みずから片付けマニアを自認する。ちまたに出回っているあらゆる収納方法を実践した結果、独自の収納法を開発する。

参考文献：近藤麻理恵『人生がときめく片づけの魔法』サンマーク出版，2013. 2. 1

【近藤麻理恵の対無生物コミュニケーション】

「おうち」とその中の服や生活雑貨に物理的に触れることと、そのモノへのいたわりの言葉が近藤の対無生物コミュニケーションの中心となっている。モノの様子を表すために、近藤は以下のような言葉をもちいる。

寝ている、いたわり、うれしそうな感じがする、喜ぶ、安心する、休養する、ごきげん、ふうと息を吹き返す、弱っている、目覚める、泣いている、住所不定である、不安そう、つらい、働き者、せつない、「ツン」としている、声を返す、喜んでいる、大切に思う、役に立ちたいと思う、知っている、思う

これにたいする近藤の対応は、起こす、モノの意識をはっきり目覚めさせる、ねぎらう、挨拶をする、礼を言う、愛情を示す、救出する、安心させる、といった表現をする。具体的には、服をたたむ、本棚に収められている本を平たくして並べてみるなど、手を触れてモノに「ときめく」かどうかを捨てる基準とする。自分の手を触れることの重要性をくり返し述べる。

洋服をたたむ。それはたんに収納するために服を小さく折り曲げる作業だけをさすではありません。いつでも自分を支えてくれている洋服をいたわり、愛情を示す行為なのだと思います。（中略）たたむということは、つまり、洋服との対話なのです。（KM-10）

モノの喜びそうな場所にモノを戻すという行為が近藤の片付け方法の基本である。
また、「モノと「おうち」に意見を聞いてみる」とモノがどこに行きたいかがわかるという。

私のかける服を選ぶ基準は「かかっている方が、洋服が喜びそうなモノ」。風を通すとひらひら揺れてうれしそうな感じのする物や、かちっとして折り曲げられるのを拒否しそうな物は素直にハンガーにかけてあげます。（KM-16）

■実用主義とアニミズムが共存

近藤はモノが生物として生きていると思っているわけではなく、実際の人間の行動が服の長持ちにつながっていることを理解している。しかし、片づけの際にモノに命があるものとして扱う方が不思議とうまくいく、というのが近藤が長年の経験と実践の末の発明である。ここには、現実の生活の向上のためにアニミズム的世界観を用いるという実用主義的な考え方がある。

モノに命や感情があるとして扱った結果、良好な状態になることをたとえて、「モノは大切に扱われれば、必ず持ち主に応えてくれる」（KM-36, 225）と表現する。また、「部屋を片付けると、なぜかやりたいことが見つかる」（228）、「部屋が片付くと痩せるとか、一時的に腹を下す、吹き出物が出る」（KM-41）といった不可解な現象を目撃し、あるいは報告され、モノとの関係性は単純に収納や取り出しやすさだけでなく、それ以上の広がりを持ったものであるとの認識がある。

一方で、モノに命があるということは、近藤にとっては事実でもある。人間とモノの感性は基本的に同じであると認識し、自分のために働いてくれるモノたちへ、気持ちを返すことが重要だと感じている。また、片づけに対して「神聖な行為」「儀式」と認識し、モノと自分との関係性を左右するものであるとする。

私たちが意識していなくても、モノは本当に毎日、持ち主を支えるためにそれぞれの役割を全うしています。一生懸命私たちのために働いてくれるのです。私たちが一日働いて、自分の家に帰ってホッとするのと同じように、モノだって、自分のいつもの場所に帰ってくれば安心します。（中略）だから、ちゃんと定位置があって、底に戻されて休めているモノたちは、輝きが違うのです。たとえば、洋服をていねいに扱うようになったお客様から、「毛玉がつきにくくなったり、お茶をこぼしにくくなったりして、服が長持ちするようになった」なんて声が絶えないのも、持ち主を支えようというモノたちの気合いのなせるワザだと私は思っています。（KM-36）

買ったらすぐさま、タグははずすこと。モノが商品を卒業しておうちの子として生まれ変わるには、お店とつながる「ヘソの緒」をパチンと切ってあげる儀式が必要なのです。（KM-33）

私にとって収納とは、モノのおうちを決める神聖な行為なのです。（km-36）

近藤は、洋服をたたむことで手から洋服にエネルギーが注がれると考えており（KM-9）呪術に近いものをあみ出している。ここに、アニミズムと科学的思考の共存がある。

片づけを真剣にしていると、瞑想状態とはいかないまでも、自分と静かに向き合う感覚になっていくことがあります。自分の持ち

モノに対して、一つひとつときめくか、どう感じるか、丁寧に向き合っていく作業は、まさにモノを通しての自分との対話だからです。(KM-3)

近藤は、近藤は自分の持ちモノに対してでなく、他人の持ちモノの感情も感じ取る。(KM-37) また、おうちやモノがちゃんと扱ってくれない持ち主に対して恨みを抱いたりするようなことはないと言っている。それは、「持ち主自身が、罪悪感から勝手にそう感じてしまっている」(KM-40) のだそう。ここでは、他者の主観を否定しながらも、自身の主観は正しいと断言する。

■対象と自己の同一化

近藤は身体と部屋がつながっている、あるいは連動しているというように感じている。

お部屋と体はつながっている (KM-41)

モノは持ち主の気分を敏感に吸収するので、無意識のうちに自分が感じている「右肩上がりのときめき感」が服たちにも移ります。(KM-18)

■神秘体験にまつわる叙述

近藤の著作には、ときおり神秘体験とともれる著述がある。

ある日のことです。学校から帰ってきた私がいつものように片づけをしようと、自分の部屋のドアを開けると、相変わずの雑然とした空間。それを見たとき、頭の中でブツンと何かが切れてしまいました。

「もう、片づけたくない・・・・・・」

三年間でずいぶんモノは減ったはずの、でも居心地は最悪の部屋の真ん中で、あぐらをかいて座り込み、腕を組んで考えました。

「どうしてこんなに頑張っているのに片づけられないんだろう？ 誰か、教えて！」

誰にいうでもなく、ワラにもすがするような気持ちで心の中で叫びました。

そのとき、ふと部屋の中で「モノをもっとよく見なさい」という声が響いた気がしました。

「モノ？ 毎日穴があくほど見てるってば・・・」

ぼんやりと頭の中でつぶやきながら、そのまま私は部屋の床で、気絶するかのように寝てしまいました。(KM-1)

帰ったらおうちに向かって「ただいま」と声をかけること。(中略) これを繰り返しているうちに、「ただいま」との声におうちが返してくれるのが分かります。ふわっと風が来るような、おうちが喜んでいるような感覚です。すると、どこを片付けてほしいのか、どこにモノを置いてほしいのかが少しずつ分かるようになってきます。(中略) 私がおうちに対して何か大きな存在を感じるのは、お客様のところにうかがうたびに、それぞれのおうちがどれだけ住む人のことを大切に思っているかが伝わって来るからです。(KM-37)

■外から見た時の様子

近藤の対無生物コミュニケーションは、外から見ると、声を出して家やモノにあいさつしたりねぎらったりする (km-37)、片づけをする、などの行為である。ただし、モノへ語りかけは心の中だけで言う (KM-37) ことが可能であり、洋服をたたむことも洋服との対話であるということから (KM-10) 近藤の対無生物コミュニケーションの大部分は、外から見れば、ただ日常生活をしているように見える。

近藤麻理恵の対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ 大文字 KM-1 ～ 41 は対無生物コミュニケーションの箇所、小文字 km-1 ～ 4 は知覚の特徴を表す箇所

KM-1

ある日のことです。学校から帰ってきた私がいつものように片づけをしようと、自分の部屋のドアを開けると、相変わずの雑然とした空間。それを見たとなん、頭の中でブツンと何かが切れてしまいました。

「もう、片づけしたくない・・・」

三年間でずいぶんモノは減ったはずの、でも居心地は最悪の部屋の真ん中で、あぐらをかいて座り込み、腕を組んで考えました。

「どうしてこんなに頑張っているのに片づけられないんだろう？ 誰か、教えて！」

誰にいうでもなく、ワラにもすがするような気持ちで心の中で叫びました。

そのとき、ふと部屋の中で「モノをもっとよく見なさい」という声が響いた気がしました。

「モノ？ 毎日穴があくほど見てるってば・・・」

ぼんやりと頭の中でつぶやきながら、そのまま私は部屋の床で、気絶するかのように寝てしまいました。(61~62)・・・このあと、「捨てる」ことではなく「残す」ことを基準について重要な結論に至る

KM-2

わざわざモノを収納から出して床に広げることに意味があります。モノが引き出しに入ったままの状態は、いわゆる「モノが寝ている」状態。じつはこれだと、「ときめいているか」どうかの判断がしにくくなるのです。収納から出して空気に触れさせることで「モノを起こす」と、驚くほど自分のときめきの感覚がはっきりするようになります。(66)

KM-3

片づけを真剣にしていると、瞑想状態とはいかないまでも、自分と静かに向き合う感覚になっていくことがあります。自分の持ちモノに対して、一つひとつときめくか、どう感じるか、丁寧に向き合っていく作業は、まさにモノを通しての自分との対話だからです。(83)

KM-4

たまに「音楽をかけてノリノリで捨てましょう」という片づけ法もあると聞きますが、私はお勧めしていません。せっかくのモノとの対話が音でごまかされてしまう気がするからです。(84)

KM-5

「買った瞬間にときめかせてくれて、ありがとう」「私に合わないタイプの服を教えてくれて、ありがとう」といって、捨ててあげればいいのです。

KM-6

もし、モノに気持ちや感情があるとしたら、そんな状態がうれしいはずはありません。(88)

KM-8

片づけをするとスッキリするのは、人もモノもきつと同じだと、私は思っています。(88)

KM-9

じつは洋服をたたむことの本当の価値は、自分の手を使って洋服に触ってあげることで、洋服にエネルギーを注ぐことにあるのです。(102)・・・古代の呪術的医療やマッサージとの類似を指摘しつつ

KM-10

洋服をたたむ。それはたんに収納するために服を小さく折り曲げる作業だけをさすではありません。いつでも自分を支えてくれている洋服をいたわり、愛情を示す行為なのだと思います。(中略) たたむということは、つまり、洋服との対話なのです。(103)

KM-11

実は服にはそれぞれ、たたんだときにピタリと決まる「ゴールデンポイント」が決まっているのです。

ゴールデンポイントとは、その服にとって一番心地の良い、しっくりくるたたみ方のこと。これは服の素材や大きさによってそれぞれ異なるので、たたみ方を変えながら一つひとつ探っていく必要があります。(107)

KM-15

こうして、たたみ方がピタッと決まったときの快感といたらありません。建てて収納しても崩れない安定感、持つとしっくり手に馴染む心地よさ。そうかそうか、こういうふうにたたんでほしかったのね、と洋服と心が通じる歴史的瞬間。お客様の顔がパッと輝くのをるのが、レッスンの中でも私が大好きな瞬間です。(107)

KM-16

もちろん、「かける収納」のほうが適している服もたくさんあります。一般的にはコートやスーツ、ジャケットやスカート、ワンピースなどがそうですが、私のかける服を選ぶ基準は「かかっている方が、洋服が喜びそうなモノ」。風を通すとひらひら揺れてうれしそうな感じのする物や、かちつとして折り曲げられるのを拒否しそうな物は素直にハンガーにかけてあげます。(109)

KM-17

自分と同じタイプの人といっしょにいと無条件に安心してしまうのは、人も服も同じ。カテゴリー別に分けるだけで、洋服たちの安心感が違います。(109)

KM-18

モノは持ち主の気分を敏感に吸収するので、無意識のうちに自分が感じている「右肩上がりのときめき感」が服たちにも移ります。(111)

KM-18

収納されている状態の靴下たちは、まさに休養中。いつも激しく使い回され、脚と靴の間に群れと摩擦に耐え、それでも持ち主の脚をかがいしく包み続ける彼らの束の間の休日のはずです。(113)

KM-19

ストッキングもごきげんです。(114)

KM-20

ほどかれた靴下たちも、ふうと息を吹き返すのが分かります。(115)

KM-21

なんとなくですが、奥にしまい込まれて半年ぶりに出された服たちって、息苦しかったのか、弱っているように見えるのです。(118)

KM-22

本にかぎらず、服でも小物でもそうですが、収納に収まって長らく動かされていない状態の物は、実は「寝ている」のです。気配が消えている、と言ってもよいでしょう。(120)

KM-23

寝ている子供のほっぺをぺちぺちたたいて起こしてあげるみたいなイメージで、物理的に動かすことで風を通して刺激を与え、モノの意識をはっきり目覚めさせます。(121)

KM-24

小銭の、お金としてのブライド丸つぶれのこの様子、書いていても辛いけど、実際見るともっと切ないものなのです。(中略) 家の中で泣いている「なんとなく小銭」たちを救出してあげて下さい。(145~146)・・・ビニール袋にためて放置されている小銭について

KM-25

仕事を終えて帰宅してからの私の日課は次のような感じです。カギを開けてドアを開くなり、まずはおうちに向かって「ただいま！」と声をかけます。玄関の三和土にある昨日履いて一日置いた靴に「昨日はお疲れさま」と話しかけながら靴箱に戻し、(中略) 着ていたジャケットとワンピースをハンガーにかけつつ、「今日もいい仕事したね」とねぎらい、(中略) 窓際にある枯死くらの高さの観葉植物にも「ただいまー」と葉っぱをなでなで。(中略) 財布をベッド下の引き出しにある「お財布用箱」に「お疲れさまでございます」と感謝の気持ちを混めて収め、(中略) すぐ横のアクセサリー用トレーにピアスやネックレスを入れて、「今日も支えてくれてありがとう」とひと声。(中略) 寝室に戻り、空になったバッグを袋に入れてクロゼットの上の段に戻し、「頑張ったね。おやすみなさい！」とクロゼットのドアを閉めます。帰宅してからここまで五分。(172-173)

KM-26

たとえば上に何も置いていない棚があったとします。その上に住所不定のモノが一つ、ポンと無造作に置かれたとします。この一つがまさに命取り。「住所不定の彼」をが不安そうなのを他のモノたちがなぐさめに来るのでしょうか。今まで緊張感を保ってキレイな空間だったのが、まるで「全員集合！」と号令がかかったかのようにたちまちモノが増えていくのです。(174)

KM-27

こうした経験を経て私がたどり着いた結論は、収納は極限までシンプルにするにかぎる、ということ。頭で考えて工夫しない。迷ったら家とモノに聞いてみる。(181)

KM-29

積まれた下のモノがつらいからです。(191)

KM-28

久しぶりに巾着を空けたときの彼らの雰囲気のさみしそうなことといたら！ 猛省です。だいたい、普通の服ですら衣替えしない主義なのに、見えないモノを季節ごとに入れ替えようなんて考えたのが間違いでした。(199)・・・巾着に小物を収納する方法について

KM-29

そもそもバッグは、あなたが外出するときにモノを運ぶことが本来の役割です。書類やポーチや携帯電話といったあなたの持ちモノすべてを、一人でまるごと受入れて、パンパンになった状態で連れ回され、置かれるときは地面にすられ、それでも黙々と中のモノとあなたを甲斐甲斐しく支えつづける。なんて、働き者なんでしょう。(中略) 使っていないときもモノが入れっぱなしの状態は、寝ている間も胃に食べ物がぎっしり詰められているのと同じで、彼らにとってはずらひはず。(中略) 大事なのは、中に入れているモノすべてに買えるべき定位置の収納場所作り、バッグが休める環境が用意されていることです。(201-203)・・・バッグは毎日空にしなければならないと主張するにあたって

KM-30

扉を開けると焼きそばのように服がこんもり積もっている様子は、もはやゴミ捨て場のようで、服たちがせつなそうなことこのうえない。(205)

KM-31

とくに家族と別の物を使っている場合、自分が使っていない間もシャンプーたちはホカホカと温められ続けているわけで、品質低下の危機にさらされ、つらい思いをしている気がします。(208)・・・浴室のシャンプーボトルについて

KM-32

何度か観察を続けていくうちに、家にあるモノとお店で売られているモノの違いに気づきました。商品としてお店にかけられているモノは、家のクロゼットのボールにかけられているモノに比べて明らかに「ツン」としているのです。商品としてのモノと、家で個人のモノとして働いているモノとでは、出している空気が違います。値札がついたままの服は、その「ツン」とした感じが残っているように見えます。

私が考えるに、お店に置かれているモノは、商品で、家に置かれているモノは「おうちの子」。タグをつけたままだと、モノは「そのおうちの子」になりきれないのです。クロゼットにいっしょにかかっている真性「このうちの子」オーラに負けて、存在感が薄まってしまいます。(中略) 買うときから、きちんと自分の家に迎え入れて養う覚悟で選びましょう。(218-219)

KM-33

買ったらすぐさま、タグははずすこと。モノが商品を卒業しておうちの子として生まれ変わるには、お店とつながる「ヘソの緒」をパチンと切ってあげる儀式が必要なのです。(219)

KM-34

片づけのレッスンで私がお客様に出す課題の一つに、「モノをねぎらう」という課題があります。(222)

KM-35

私がこんなふうに、まるでモノが生きているかのように感じるようになったのは、じつはある出来事があったから。

KM-36

私たちが意識していなくても、モノは本当に毎日、持ち主を支えるためにそれぞれの役割を全うしています。一生懸命私たちのために働いていてくれるのです。私たちが一日働いて、自分の家に帰ってホッとするのと同じように、モノだって、自分のいつもの場所に帰ってくれば安心します。(中略) だから、ちゃんと定位置があつて、底に戻されて休めているモノたちは、輝きが違うのです。たとえば、洋服をていねいに扱うようになったお客様から、「毛玉がつきにく

くなったり、お茶をこぼしにくなったりして、服が長持ちするようになった」なんて声が絶えないのも、持ち主を支えようというモノたちの気合いのなせるワザだと私は思っています。

モノは大切に扱われれば、必ず持ち主に応えてくれる。

そういう意味で、モノが喜ぶ収納になっているかどうか、時折私は自分に問いかけることがあります。

私にとって収納とは、モノのおうちを決める神聖な行為なのです。(225)

KM-37

帰ったらおうちに向かって「ただいま」と声をかけること。これは個人レッスンに来て下さったお客様にお出しする、一番はじめの課題です。家族やペットに声をかけるのと同じように、家にも特別に声をかけてあげます。もちろん、帰宅してすぐにいうのを忘れてしまっても構いません。ふと思い出したときに「ただいま」とか「いつも守ってくれてありがとう」と、伝えるようにして下さい。声に出すのが恥ずかしいと言う場合は、心の中でいっていただいてもだいじょうぶです。

これを繰り返しているうちに、「ただいま」との声におうちが返してくれるのが分かります。ふわっと風が来るような、おうちが喜んでいような感覚です。すると、どこを片付けてほしいのか、どこにモノを置いてほしいのかが少しずつ分かるようになってきます。

おうちとコミュニケーションをとりながら片づけをする。ともすると夢見がちで実用的でない考え方のように聞こえますが、実は個々を見逃すと片付けはうまくいきません。本来、片づけとは人と物とおうちのバランスをとる行為であるはずで、これまでの片づけ法では、モノと自分の関係性は強調されて、おうちの存在はあまり考えられていなかったように思います。

私がおうちに対して何か大きな存在を感じるの、お客様のところへうかがうたびに、それぞれのおうちがどれだけ住む人のことを大切に思っているかが伝わって来るからです。(248-249)

KM-38

あなたの持ちモノは、あなたの役に立ちたいと思っている (250)

KM-39

モノとのご縁は、人と人とのご縁と同じくらい、貴重で尊い出会いなのです。

だから、そのものがあなたの部屋にやってきたのには、必ず意味があるはずで。

KM-40

こういうと、「じゃあ、この服は長い間ぐちゃぐちゃのままで放置してしまったから、なんだか恨めしそうに見える」「使ってあげなきゃ、呪われそう」とおっしゃる方がいます。

けれど、これまでの経験の中で、いわゆる「恨めしそう」なモノなんて、本当にただの一つも見ることがありません。それは持ち主自身が、罪悪感から勝手にそう感じてしまっているだけのことです。

では、部屋にある「あなたが“ときめいて”いないモノはどう思っているのか」といって、純粋に「外に出たい」と思っています。モノ自身、クロゼットのこの場所にいることで「今のあなた」を幸せにしていないことを、何よりも知っているのです。

すべてのモノは、あなたの役に立ちたいと思っています。モノは、捨てられて燃やされたとしても「あなたの役に立ちたい」というエネルギーは残ります。エネルギーとなって自由になった物は「～さんという、素敵な人がいるよ」とまわりに知らせながら、世の中を回ります。そして「今のあなた」にとって、一番役に立ってくれるモノ、一番幸せにしてくれるモノとなって、また戻ってきてくれるのです。それは、たとえば服なら、新しい素敵な服となって戻って

きてくれるかもしれないし、ときには情報やご縁など形を帰って戻ってきてくれるときもあります。

断言します。手放したモノとまったく同じ分だけ、戻ってきます。ただしそれは、モノが「またあなたのところへ戻ってきたいな」と思えるときに限ります。

だから、モノを捨てるときは、「あーあ、全然使わなかったなあ」とか「まったく使わなくて、ごめんなさい」という風に思うのではなく、「私と出会ってくれてありがとう」「いつてらっしゃい！また戻ってきてね」と元気に送り出してあげるのが正解です。

今はもうときめかなくなったモノを捨てる。それは、モノにとっては新たな門出ともいえる儀式なのです。ぜひその門出を祝福してあげて下さい。(253)

KM-41

お部屋と体はつながっている (253)

km-1

片づけをしてモノを減らしつづけていると、あるとき、自分の適正量に気付く瞬間が訪れます。これは、感覚ではっきりとわかります。突然、頭の中がカチッと鳴って、それと同時に、「ああ、私って、これだけのモノを持っていれば全く問題なく暮らせるんだな」とか「これだけあれば幸せに生きていけるんだな」という感情に、体が包み込まれる瞬間がやってくるのです。

私はこれを「適正量のカチッとポイント」と呼んでいます。不思議なことに、このカチッとポイント、一回通過すると、その後は絶対にモノが増えなくなります。だから、絶対にリバウンドしないのです。(167)

km-2

今でこそ「収納の達人になってはいけません」とか「収納のことは一度忘れて、まずモノを減らすことが大事」なんてさっぱりといっている私ですが、少し前までは頭の中の九割が収納。なんといっても収納に関しては五歳のときから真剣に考えてきましたから、中学で目覚めた「モノを捨てる」以上にキャリアは長いわけです。その間、本屋雑誌を片手に、それこそ普通の人が経験するであろう、ありとあらゆる収納の実践と失敗はひと通り経験してきました。(中略) そんな「収納青春時代」を過ごした結果、私は収納という、いかに空間を合理的に使って多くの物を収めていくかの頭脳勝負だと考えるようになりました。家具のすき間を見つけては、すかさず収納グッズでモノをねじ込み、ピッタリすき間が埋まろうものなら鬼の首をとったかのように「ふふん！」と心でガッツポーズ。いつのまにか、家やモノに対して、買った負けたと、なぜだか腰な態度をとるようになっていたのです。(中略) こうした経験を経て私がたどり着いた結論は、収納は極限までシンプルにするにかぎる、ということ。頭で考えて工夫しない。迷ったら家とモノに聞いてみる。(177-181)

km-3

片づけとは、いつも自分を支えてくれるおうちへの恩返しであるべきだと思うのです。

試しに、どうすればおうちが喜ぶか、という視点で片づけをしてみして下さい。いつもより迷いなく片づけが進むことにきっと驚くはずで。

km-4

私は三人きょうだいの真ん中っ子で、三歳以降はあまり両親に構われませんでした。(中略) 幼稚園の年長から家事や片付けに興味をもったのも、兄や妹に手がかかるので両親に迷惑をかけないように子どもながらに気をつかい、小さい頃から人に頼らないで生活した

いと言う意識があったからでした。

小学校一年生のときから目覚まし時計を使って、誰よりも早く自分で起きているような子どもでした。人に頼ったり、信頼したりするのが苦手で、自分の気持ちを人に伝えることも大の苦手。休み時間はずっと一人で片づけをしていたわけですから、今の基準でいえば、どう考えても明るい子どもとはいえないでしょう。一人で構内をうろうろするのが好きで、それは大人になった今でも同じです。(中略)こんなふうに、他人との間で信頼関係をつくる経験に乏しかったので、モノとの関係について異常なほど執着してしまったのでしょう。人前で弱みを見せたり、自分の本心を見せたりすることが苦手だったので、ありのままでいさせてくれる自分の部屋やモノがこんなに愛おしいのだと思います。無条件に愛されているとか感謝すると言う感情を、親や友人よりも先に教えてくれたのが、モノたちであり、

おうちでした。(中略)以前の私と同じように、他人に対して心を開くことができず、自分に自信がない人がいたら、持ちモノや部屋と言う身近に支えてくれている存在がいることに気づいてほしい。



手塚宗求

山々や生活道具の感情を読む男性

長野県松本市出身（1931-2002）

松本県ヶ丘高校卒。24歳の夏、当時無人今日だった信州・霧ヶ峰高原車山肩に「コロボックル・ヒュッテ」を創設する。手塚のエッセイは、山小屋の経営で、宿泊客が眠ってしまった後、夜に一人で書いていた手記をまとめたものである。

参考文献：

手塚宗求『山—孤独と夜 小さな山小屋に暮らして』2001, 山と溪谷社（T-1～T-9, t-1～t-12）

手塚宗求『高原の随想 - 野生への回帰 -』1991, 女子パウロ会（T-10～15, t-13～t-22）

手塚宗求『諸国名峰恋慕 - 三十九座の愛しき山々 -』2012, 株式会社山と溪谷社（T-16～27, t-23）

【手塚宗求の対無生物コミュニケーション】

手塚は山での暮らしのなかで、日用品や木や山といった周囲のモノに人格を見いだす。手塚がモノの様子を表すのに用いるのは以下のような表現である。

優しい顔をする、休む、仕返しをする、病気になる、痛々しい若死、息づかい、話しかけてくる、表の顔、裏の顔がある、表情を見せる、微笑をたたえる、魔性の形相、私を呼ぶ、物語る、招く、骨格たくましい雄姿、生きている、胸に一物を持った陰険な、明朗な風貌、語りかけてくる

■モノの扱い方への関心

手塚はストーブ、薬缶、火など山の生活道具から、それを正しく扱うことを求められていると感じている。また、そこで重要なのは扱い方だけでなく、誠意のようなものである。手塚にとってそれらのモノは生活を助けてくれるだけでなく、自分の感性を育んでくれたものだとして述べる。

火は生きものである。扱いが悪かったり、不遜な気持ちでもてあそぶと、火は人に仕返しをする (T-4)

私はすぐにその若い男の、煮えたぎっている薬缶の取り扱いの、配慮のなさというか、無神経さに気がついた。(T-8)

(T-8) では手塚は、山小屋の客がストーブの上の薬缶の取手を立てておかず倒して置いておくことに苛立っている。当然、取手は熱くなって、次の人は火傷をするし、取手の痛みも早くなる。しかし、彼が腹を立てている理由は大切にしているモノの扱いへの配慮のなさである。

また、モノにはテリトリーがあるということを感じ、モノのあるべき姿を自分が変えることに罪悪感を抱く。

わずかな面積ながら、本来花が咲くべきところに木を植えるわけだから、やはり私としては心が痛む思いであった。(T-10)

■対話式の思考と「なりかわり」

手塚の著作のなかには頭の中で他人と対話するという記述がいくつもある。そのとき相手が言う台詞の設定の細かさは奇妙なほどだ。さらには、空想の中で相手が言った言葉に、自分も熱心に答える。

今誰かに、「近ごろ読んだ本の中で、非常に感銘を受けたものがありますか」と訊ねられたら、私はためらいもなく『木を植えた人』(ジャン・ジオノ著 原みち子訳 こぐま社発行)だと答えるだろう。

質問者が私に、相変わらず殺人や不倫を飽きもせず登場させて、しかしやっぱり売ってしまうベストセラーの本の名前を期待していたとしたら、その人は多分、この聞き馴れない『木を植えた人』などという冴えない名前の本に怪訝な顔をするにちがいない。しかし、もしもだ。

「やっぱりそうでしたか。実は私もそうなんです。私も、『木を植えた人』を読んでとても感動しました。何回読んでもその読後感新鮮です。読んだ後はいつも心が実に穏やかに落ち着くのです。不思議な本ですね。今まで出会ったたくさんの本の中で、もっとも印象深い本です」

こんな風に同調する人だったら、たとえ初めて会ったばかりの人であっても、私は親しみをこめて熱い握手を交わすだろう。(t-13)

ここでは、その想像上の人物と熱い握手を交わそうとさえしている。文調は真剣である。

ほかにも手塚の頭の中の対話は、初対面の歩荷の人生に情熱的に同情する (226)、初めて会った青年の心の中の言葉を勝手に叙述する (t-14)、まだ言葉のわからない幼い息子に、文章中で熱心に話しかける (t-19)。また、自分が世話をした若者の心情を事細かに叙述する (t-13, 17) などいくつもある。よく知っている人物よりも、一度あったきりの人や会ったことのない他者の気持ちや台詞を代弁する。

もうひとつ、手塚の「なりかわり」の例を見てほしい。これは、自分が山小屋で世話をすることになったひきこもりの青年が、はじめて山小屋で1人で留守番をすることになったときに、彼を想いながら空想したことだ。

山小屋のおじさんが言っていた言葉を思い出した。「腹が減っても、いくら寒くても、どんなに淋しくたって、とにかく我慢だ。(中

略)」翌日、青年はすがすがしい朝を迎えた。おれだってやればできる。生きていくことに急に自身が湧いてきた。(t-17)

これは全部、あくまで手塚が考えた青年の心情である。それにもかかわらず、自分である「山小屋のおじさん」の言葉がどのように青年に思いだされているのかも決めている。この「なりかわり」の現象はほかの対物対話者にも見られるものであるが、手塚の「なりかわり」は、事例の中でも一番激しく、妄想に近いものになっている。自分のなかに思い描いた細かな空想に対して真剣にしんみりしたり、感動したりしている。

■モノが歴史を「語りかけてくる」

手塚の著述の中には、モノが「物語を聞かせる」というような表現がいくつか見られた。

私は大きな木を切り倒す度に、抑えがたい罪悪感を覚える。その度に切り株に寄って、その木の年輪を数えてみる。年輪は生きてきた過去を私に物語ってくれる。(T-20)

モノの見た目からそれがどのような環境におかれてきたのか、その背景を推理しているのであり、それは手塚自身で勝手に想像したものである。空想であることについては手塚は自覚しているが、モノを見ているだけでそれにまつわる背景が“果てしもなく”浮かんできるといふ。以下の例では、廃屋の様相からそこで営まれていた暮らしを事細かに空想したりする。

どの家についても一瞥の中に、かつてはたしかに営まれていたこのあたりの人々の暮らしを、私は勝手に想像することができた。囲炉裏のまわりの一家の団欒、笑い声や、声高にしゃべりあう人々の声、犬の鳴き声、家畜の匂も感じた。大雪の朝、子供たちはどのようにして小学校に通ったのか。どの家も農家に違いなかったから、作物は主に何であったのか。(t-18)

手塚はこのあと1ページを廃屋の細かな空想に費やし、空想の印象を深く心に刻み付ける。

■恋人のように表現される山と木

手塚の山への愛情に対する表現は、文章は素朴ながら美しくロマンチックである。そこには切実な純情さがある。そこに表現される山や木への愛情は、人間であれば肉親や恋人、あるいは親友に向けられるようなものである。

私はスキー場の丈夫に並んだやまびこの南の耳と北の耳を想った。いまはどうしているかと、なぜか恋しい人に声をかけたくくなるような、そんな気持ちになっていた。

私の山彦谷は終わったと想った。しかし二つの双耳峰は永遠に、私の分身のようにそこに立っていると思えばそれで幸せだ。(中略)やまびこの南の耳と北の耳に会いたいと、しきりに心が動いた。(T-9)

このような、ごく短い時間のなかで登ることのできる今の乗鞍岳だが、私は昔の乗鞍岳が切ないほどに懐かしい。(T-22)

私は、二本の白樺の半ば朽ちかけた幹や枝を、遺骸を抱くようにして拾い一カ所に集めた。この丘は、手向けの花には事欠かない。(中略)枯れた枝は、全部風にまぎ取られたのだ。ちょうどそれは、両足を失い、頭も両腕も指も、何もかもが失くなってしまった、胴体だけが残された姿だった。すがっていた杖すらも奪われた老人のように見えた。私は、走って行って慰めてやりたいと思った。何かしなくてはいけないと思った。(T-15)

(T-15)の例では、単に愛しみや懐かしみを覚えるだけでなく、実際に幹や枝を拾い集めるという行動をとる。また、走って行って慰めてやりたいという衝動に駆られている。モノへの愛情は手塚の行動の動機づけにもなっている。

■恍惚感にまつわる叙述

手塚のエッセイは全体が山々や自然の美しさに陶然としているような雰囲気がただよっている。手塚の叙述には空の模様にうつとりとするなどの表現がある。しかし、あるはずのない声が聞こえた、というような超常現象の表現はなかった。

今まで植えた木の数が一体どのくらいなのか、(中略)何度か数えてみようとしたのだが、その度に途中でやめてしまった。交錯した木々は私を目移りさせてしまって、数を忘れさせてしまうのだ。それに、小さな林ながら、足を踏み入れると私は何かに幻惑されたようになったり、木々が放つエーテルのような香気に酔ってしまうのだ。(t-15)

■モノの細部に至る観察と描写

手塚は、モノを執拗なまでに細かく描写するという癖がある。たとえば、以下は長年使ってきた薬缶の説明だ。

薬缶は厚手のアルマイト製である。大きな丸形の本体を持ち上げる頑丈な半円形の弦、取っ手の取り付け部には、大きく羽を広げた精悍なタカが刻まれている。胴体部分には「TKD」、尾羽の下には「マツタカ」と彫刻してある。

そのタカを、対になった四つの松葉が、手をつなぐように円形になって取り巻いている。この薬缶を製造している会社の商標である。商標の下に「90」と刻まれているが、これは容積である。灯油などを入れるポリタンクが十八リットルだから、九リットルの薬缶は大きいものだ。(t-3)

薬缶の形状や表面に刻印された容量の数字にまで執拗に観察している。薬缶に対してだけでなく、木の説明を始めた次々と木の名前や性質を説明して何ページも割くなど、読者をまどわす脱線がいくつもある。薬缶、木、ストーブ、景色といった身のまわりのありふれたモノへの関心の高さを示している。

そのほかの手塚の異様な執着の対象はモノの名前である。(t-2, t-11, 恋慕 113, 154) モノがなぜそう呼ばれているのかについて延々考えているエピソードがある。手塚は山の地図の制作を依頼され、霧ヶ峰のいくつか野山の名前として自分が読んでいた愛称を用いたが、いくつかの名前は公式名称になった。「北の耳」「南の耳」という二つの峰の名前は手塚の命名である。

■空への関心

手塚は空へ強い関心を持っており、天候日誌を十数年間つけていた。天候の変わりやすい山に住んでいる者にとってはおかしいことではないかもしれないが、彼の空への執着は単に身の安全を守るためのものではない。とあるエッセイでは、空や雲を見ることについて3ページにわたり情熱的に語る。

「朝起きたらまず、空を見よう」、これは私の持論になっている。既に一日が始まっている早朝、目覚めた床から起き上がったら、とにかく空を見上げよう、と人にすすめる。(t-9)

私たちはまず朝一番に、この自然の顔色をうかがうことこそ野性的な生き方の第一歩なのだ。(T-12)

■外から見た時の様子

手塚がモノに実際に話しかけるという叙述は「ストーブと話をする」という話だけであるが、それは1人で山小屋で過ごすときの行為であり、頭の中でだけ行われている可能性が高い。樺の木のエピソードでは、走って行って慰めてやりたいと思った、という衝動に駆られているが、実際は朽ちかけた枝や幹を拾い集めるというおとなしいものである。モノを隈無く観察することで、モノの感情を読むことや、自然の顔色をうかがうことで、愛着を深めてゆくことが手塚にとっての対無生物コミュニケーションである。であるから、外から見ると普通の山の生活をしているように見える。

手塚宗求の対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ 大文字 T-1 ～ 27 は対無生物コミュニケーションの箇所、小文字 t-1 ～ 24 は知覚の特性を表す箇所

T-1

女性的な姿態にたとえられる、霧ヶ峰の優美な山容はまさに高原の何ふさわしい。霧ヶ峰は優しい顔をした山といってよい。(13)

T-2

まず、何十年にも及ぶ薪ストーブとの付き合いがなかったとしたら、現在の私の感性といった物は育たなかっただろうと思っている。私の感性、感受性といったもの、精神の昂揚などは薪ストーブによって育まれ、磨かれてきた、と思えて仕方がない。日を見つめて過ごした時間が永かったから、私の野生は失われることがなかったと思っている。(22)

T-3

小屋の一隅には堀炬燵用の堅炭の俵もいくつか積んである。長年使い慣れたいくつもの鉋、鋸、斧や鉞、そして背負子など山仕事の道具が板壁に並んで休んでいる。私はこのような情景を、何十年も思い続けてきた。(35)

T-4

火は生きものである。扱い方が悪かったり、不遜な気持ちでもてあそぶと、火は人に仕返しをする。(36)

T-5

私は火の顔色を見ながら、ストーブが病気になるっていないか、普段と違ってないか判断する。ときどきストーブと話もする。火は孤独なときのいい話し相手になってくれる。(36)

T-6

私はいつごろからか、薬缶を出来るだけ丁寧に、思いやりをこめた気持ちで扱うようになっていた。(126)

T-7

火が生きるも死ぬも、焚き口に座る人しだいである。(130)

T-8

私はすぐにその若い男の、煮えたぎっている薬缶の取り扱いの、配慮のなさというか、無神経さに気がついた。(130)

T-9

その山彦谷がスキー場になったのは、昭和五十六年だった。エコーパレススキー場と命名されたそのスキー場のオープンの日、季節風に乗って祝賀のざわめきがかすかに聞こえてきた。私はスキー場の丈夫に並んだやまびこの南の耳と北の耳を想った。いまはどうしているかと、なぜか恋しい人に声をかけたくなるような、そんな気持ちになっていた。

私の山彦谷は終わったと想った。しかし二つの双耳峰は永遠に、私の分身のようにそこに立っていると思えばそれで幸せだ。(中略)やまびこの南の耳と北の耳に会いたいと、しきりに心が動いた。

T-10

わずかな面積ながら、本来花が咲くべきところに木を植えるわけだから、やはり私としては心が痛む思いであった。(14)

T-11

山小屋の南側には、若者が生まれたところに植えた木もある。すでに人格ともいえる風貌を持って、今年も去年の冬芽を破って新しい葉を開きはじめている。(中略)成人ともいえる見事に育った木が冬の寒気と烈風のために枯れたものだ。痛々しい若死を見る思いである。(21)

T-12

私たちはまず朝一番に、この自然の顔色をうかがうことこそ野性的な生き方の第一歩なのだ。(31)

T-13

明るいうちは、何の変哲もなかったモミの木や安山岩が意味ありげに見えてくる。樹々や岩石の息づかいが聴こえてくる。(中略)遠いどこかで、あるいは山小屋のすぐ近くで得体の知れない何かが生やべっている声がする。誰かが、それは人間か野獣か何かが、山小屋のまわりを歩く足音がする。たしかに聴こえるような気がするのだ。(中略)風に乗って何かの影が小屋のドアの向うに立っているように見えた。(45)・・・自分が世話することになった一人の青年が初めて山小屋で一人で過ごすことになったときの、青年の頭の中の台詞

T-14

地蔵峠の名もいいが、私は特に真田側の山の道が好きだ。道の両側の木立や藪の茂みの中に、一見、二軒と目につく廃屋のたたずまいが妙にさまざまな物語を私に話しかけてくるからだ。(103)

T-15

私は、二本の白樺の半ば朽ちかけた幹や枝を、遺骸を抱くようにして拾い一カ所に集めた。この丘は、手向けの花には事欠かない。(中略)そして一本の白樺の余生をたすけるために、ゆっくりとした風葬を続けながら地味を肥やすであろう。私はこのように、倒れた二本の白樺を追悼し、残された一本の白樺が長く生きることを祈った。(中略)枯れた枝は、全部風にもぎ取られたのだ。ちょうどそれは、両足を失い、頭も両腕も指も、何もかもが失くなってしまった、胴体だけが残された姿だった。すがっていた杖すらも奪われた老人のように見えた。私は、走って行って慰めてやりたいと思った。何かしなくてはいけないと思った。

T-16

山というものは表の顔があり裏の顔もある。横顔もあれば平面的な顔もある。眺望する場所や角度に酔って、実に多様な風貌、表情を見せてくれる。(7)

T-17

立派で実に堂々とした品格のある大きな山だという印象を強く受けたが、その初対面はいつのことだったのか場所も思い出せない。(15)

T-18

さわやかな微笑をたたえていた美ヶ原は、突如として魔性の形相に変貌する。(31)

T-19

私の頭のなかには五十数年も昔の地図がセピア色になって広がって

いる。(中略) 遠い山は、もう老いた私を呼びはしない。(52)

T-20

私は大きな木を切り倒す度に、抑えがたい罪悪感を覚える。その度に切り株に寄って、その木の年輪を数えてみる。年輪は生きてきた過去を私に物語ってくれる。(60)

T-21

北緯四十五度、この高緯度がもたらす自然の冷酷、そして自然からの慈しみを同時に受けて生きている。(61)

T-22

このような、ごく短い時間のなかで登ることのできる今の乗鞍岳だが、私は昔の乗鞍岳が切ないほどに懐かしい。(66)

T-23

最も親しんでいた自分の庭を終焉の地とした北田さんの、網膜に映った最後の山が阿蘇だと思えば、阿蘇が北田さんを招いたのだろう。(123)

T-24

妙高という山がもつ骨格たくましい山岳の雄姿を見て驚きの声をあげるのだ。(132)

T-25

研究者の説によれば、すでに活動の休止期に近いといわれた焼岳だが、実際には先述のように大正の大爆発があった。学者が何といおうと私は焼岳を見ると、この山は生きていると思う。活力を蓄えて外の様子をじっとうかがっているように思えてならない。しかし、だからといって焼岳が、胸に一物を持った陰湿な山などとはいえない。焼岳はその山肌の微妙な色合いからしても、むしろ明朗な風貌を備えた山と私は思っている。(165)

T-26

人間でいえば頭や顔の部分にあたる、將軍平から上の端正な山頂に注目が集まっているようだ。

T-27

目を上げれば極く自然に山容が語りかけてくる感じだ。

t-1

昭和三十四年二月十五日、霧ヶ峰の空は快晴、そして無風だった。この快晴は全国的だったと思う。(15)

t-2

私は木賃宿と言う語呂が好きだ。宿という言葉も字も好きである。ふざけてモクチンヤドというのも面白い。キチンはつまりキッチンと同じだが偶然にしては出来すぎている。

t-3

薬缶は厚手のアルマイト製である。大きな丸形の本体を持ち上げる頑丈な半円形の弦、取っ手の取り付け部には、大きく羽を広げた精悍なタカが刻まれている。胴体部分には「TKD」、尾羽の下には「マツタカ」と彫刻してある。

そのタカを、対になった四つの松葉が、手をつなぐように円形になって取り巻いている。この薬缶を製造している会社の商標である。商標の下に「9ℓ」と刻まれているが、これは容積である。灯油などを入れるポリタンクが十八リットルだから、九リットルの薬缶は大きいものだ。

t-4

一束の薪といっても、その一束に薪を作った人の、人柄を見るような思いになることがある。正確な寸法に切った薪が、金がたにきっちりと詰められたものの、がさついた束もある。(中略) しかしどのような薪でも、その気が育った森や林を思い、薪を作っている人に思いを寄せれば、そうした山の人の労苦がよくわかる。

気を錐、気を割る人の汗や息づかいを想像すれば、一本の雑木にしてもおろそかには燃やせない。(33)

t-4

自分の不在の山小屋を遠くから見つめるのは初めてであった。急に目頭が熱くなる思いになった。ランプの下でやはり夕食の善に向き合っているであろう幼い児と、その母の姿が髣髴とした。

t-5

この薬缶を見つめていると、山小屋の一つの時代、世相と人の物語が果てしもなく浮かんでくる。(134)

t-6

今こうして思い出してみると、人が住んでいないと思われた古い家だったが、実際には老人の男下女が一人で住んでいて、私たちが通りかかった深夜、たまたま明かりをつけていたのではないかと思う。その夜だけではなくて、毎夜、老人が眠れない夜を孤独に過ごしていたのかもしれないと、今になって想像する。昔もそうだったろうが、現代のこの世の中、深夜一人っきりで眠ることもなく寂しく過ごしている老人は大変な数に上るのではないかと想像する。人知れず、人目につかないような生き方をしている人がどんなに多いことかと思う。(141-142)

t-7

最後の一発を売った後、これは当たり前のことなのだが、手にしている銃がただの鉄の棒でしかないと思った。(中略) 銃そのものに対しての嫌悪感、狩猟そのものを否定する心境だった。(174)

t-8

(土間にいる男たちの山彦谷を開発してスキー場にするという話が耳に入って) 話の内容はこれも、まさかと思うものだった。私にとってはあまりにも身近な場所、そしていつまでも今のままであってほしいと思っていた聖地のような山彦谷のことだったので、つい聞き耳を立てざるを得なかった。(190) (T-9 参照)

t-9

「朝起きたらまず、空を見よう」、これは私の持論になっている。既に一日が始まっている早朝、目覚めた床から起き上がったら、とにかく空を見上げよう、と人にすすめる。(246) (補足：このあと空や雲を見ることについて3ページにわたり叙述)

t-10

昭和三十一年に山小屋を始めてから十数年にわたり、私は天候日誌をつけていた。(252)

t-11

私は、どうして片仮名でカシガリと言うのか、気にかかって仕方がない。(中略) 傾いていることを傾ぐともいう。(中略) 傾がる山、カシガリ山とこじつけてみるとおもしろい。あるいは貸し借り山とすると、お金のからんだ山かと思えてくる。借金の形になった山。

t-12

片仮名で表記される山でもおもしろいといえば、カシガリ山の隣のカボッチョである。アイヌ語ではないかといわれている山だ。(中略)カボッチョは、株丁のことではないか、と私は想像した。丁は偶数の意味ではないか、切り株のような2つの頂を持った山ではないかと思った。丁は頂に結びつく。カプチョウがいつのまにかカボッチョになったかもしれない。私の、いわゆる自説である。(254)

t-13

今誰かに、「近ごろ読んだ本の中で、非常に感銘を受けたものがありますか」と訊ねられたら、私はためらいもなく『木を植えた人』(ジャン・ジオノ著 原みち子訳 こぐま社発行)だと答えるだろう。

質問者が私に、相変わらず殺人や不倫を飽きもせず登場させて、しかしやっぱり売ってしまうベストセラーの本の名前を期待していたとしたら、その人は多分、この聞き馴れない『木を植えた人』などという冴えない名前の本に怪訝な顔をするにちがいない。しかし、もしもだ。

「やっぱりそうでしたか。実は私もそうなんです。私も、『木を植えた人』を読んでとても感動しました。何回読んでもその読後感は新鮮です。読んだ後はいつも心が実に穏やかに落ち着くのです。不思議な本ですね。今まで出会ったたくさんの本の中で、もっとも印象深い本です」

こんな風に同調する人だったら、たとえ初めて会ったばかりの人であっても、私は親しみをこめて熱い握手を交わすだろう。

t-14

こうした私を、通りすがりの一人の若者が「おじさんは何をしてるんだい」といった顔と目で私の手元を見つめていた。若者が何を思っているのか、何を訊ねたいのか私にはすぐに分かった。(中略)私はいつになく饒舌になっていた。若者と話をしているというよりも、一人で勝手に空に向かってしゃべっているようだった。(中略)「だったら、おじさんは今していることを空しいと思いはしないのかい」若者の目が、私にそのように言っているように見えた。「私も若者に向って心の中でつぶやいた。「私はたしかに夢を見ている老人かもしれない。(中略)いいんだよ、私はね、とにかくこうして木を植えているといつかは林になる。そう信じながら生きていることが、何かを信じていられるということがずいぶん贅沢で幸福だと思っているからね。(後略)」(18-19)

t-15

今まで植えた木の数が一体どのくらいなのか、(中略)何度か数えてみようとしたのだが、その度に途中でやめてしまった。交錯した木々は私を目移りさせてしまって、数を忘れさせてしまうのだった。それに、小さな林ながら、足を踏み入れると私は何かに幻惑されたようになり、木々が放つエーテルのような香気に酔ってしまうのだ。(23)

t-16

夜は不思議だ。一人っきりでいるとさまざまな物が意味をもち、どんなものにも存在感があった。(中略)小屋の中には必要最小限のものしかなかった。だからどの一つをとっても、なくてはならない貴重なものに見えた。雨や風を防ぐ屋根や板壁、一本の柱も小さな窓も、貧しい木のテーブルや鋸にさえもそれぞれの任務を果たしている人格のような風貌を感じた。(中略)小さな何か

t-17

山小屋のおじさんが言っていた言葉を思い出した。「腹が減っても、いくら寒くても、どんなに淋しくたって、とにかく我慢だ。(中略)」翌日、青年はすがすがしい朝を迎えた。おれだってやればできる。生きていくことに急に自身が湧いてきた。(46)(これは全部手塚が考えた青年の心情、あまつさえ自分さえ含まれている)

t-18

どの家についても一瞥の中に、かつてはたしかに営まれていたこのあたりの人々の暮らしを、私は勝手に想像することができた。囲炉裏のまわりの一家の団欒、笑い声や、声高にしゃべりあう人々の声、犬の鳴き声、家畜の匂も感じた。大雪の朝、子供たちはどのようにして小学校に通ったのか。どの家も農家に違いなかったから、作物は主に何であったのか。(後略)(104)(このあと1頁を細かな空想に費やす)

t-19 幼い息子への頭の中での語りかけ

そうだ、ほんとうに、お前が驚くのも無理はない。水というものは、そんなに簡単に、ひねればジャーッと出てくるものではないのだ。お前の水は父親が、朝と夕に何回となく、ユッサ、ユッサと、コバイケイソウやニリンソウ、秋はキンソウやサワギキョウの咲く水場から、冬は吹雪をついて担ぎ上げるものでなくてはならない。(144-145)

t-20 樺の未来への空想(187)

t-21

秋の小人たちが、雲の彼方でテニスボールを打っているような想像が私を秋の心にさせていた。(192)

t-22

もし、イタチと話ができるものなら言ってやりたかった。「毎晩遊びに来るのは一向にかまわないよ。しかし困るね、これでは。(後略)」

t-23

岩小屋に住んでいると、涸沢のような広い谷間では、風の動いて行くのを、目でみることが出来る。(71)

t-24

快く少し陶然として私は、すでに初冬の色を深くしている窓外の林や、その上の空のスミレ色を眺めていた。南南東に向いていた窓の遠くには、一昨夜発った霧ヶ峰草原と、そのなかでもっとも高い車山が、まだ暮れきらずに見えていた。(不明)



立原道造

空、本、集落の感情を読む詩人

東京日本橋区出身（1914-1939）

詩人、建築家。東京帝国大学工学部建築学科卒業。

辰野章3年連続受賞、中原中也賞受賞。

空、ポプラ、山、鳥、集落、夜、本に関する記述に擬人法を用いる。

参考文献：立原道造全集3 （2007.3.25）株式会社筑摩書房，東京），
「火山灰」「盛岡紀行」「花卉」「抒情小曲集」

注意：変体仮名は現在のひらがなに、旧字体は現代の漢字に直してある

【立原道造の対無生物コミュニケーション】

■モノの繊細な感情の表現

立原の対無生物コミュニケーションは、本、窓、椅子などの身近なものと、ほかの対物対話者には見られなかった「村」が対象になっている。身のまわりのモノは辛いとか、具体的にどうしたいなどと不平不満をいうのではなく、むしろ「どうする意志もない」「笑おうにも笑えない」などと、複雑で繊細な感情で表現される。以下がモノの行動と感情表現の言葉である。

声を発する、よろこびたいとうたう、かなしいという、夢みる、夢みさまよう、切なげに、見つめあう、殆どせつない情欲によって時間のなかに氾濫しさまよう、どうする意志もない、この世の正しい言葉を語ってくれる、笑っている、ながめている、ささやきかわす、ひとりぼっちである、旅立って行く、話す、息をひそめおそれる、わかる天を睨む、笑おうにも笑えない、信じあう、身悶えする、奪う、好ましいほほえみでみまもる、対話する、迎える

本に対しての観察が深く、自分が購入した本の装丁の美しさを説明する手記もある。また愛着も並ならぬもので、梶井基次郎全集を売りに行く詩は、まるで恋人と別れるようだ。

この日は梶井基次郎全集二巻と別れる記念日だ。この覚書がせめてもの儀式だ。僕はあれを愛した。おそらく、その本は形を失つても、このあと、あれを愛しつづけるだらう。
では、さやうなら。さやうなら。(TM-4)

僕の好きな本は、僕のポケットにちょうどはいる大きさだった。僕は、夜と昼の町を、それらの本と一しょに歩いた。(TM-23)

■脳内の身体による触れ合い

立原の表現では、モノは「見る」「触れる」という行動をとる。しかも人体にあたる形状や部位がないモノでも、それがあるかのように振る舞う。

僕は本棚の前にぼんやりたたずんでいた。それは全く不意だった。僕にまでこのしづかな無生物の夢みている時間が感じられだしたのだ。この本たちは全く動かうといふ意志さえ禁じられている。而も、これたちのそばを流れているのは時間だ。その時間のなかでこれたちはいかにかなしく夢みさまよっているか。僕にそれがはげしい共感を強ひたのだ。僕はぼんやり立つたままだった。すると、この壁は茫々とした草原のなかにとりのこされていた。そのなかでいかに切なげに僕らは手を取りあつたか。さうして、いかに僕らの心は凍りつき、畏れでお互に見つめあつたか。僕と本の群と。(TM-5)

「切なげに手を取りあつた」とあるが、もちろん本に手はないから実際の身体的な接触のことではない。この触れ合いは、脳内の、あるいは精神の身体ともいうべきものをもってなされた。以下では、実際の耳と「僕の内部の」耳が別のものだということを表現している。

僕の内部の 最もふかい おまへとだけ持つことの出来る この耳で！ あるひは 僕の内部のふかい口で 僕はこの風景をのんでいる あたかも この色をした そして この香のある この酒をのみほさうとするかのように！ (tm-10)

■理想の人物との脳内の対話

文章の中で立原は頻繁に「おまへ」に呼びかける。これは、水戸部アサイという実在した恋人のことある。しかし、「おまへ」への呼びかけは一方的で、实际的なメッセージであることはほとんどない。水戸部アサイは実在の人物であるが、立原の中では理想化された恋人のアイコンでもある。(全集 58-59, 63, 65, 71, 93, 98-99, 114) これは、立原が頭の中に常に対話の相手を求めているためである。

「もう おまへにかへりたい」

この夜があんなに美しいのは、おまへの眼をとほして、僕の眼があれらを見ているからだ。(tm-9)

ここには、理想の対象との同一化の願望も現れている。「おまえ」は詩集や手記の中でムラはあるもののいつも登場する。

■「空」「夜」「風」の記述

立原の手記は「火山灰」と「盛岡紀行」などあわせて100ページほど読んだが、2ページに1回くらい空のことを書いている。空が関心がないときのほうが少ない。

また、立原は風や夜の叙述が少し変わっている。

僕は、朝、この聖な時刻、窓をひらいて、風と一しょにいる。今日は晴れている。影がある。(M-1)

ほかにも「夜の中で」といった表現があった。立原にとって、「空気」や「夜」は空虚なものではなく、実体を持ったものであった。夜も昼も状態でなく、1つの容積をともなったモノであり、二人っきりになることができ、「内部の」身体で触ることができるものだ。

■夢への執着

現実よりも夢の方が美しいというような記述が複数あった。(19, 43, 44, 65, 76, 79, 80)

■外から見た時の様子

先に引用した(TM-5)によると、本との交流は本棚の前にぼんやりたたずんでいたときのことである。また、窓をひらいて、風と一しょにいる、という表現があり、立原の対無生物コミュニケーションは、ひとりで生活をしているときに起こっており、他人からは見るできない。

立原道造の対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ 大文字の TM-1 ～ 22 は対無生物コミュニケーションの箇所、小文字の t-1 ～ 14 は関心の対象を表す箇所

M-1

僕は、朝、この聖な時刻、窓をひらいて、風と一しょにいる。今日は晴れている。影がある。(25)

TM-2

僕は、風の声をきいた。風はよろこびたいとうたつていた。風は倒れかかったまま、いつまでも倒れることが出来なかつた。とほくまで走つて行くと、そこで、不意にとまつた。風はかなしいといつていた。(26)

TM-3

僕は、梶井基次郎の全集を売りに行く。
丸山薫の会へ行くおアシをつくるために。
今日が、告別する梶井のために、明るくはなやかな空であればよい。なのに、低い入梅の空。僕は、この別れる本に、正しい、礼節に富む儀式を捧げることはできない。ただかすかな僕の暗い心で、この本の頁を何度か慌たしく繰らう。(26)

TM-4

この日は梶井基次郎全集二巻と別れる記念日だ。この覚書がせめてもの儀式だ。僕はあれを愛した。おそらく、その本は形を失つても、このあと、あれを愛しつづけるだらう。
では、さやうなら。さやうなら。(27)

TM-5

僕は本棚の前にぼんやりたたずんでいた。それは全く不意だった。僕にまでこのしづかな無生物の夢みている時間が感じられたのだ。この本たちは全く動かうといふ意志さえ禁じられている。而も、これたちのそばを流れているのは時間だ。その時間のなかでこれたちはいかにかなしく夢みさまよっているか。僕にそれがはげしい共感を強ひたのだ。僕はぼんやり立つたままだつた。すると、この壁は茫々とした草原のなかにとりのこされていた。そのなかでいかに切なげに僕らは手をとりあつたか。さうして、いかに僕らの心は凍りつき、畏れでお互に見つめあつたか。僕と本の群と。(28)

TM-6

ものは空間のなかを歩かうという意志さへ禁じられている。それだけますます彼らは時間のなかに汨濫しさまよふ。殆どせつない情欲によつて、机も椅子もランプもさうだ。彼らが知っているのは茫漠とした風景のなかでつららのやうな自分の坐標ばかりだ、いかにそれが見すばらしくいやしげに見えようと、彼らはそれにどうする意志もない。そしてそれにも拘らず、否、それ故にこそそれはくらい責任となつてかれらにまであはれみを含んだみにくい日を注ぐ(28-29)

TM-7

そのあと情ない思ひが溢れ風は木にひっそり添うている。梢をゆすぶらうにも力がないのだ。梢は息をひそめおそれている風にはそれがわかつてももう動くことも出来ないのだ。ちつと天を睨んでいる。笑はうにも笑へないのだ。泪は涸れていた。(29)

TM-8

羊の雲の過ぎるとき
蒸気の雲の飛ぶ毎に

空よ おまへの散らすのは
白いししろい絮の列
(37)

TM-9

青い空には信じられないやうな白い雲のたたずまひがある。わづかな風のそよぎに耳をすましても、それがこの世の正しい言葉を語ってくれる。(43)

TM-10

・・・・・・ずっと向うの山の向うには 私は見た
真白い雲の下で 古い村が笑っているのを
それだけは 夏のままだつた・・・・・・私は歩いた
あのころ おまへが いつしょだつた
(49)

TM-11

ふと 過ぎる・・・・・・あれは頬白 あれはヒワ、鶺鴒
透いた林のあちらには 山のみねのぎざぎざが
ながめている 私を 私たちを 村を_____ (52)

TM-12

すべてに 休みがある ふかい息をつきながら
耳からとほく 風と風とが ささやきかはしている
____ああ この真白い野に 蝶を飛ばせよ！ (52)

TM-13

誘ふやうに ひとりぼつちの木の実は
雨に濡れて 一日甘くひほつていた
(53)

TM-14

深夜 鐘が町の空を鳴り
旅立つて行く (57)

TM-15

夕ぐれに 僕らが 燈をともし
すると 僕らの窓は 夜に向つて
はなしはじめる あの小さな口が
くらいくらい夜に向つて
机をはさんで 僕らはしづかに
眼を見つめあつている ほほえむよりも
もつと 僕らは 信じあつている そして
だまつて いつまでも 僕らの窓と
夜のする ひそかなささやきに耳をすます
夜が更ける
(58)

TM-16

ポプラの木が 大きな身ぶりで 身悶へしている この微風の意味
あたらしい爽やかなものの意味 僕の皮膚はうすい しかし やぶれはしないだらう (61-62)

TM-17

僕だけの愛が　ひとり　僕を灼いている　語りかける言葉は　夜が
きいて　奪つて行つてしまふ　おまへの耳にとどくまへに
しかし　僕は　おまへに　どうして　あかしをもとめよう　僕の愛
はそれを僕にゆるさない
(63)

TM-18

僕の壁が　椅子が　窓が　テーブルが
僕たちの　ひとときを　好ましいほほえみで
みまもつてくれた！　しかし　感謝！
(66)

TM-19

僕は　かへりにここによつて　ひと月くらす約束をする　こんなと
ころで僕が海と対話してくらしたら　どんなにいいことだらう (88)

TM-20

こんなにお天気があることなんか　今まで一度も知らなかつた
くらいだ　(中略)　何ものがこんなに親切に　いい気持だ　僕が　か
へるなんて　どうかしている　(中略)　お風呂へ行つたら　僕をと
らへている病気もかなりいいやうだ　もうすこしいられたらいいの
だがと　あの病気までが　僕にいふ (114)

TM-21

僕はいま大きな息をくりかへす
叢もながくは僕を坐らせない
さようなら　カトリックの公会堂のそばに
非常に明るい燈火がきらめいている　そして
夕映えは　けふも赤く澄みきつた　さようなら
僕のかへつて来る春の日に　おまへたちは一体どんなにして　迎へ
てくれるだらうか (116)

TM-22

僕の愛した丘からの町への　お別れの一眼を　投げにやつて来た
陽はもう沈むばかりになっている　さようなら！　このオレンヂの
霽にみたされた全円よ　微妙な濃淡の浮彫よ　そして南昌山のシル
ウエットよ (116)

TM-23

僕のすきな本は、僕のポケットにちょうどはいる大きさだつた。僕
は、夜と昼の町を、それらの本と一しょに歩いた。(186)

tm-1

これは日記ではないのだ。私はあなたによまれる日を待っているよ
うな手記を作る。私はあなたと一しょにくらす日に、この上にほて
つた白い指が行くことを考へる。(5)

tm-2

雲は流れ消えながら雲なのだ。雲の行為が雲にまで何の関係があら
う。あれは風であり、幻なのだ。あれは私にも、なれるのだ。(7)

tm-3

僕は活動写真の休みの間に、僕の全く反対の側に、一人の女の子が
いるのが気になつてならなかつた。(中略)この少女は、今、何を見
ているのだらう？(中略)僕ははじめてこの少女に愛情を感じた。
(12-14)

tm-4

僕は先刻見た並木道の方へ歩いてた。その尖塔を眺めながら。も
う少女のことは、完全にこの景色に場所をとりかへられていた。僕
はこんな風景にはげしい愛情を感じていた。(14)

tm-5

人が物を考へるには、きつと三つの器官がある。或る人々は、頭で、
或る人々は心臓で。そして、或る人々は手で考へるのだ。それらの
人々は流動し、活発に判断し、何者かをつねに取り上げる。しか
し、その人自身は、或るときは固定したまま、とほくにその指をの
ばしているのだ。(中略)萩原朔太郎調の右の一文。分類学的詭弁！
(18-19)

tm-6

靈魂を得るというのは、僕にとつては、Ding an sich の世界に行
くといふことだ。「視は祈祷」といふリルケの宗教だ。in sich tief
gehen といふことだ。(20)
(補足：Ding an sich は「物自体」、in sich tief gehen は「心の奥底に
行く」という意味)

tm-7

旅から帰ると、部屋は私に囁いた。おまへはここに帰つても、おま
へはここにいないのだと。あの草原！屋根を葺きかへた水車小屋。
(28)

tm-8

私と人との関係は私の内部でとげられる。
変転ほどに急速な変化をなし得るだらうか。(34)

tm-9

この夜があんなに美しいのは、おまへの眼をとほして、僕の眼があ
れらを見ているからだ。(63)

tm-10

僕の内部の　最もふかい　おまへとだけ持つことの出来る　この耳
で！　あるひは　僕の内部のふかい口で　僕はこの風景をのんでい
る　あたかも　この色をした　そして　この香のある　この酒をの
みほさうとするかのように！
しかし　つひに　僕は　この風景にきかれ　そして　この風景にの
みほされる　耳もなく　口もなく、　陽はすつかりしづんだ　うす
やみは　(中略)　どの宝石が　あのやうな歌をうたふのか　歌はし
づかに　弱まつて　見えない寺から　くろい鐘のひびきが　大きな
輪をかいて　ひろがる　いまかへつてゆく家のある　私たちは　さ
ひはひだ

うすい新月　町にともつた　あかりよりも　よわい光の新月　やが
て　おまへは　僕の窓に　また僕の日々のきづいた　とほいかなし
い物語を　うたふだらう　もつと明るく　夜の空にきらめいて　今
夜　おまへが　早くしづんでしまふまで
　僕の心は　戸口に立つて　おまへの　その歌をきく用意した　い
まあの淡い水いろの空で木をおどろかしたおまへ
(97)

tm-11

空はまだ低く雲におほはれて　つめたい東の風が吹いている　ポプ
ラの葉が　こまかくふるへている　その音が　きこえている　ぢつ
とそれを見ていると　樹木にある不思議な性質がわかつて来る　光
のなかで　あのポプラの木のなし得ること！あの木のそよぎは
しづかな水の面で風と光とがすること　なんとよく似ていること

か！ すこしくろい緑に 光は 水の面でするよりも はつき
り対立して 金色を帯びた緑にかがやく (100)

tm-12

こんなにも たやすくすてることの出来た 僕の愛したちひさ
い町よ ふたたび僕のかへる約束が いつの春の日にみたされ
る おまへも僕も知るまい (117)

tm-13

すべての言葉が組み立てられるのはただ信じられた共感の上に
ばかりだ。(195)

tm-14

僕が書きたくてたまらないのは、いちばん淡々とした自己陶醉の歌
である。(202)



石原良純

地図と話し、ダムがなにを思っているか見る男性

神奈川県逗子市出身（1962-）

俳優、テレビタレント、気象予報士。

参照：日本テレビ 月曜から夜ふかし「石原良純を調査 SP」2013. 3. 4 放送

日本テレビ 月曜から夜ふかし「そろそろ年賀状を出す時期な件」2013. 12. 9 放送

参照サイト：ISHIHARA YOSHIKUMI 参照日 2013. 10. 24

URL: <http://www.ishihara-yoshizumi.com/profile.html>

【石原良純の対無生物コミュニケーションの様相】

石原良純の調査の資料は主にテレビの映像である。対象は地図、ダム、新幹線と、他の対物対話者と共通のものが無い。モノの描写の表現は、頑張ってる、思っている、語っている、答える、休んでいる、といった言葉を用いる。

石原良純は地図と話す。

「いつも一緒にいる地図。地図は友達。話し相手になるし。疑問をぶつければ答えてくれるじゃん。こっちが近いよ、とか。それ間違ってるよ、場所間違ってるよ、勘違いしてるよ、とか。自分の頭の中でシミュレーションしてるのが楽しい」(I-4)

これは地図の情報と対話しているとも言えるが、実際の道や地形と対話しているとも考えられる。生物の表層の情報を読みとって対話するほかの対物対話者とすこしちがう。石原はこのコミュニケーションを頭の中のシミュレーションであるとする自覚も持っている。

宮が瀬ダムについては以下のように述べている。

「まずこうやって見上げたら、ここまで近づけるわけよ。これを見あげるだけでも、こんなにコンクリートがたくさん積んである、この大きさとまず、びっくりするわけ。ひと言でいうと、ダムは頑張ってる！ 大自然と人間界の間にいてこう、この頑張ってる感が一番オススメ」(I-1)

これ他には、新幹線が並んでいるところを「力をためて休んでいる」と表現する。このような感覚表現は鉄道ファンたちの間では珍しくないという。石原は全体的に、自然物よりも現代技術でつくられた人工物を好んでいるようである。

■ダムとの自己の身体の同一化

石原はダムが力を入れて頑張ってる水を溜めている様子を、顔と身体で表現する。重力式のダムとアーチ式ダムの違いを手の角度や、足の踏ん張り度で表現し、顔を強ばらせてその力の強さを表す。また、砂の小山が波で崩れる様子表すために、自分もこけるような動作をしているところから、モノと身体感覚が容易につながる様子がうかがえる。また、動作を観察すると、人体の部位とモノの部位が対応しているようである。

ダムが目前にある様子を思い浮かべているときの石原のジェスチャーは興味深い。

「ダムはこのイメージね。(腕を開いて上を見上げながら) この大きなダムを前にしたら、しばらく声も出ないし、身動きできないわけよ。ここでダムが、何を語ってくれるのか、何を思ってるのか、見るんだよ。・・・ま、何も言わないけど」(I-3)

このとき石原はまさに目の前のダムを見ているように、視線が斜め上の一点を見据えている。自分が過去に経験した空間が再体験されているのである。石原は、このように自分の過去に訪れた空間を再体験することができる。かつ対象のダムの身体感覚も脳の中で擬似的に体験することができる。石原の対無生物コミュニケーションは、自分と対象の両者を体験することによってなりたっている。

■外から見た時の様子

石原は地図と話しているときは頭の中でシミュレーションしていると述べ、頑張っているダムに感動しているときも、実際はダムを目の前にして声も出ないし、身動きもできないのであるから、ただ立っているだけである。通常の状態との違いは外から見てもわからない。

※ 備考

石原は映像のなかでは豊かな対無生物コミュニケーションを体験していることがよくわかるが、ブログやホームページの文章には対物対話を示すような記述がほとんど見つからなかった。対物対話者を見つけるためには、本当は文章を調べるよりも会話や映像で調べる方が効率がよいようだ。

石原良純の対無生物コミュニケーションの抜き出し

I-1

「まずこうやって見上げたら、ここまで近づけるわけよ。これを見あげるだけでも、こんなにコンクリートがたくさん積んである、この大きさでまず、びっくりするわけ。ひと言でいうと、ダムは頑張ってる。大自然と人間界の間にいてこう、この頑張ってる感が一番オススメ」・・・宮が瀬ダムについて

I-2

「アーチ式ダムこそ、こうだよ。（手を広げる）こっちの岸壁に捕まって、こっちの岸壁に捕まって、水圧を受けて、こう頑張ってる。（中略）重力式はもっと平らなのよ。両サイドはあるんだけど、あんまり頼りになんないのよ。（オイオイオイと言いながら、身体をフラフラさせる）（中略）重力式はサイドが頼りになんないから、まあこんな感じ。だから、自分で（脚をたたきながら）自分の重力で頑張る」

I-3

ダムはこのイメージね。（腕を開いて上を見上げながら）この大きなダムを前にしたら、しばらく声も出ないし、身動きできないわけよ。ここでダムが、何を語ってくれるのか、何を思ってるのか、見るんだよ。・・・ま、何も言わないけど。

I-4

いつも一緒にいる地図。地図は友達。話し相手になるし。疑問をぶつければ答えてくれるじゃん。こっちが近いよ、とか。それ間違ってるよ、場所間違ってるよ、勘違いしてるよ、とか。（中略）自分の頭ん中でシミュレーションしてるのが楽しい。

I-5

「この写真は昨年夏、新幹線の大井車両基地を訪れた時のものです。（中略）N700系が目前にある！感激で、思わずほおずりました。「このフォルムが風を切っているのか」と、普段見られないアングルからボディーを見たりして、最高の体験でした。」

I-6

「力はためて出るんだよ！ だから今はみんな並んで休んでるんだよ」・・・停車している新幹線が並んでいるところを見て



宮沢賢治

擬人化された自然物とされていない自然物が話す

岩手県 花巻市出身 (1896-1933)

童話作家、詩人、教師

参考文献：

宮沢賢治著『新編 風の又三郎』1989, 新潮文庫・・・(風)

宮沢賢治著『ポラーノの広場』1995, 新潮文庫・・・(ポ)

宮沢賢治著, 天沢退二編『宮沢賢治詩集』1991, 新潮文庫・・・(詩)

青空文庫, 宮沢賢治『鹿踊りのはじまり』・・・(鹿)

底本：「校本宮澤賢治全集 第十一巻」筑摩書房

1974 (昭和 49) 年 9 月 15 日初版発行

URL: http://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/1923_10183.html

参照日 2014. 1. 12

青空文庫, 宮沢賢治『狼森と叢森、盗森』・・・(狼)

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990 (平成 2) 年 5 月 25 日発行

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社, 1924 (大正 13) 年 12 月 1 日

入力：土屋隆, 2005 年 1 月 26 日作成

URL: http://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/43753_17658.html

参照日 2014. 1. 12

Wikipedia - 春と修羅, 2014. 1. 17 参照

URL: <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%A5%E3%81%A8%E4%BF%AE%E7%BE%85>

宮沢賢治の対無生物コミュニケーション

宮沢賢治の童話のなかでは、人間が風や花に話しかけ、また、それらも人間に話しかける。もしくは、自然物が独り言のように話している場面も多い。擬人化のまったくない童話も多いが、すべて擬人化されている物語もあり、また、最も興味深いのは擬人化したものとそうでないものが入り交じる話も同じくらいの割合で存在することである。

モノの描写は以下のような言葉が使われた。

身体を横たえる、手を伸ばす、振る、伏せる、息をする、笑う、面白そう、悪く思わない、悪口を返す、自分ら同志で相談する、つぶやく、笑う、かなしむ、寝ているだまっている、語る、威張る、思う、こたえる、受け取らない、どなる、

■擬人化されるモノとされないモノが同様に扱われる

『狼森と叢森、盗森』は、四つの森とそれらに囲まれた平らなところを開墾してゆく人間たちの話である。この話のなかでは、狼森と叢森は、森自体として人間たちに話すのに、盗森だけが突然なんの説明もなく擬人化される。真っ黒な大きな足を持ったまっくろな手の長い大きな男である盗森は、はたしてそれは大きな男であるのか森であるのか、はっきりしないまま話が進められる。さらに黒坂森は「形を出さないで声だけで」人間に粟を盗んだ犯人を教え、最後には銀の冠をかぶった岩手山が登場して皆を説得する。擬人化されるモノと擬人化されないモノが混在して、そこになんの説明も与えない。

賢治の童話のなかで無機物や動物が話している場面にはふたつのタイプがある。

ひとつはモノや動物を人格を与えて人のように語らせる擬人化。たとえば、グリム童話で犯罪者の役をオオカミにしたり、被害者を羊にしたり、日本の昔話で、猿かに合戦でずる賢い人格を猿に、復讐するものを臼や馬糞や蜂にしたりするようなもので、自然界の動物の役割に例えたものである。だから、犯罪者の役はオオカミでも、熊でも狐でもよい。もうひとつは、モノそのものが話しているタイプであり、ここではモノ自体が自分の気持ちを話す。

■身体をつかったコミュニケーション

童話のなかに、身体を使ってコミュニケーションをとる場面がある。『タネリはたしかにいちにち噛んでいたようだった』では、森の中を歩きながら、木や花や墓などを相手に一人でごっこあそびをする少年が主人公である。

タネリは思わず、また藤蔓を吐いてしまって、勢いよく湿地のへりを低い方へつたわりながら、その牛の舌の花に、一つずつ舌を出して挨拶してあるきました (M-12)

こうした一人遊びは誰にも見られないので、主観的な世界を外部の世界に拡張し、好きなだけその中に没頭することができるのである。

■詩の中に表れる対話型の思考、頭の中で2人に分かれて会話

「春と修羅」の詩集の中ではカッコに入った、言葉とカッコの無い言葉が交互に繰り返される。ほとんどの詩がその様式をもっている。カッコ付きの言葉とカッコなしの言葉が高さを変えて、2人の人物がいるかのようである。カッコ内の声に怒ったり、言い訳したりするものもあれば、ただ2人の人物が独立に話しているようなものもある。「春と修羅」について賢治は詩集でなく「心象スケッチ」であると認識していたが、この中では自分ともう1つの声との対話が自動筆記のように表現されており、リアリティのある内面世界をうかがうことができる。

大てい月がこんなやうな暁ちかく

巻積雲にはひるとき・・・

((おいおい あの顔いろは少し青かつたよ))

だまつていろ

おれのいもうとの死顔が

まつ青だらうが黒からうが

きさまにどう斯う云はれるか

(中略)

((もひとつきかせてあげよう

ね じつさいね

あ那时的眼は白かつたよ
すぐ睨りかねていたよ))
まだいつているのか
もうぢきよるはあけるのに
(中略)
((みんなむかしからのきやうだいなのだから
けつしてひとりをいのつてはいけない))
ああ わたくしはけつしてさうしませんでした
あいつがなくなつてからあとのよるひる
わたくしはただの一どたりと
あいつだけがいいとこに行けばいいと
さういのりはしなかつたとおもひます
(後略)
(M-13)

カッコの内外ではどちらも誰が言っている言葉かはっきり示されていない。別の詩では、カッコの内外で両方とも賢治の一人称らしき「わたくし」という言葉が入っている。このとき賢治は頭の中で1人で2人に分かれて会話しているのである。妹になりかわってしゃべるときもあり、また、誰か第三者に喋らせるときもある。

■客観的叙述と暗喩との区別が曖昧

賢治の小説の中では、客観的叙述と暗喩の区別が曖昧だ。自ら意図的にレトリックの混乱の世界に迷い込もうとしているようでもある。これは暗喩も個人的体験の一部になっているためである。実際、主観の世界ではそれらを特別な努力をして分ける必要はないのである。「春と修羅」の副題は“mental sketch modified”「(部分的に)修正された心象スケッチ」である。「やまなし」の冒頭では、「小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈です。」という一文から物語が始まる。このように賢治は、自分の頭の中で起こったことを幻と自覚してはいる。

■恍惚感

童話にはエクスタシーの場面がすくなく見られる。

一郎は顔いっぱい冷たい雨の粒を投げつけられ風に着物をもって行かれそうになりながらだまってその音をききすましじっと空を見上げました。

すると胸がさらさらと波をたてるように思いました。けれども又じっとその鳴って吠えてうなってかけて行く風をみていますと今度は胸がどかどかなってくるのでした。昨日まで丘や野原の空の底に澄みきってしんとしていた風が今朝夜明け方俄かに一斉に斯う動き出してどんどんどんタスカロラ海床の北のはじめをめがけて行くことを考えますともう一郎は顔がほてり息もはあ、はあ、なって自分まで一緒に空を翔けて行くような気持ちになって胸を一ぱいはって息をふっと吹きました。(m-4)

虔十はいつも縄の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくりあるいているのでした。雨の中の青い藪を見てはよるこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見付けてははねあがって手をたたいてみんなに知らせました。(中略)風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは虔十はうれしくてうれしくてひとりでに笑って仕方ないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立っているのです。時にはその大きくあいた口の横わきをさも痒いよなふりをして指でこすりながらはあはあ息だけで笑いました。(m-5)

虔十は口を大きくあけてはあはあ息をつきからだからは雨の中に湯気を立てながらいつまでもいつまでもそこに立っているのです。(m-7)

その木の下で、一人の子供の影が、桐の向うのお日様をじっとながめて立っていました。(m-8)

じっと外を見ている若者の唇は笑うように又泣くようにかすかにうごきました。それは何か月に話し掛けているかとも思われたのです。(m-9)

■空の特徴的な描写

賢治の空の描写は、普通空にはあるはずのない光や音声がついており、動的であることが多い。このような空を、複数の話のなかで賢治はくり返し描く。空が賢治にとって特別な表情を見せていることがうかがえる。

空がまっ白に光って、ぐるぐる廻り、そのこちらを薄い鼠色の雲が、速く速く走っています。そしてカンカン鳴っています。(m-1)

空が光ってキーンキーンと鳴っています。(m-2)

空が旗のようにぱたぱた光って翻り、火花がパチパチパチッと燃えました。(m-3)

わたくしはずいぶんすばやく汽車からおりた
そのために雲がぎらつとひかつたくらいだ。(m-10)

■外から見た時の様子

外から見たときの様子ははっきりとわかる叙述はなかった。

宮沢賢治の対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ 大文字の M-1 ～ 27 は対無生物コミュニケーションの箇所、小文字の m-1 ～ 24 は関心を表す箇所

M-1

「あ、山山のへっぴり伯父。」嘉ッコがいきなり西を指しました。西根の山山のへっぴり伯父は月光に青く光って長々とからだを横たえました。(風, 154)『十月の末』

M-2

風が来ると、芒の穂は細い沢山の手をいっぱいばして、忙しく振って、
「あ、西さん、あ、東さん。あ西さん。あ南さん。あ、西さん。」なんて云っている様でした。(風, 279)

M-3

少し強い風が来る時は、どこかで何かが合図をしてでもいるように、一面の草が、それ来たとみなからだを伏せて避けました。(中略)草がみな一斉に悦びの息をします。(風, 279-280)

M-4

はるかな西の碧い野原は、今泣きやんだようにまぶしく笑い、向こうの栗の木は、青い後光を放ちました。(風, 283)

M-5

たばこの木はもう下の方の葉をつんであるので、その青い莖が林のようにきれいにならんでいかにも面白そうでした。(風, 285)

M-6

風車なら風を悪く思っちゃいないんだよ、勿論時々こわすこともあるけれども、廻してやる時の方がずっと多いんだ。風車ならちっとも風を悪く思っていないんだ。(風, 290)

M-7

「馬鹿。」私が少し大胆になって悪口をしました。
「馬鹿。」崖も悪口を返しました。
「馬鹿野郎。」慶次郎が少し低く叫びました。
ところがその返事はただごそごそとつぶやくように聞こえました。どうも手がつけられないと云ったようにも又そんなやつらにいつまでも返事してられないなと自分ら同志で相談したようにも聞こえました。(中略) うしろでハッハッハと笑うような声もしたのです。(192-193)

M-8

そして雲が青く光るときは変に白っぽく見え、桃いろに光るときは何かかわらっているように見えるのです。(245)

M-9

ブドリは受話器を置いて耳をすましました。雲の海はあっちでもこっちでもぶつぶつぶつぶ呟いているのです。よく気をつけて聞くとやっぱりそれはきれぎれの雷の音でした。(246)

M-10

「ね、お前たちは何がそんなにかなしいの。」と野ばらの木にたずねました。
野ばらは赤い光の点々を王子の顔に反射させながら
「今云った通りです。十力の金剛石がまだ来ないのです。」(ボ, 59)

M-11

「おい、柏の木、おいらおまえと遊びに来たよ。遊んでおくれ。」(中略)「まだ睡てるのか、柏の木、遊びに来たから起きてくれ。」柏の木が四本とも、やっぱりだまっていたので、タネリは怒って云いました。(ボ, 249)

M-12

タネリは思わず、また藤蔓を吐いてしまって、勢いよく湿地のへりを低い方へつたわりながら、その牛の舌の花に、一つずつ舌を出して挨拶してあるきました。(中略)そこらはしんと鳴るばかり、タネリはどうとう、たまらなくなって、
「おーい、誰か居たかあ。」と叫びました。すると花の列のうしろから、一びきの茶色の墓が、のそのそ這ってでてきました。タネリは、ぎくっとして立ちどまってしまいました。それは墓の、這いながらかんがえていることが、まるで遠くで風でもつぶやくように、タネリの耳にきこえてきたのです。
(どうだい、おれの頭のうへは。中略)
「火なんか燃えてない。」タネリは、こわごわ云いました。(ボ, 250-251,『タネリはたしかにいちにち囁んでいたようだった』)

M-13

大てい月がこんなやうな暁ちかく
巻積雲にはひるとき・・・
((おいおい あ顔いろは少し青かつたよ))
だまつている
おれのいもうとの死顔が
まつ青だらうが黒からうが
きさまにどう斯う云はれるか
(中略)
((もひとつきかせてあげよう
ね じつさいね
あのときの眼は白かつたよ
すぐ睨りかねていたよ))
まだいつているのか
もうちきよるはあけるのに
(中略)
((みんなむかしからのきやうだいなのだから
けつしてひとりをいのつてはいけない))

ああ わたくしはけつしてさうしませんでした
あいつがなくなつてからあとのよるひる
わたくしはただの一どたりと
あいつだけがいいとこに行けばいいと
さういのりはしなかつたとおもひます
(後略)
(詩, 120-121, 「青森挽歌」)

M-14

わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いてみた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行はれてみた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました。(鹿)

M-15

この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体《きたい》な名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すっかり知っ

ているものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの巨《おお》きな巖《いわ》が、ある日、威張《いば》ってこのおはなしをわたくしに聞かせました。(狼)

M-16

けれども森にはまだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思っているだけでした。(狼)

M-17

「ここへ畑起してもいいかあ。」
「いいぞお。」森が一斉《いっせい》にこたえました。
みんなは又《また》叫びました。
「ここに家建ててもいいかあ。」
「ようし。」森は一ぺんにこたえました。
みんなはまた声をそろえてたずねました。
「ここで火たいてもいいかあ。」
「いいぞお。」森は一ぺんにこたえました。
みんなはまた叫びました。
「すこし木《きい》貰《もら》ってもいいかあ。」
「ようし。」森は一斉にこたえました。(狼)

M-18

その人たちのために、森は冬のあいだ、一生懸命《いっしょうけんめい》、北からの風を防いでやりました。(狼)

M-19

そこでみんなは、てんでにすきな方へ向いて、一緒《いっしょ》に叫びました。
「たれか童《わらし》やど知らないか。」
「しらない」と森は一斉にこたえました。
「そんだらさがしに行くぞお。」とみんなはまた叫びました。
「来お。」と森は一斉にこたえました。
「おらの道具知らないかあ。」
「知らないぞお。」と森は一ぺんにこたえました。
「さがしに行くぞお。」とみんなは叫びました。
「来お。」と森は一斉に答えました。
「おらの栗知らないかあ。」
「知らないぞお。」森は一ぺんにこたえました。
「さがしに行くぞ。」とみんなは叫びました。
「来お。」と森は一斉《いっせい》にこたえました。(狼)

M-20

黒坂森は形を出さないで、声だけでこたえました。

「おれはあけ方、まっ黒な大きな足が、空を北へとんで行くのを見た。もう少し北の方へ行行って見ろ。」そして栗餅のことは、一言も云わなかったそうです。そして全くその通りだったろうと私も思います。なぜなら、この森が私へこの話をしたあとで、私は財布《さいふ》からありっきりの銅貨を七銭《しちせん》出して、お札にやったのですが、この森は仲々受け取りませんでした、この位気性がさっぱりとしていますから。(狼)

M-21

すると森の奥から、まっくろな手の長い大きな大きな男が出て来て、まるでさけるような声で云いました。
「何だと。おれをぬすとだと。そう云うやつは、みんなたたき潰《つぶ》してやるぞ。ぜんたい何の証拠《しょうこ》があるんだ。」
「証人がある。証人がある。」とみんなはこたえました。

「誰《たれ》だ。畜生《ちくしょう》、そんなこと云うやつは誰だ。」と盗森は咆《ほ》えました。
「黒坂森だ。」と、みんなも負けずに叫びました。
「あいつの云うことはてんであてにならん。ならん。ならん。ならんぞ。畜生。」と盗森はどなりました。
みんなももっともだと思ったり、恐《おそ》ろしくなったりしてお互《たがい》に顔を見合せて逃げ出そうとしました。
すると俄《にわか》に頭の上で、
「いやいや、それはならん。」というはっきりした巖《おごそ》かな声がありました。
見るとそれは、銀の冠《かんむり》をかぶった岩手山でした。盗森の黒い男は、頭をかかえて地に倒《たお》れました。
岩手山はしづかに云いました。
「ぬすとはたしかに盗森に相違《そうい》ない。おれはあけがた、東の空のひかりと、西の月のあかりとで、たしかにそれを見届けた。しかしみんなももう帰ってよかろう。栗《あわ》はきっと返させよう。だから悪く思わんで置け。一体盗森は、じぶんで栗餅《あわもち》をこさえて見たくてたまらなかったのだ。それで栗も盗んで来たのだ。はっはっは。」
そして岩手山は、またすましてそらを向きました。男はもうその辺に見えませんでした。(狼)

M-22

しかしその栗餅も、時節がら、ずいぶん小さくなったが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまっくろな巨《おお》きな巖《いわ》がおしまいに云っていました。(狼)

m-1

空がまっ白に光って、ぐるぐる廻り、そのこちらを薄い鼠色の雲が、速く速く走っています。そしてカンカン鳴っています。(風,277)

m-2

空が光ってキインキインと鳴っています。(風,280)

m-3

空が旗のようにばたばた光って翻り、火花がパチパチパチッと燃えました。(風,280)

m-4

一郎は顔いっぱい冷たい雨の粒を投げつけられ風に着物をもって行かれそうになりながらだまってその音をききすましじっと空を見上げました。
すると胸がさらさらと波をたてるように思いました。けれども又じっとその鳴って吠えてうなってかけて行く風をみていますと今度は胸がどこかかなくなってくるのです。昨日まで丘や野原の空の底に澄みきってしんとしていた風が今朝夜あけ方俄かに一斉に斯う動き出してどんどんどんタスカロ海床の北のはじめがけて行くことを考えますともう一郎は顔がほてり息もはあ、はあ、なって自分まで一緒に空を翔けて行くような気持ちになって胸を一ぱいはって息をふっと吹きました。(風,304-305)

m-5

虔十はいつも縄の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくりあるいていました。雨の中の青い藪を見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見付けてははねあがって手をたたいてみんなに知らせました。(中略) 風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは虔十はうれしくてうれしくてひとりでに笑えて仕方がないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ

息だけついてごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立っているのです。時にはその大きくあいた口の横わきをさも痒いよなふりをして指でこすりながらはあはあ息だけで笑いました。(風, 175)

m-6

虔十は一ぺんにあんまりがらんとなったのでなんだか気持ちが悪くて胸が痛いように思いました。(風, 179)

m-7

虔十は口を大きくあけてはあはあ息をつきからだからは雨の中に湯気を立てながらいつまでもいつまでもそこに立っているのです。(風, 180)

m-8

その木の下で、一人の子供の影が、桐の向うのお日様をじっとながめて立っていました。(ボ, 44)

m-9

じっと外を見ている若者の唇は笑うように又泣くようにかすかにうごきました。それは何か月に話し掛けているかとも思われたのです。(ボ, 260)

m-10

わたくしはずいぶんすばやく汽車からおりた
そのために雲がぎらつとひかつたくらいだ。(詩, 53, 春と修羅)

m-11

けふのうちに
とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ
(あめゆじゆとてちてけんじや)
うすあかくいつさう陰惨な雲から
みぞれはびちよびちよふつてくる
(あめゆじゆとてちてけんじや)
後略
(91, 詩, 「永訣の朝」)



岩 崎 紘 昌

アンティークに「見せてください」と、声をかける

北海道札幌市出身（１９４６－）

西洋アンティーク評論家、アンティークショップ経営者

参考文献：男の隠れ家 MONO 逸品礼賛 Vol.2 巻頭エッセイ 2013.10.12・・・（男）

岩崎紘昌『岩崎紘昌のだから骨董屋は面白い』1999, 山海堂・・・（骨）

岩崎紘昌の対無生物コミュニケーション

■ ‘古い物の過去の生き方’ と、モノへの声かけ

岩崎は、はっきりと対無生物コミュニケーションをしていると言い切れる箇所はなく、かすかにうかがえる程度であった。

店に入って来ると、店主は、脚がどの程度この道の経験者であるかが、瞬時に判断る。(中略) 慣れている脚ほど、店に入ると、「見せてください」と言う。このひと言は、主人に言うのではない。百年を経ても生き続けてきた”物“に言うひと言だと、私は、思っている。(I-2)

ここでは文末に「私は、思っている」と、表現が断定的でなく、自分の感覚を一般に伝えるために、自分の感覚を客観視する姿勢がある。しかし、「古い物の過去の生き方」(I-1)という表現や、モノが箱に入れっぱなしにされていることを想像して、「寂しいものだろう」といたわりの気持ちを見せていることから、モノに人生と感性があると感じている様子がうかがえる。また、夢への執着を見せるエピソードがあり(骨 162)、これはほかの対物対話者にも時おり見られる傾向である。

実は、岩崎のように対物対話者が持っている傾向をいくつも持ちながらも、作品の大部分のなかにはそれが描かれていないということもよくある。石原も、彼の文章のなかには対無生物コミュニケーションを描いたものは見付けられず、たまたま映像という媒体があったから発見できたのである。ただし、岩崎の著作の中には意味不明な箇所など見当たらず、内的世界の印象に没頭している様子はなかった。

岩崎紘昌の対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ 大文字の I-1 ～ 3 は対無生物コミュニケーションの箇所、小文字の i-1 ～ 2 は関心を表す箇所

I-1

どっちが良い悪いではなく、古い物の宿命のようなものである。古い物の過去の生き方で骨董と生活骨董は分かれる。(男)・・・(「生活骨董」と「美術骨董」の分類について)

I-2

店に入って来ると、店主は、脚がどの程度この道の経験者であるかが、瞬時に判断る。(中略) 慣れている脚ほど、店に入ると、「見せてください」と言う。このひと言は、主人に言うのではない。百年を経ても生き続けてきた”物“に言うひと言だと、私は、思っている。(男)

i-1

私は仏画をいろいろと見ているが、古い新しいにかかわらず、ある見方を信じている。それは、私が「仏様をみる」のではなく、「仏様が私をみてくださる」という感触である。(骨, 132)

i-2

売った先々での扱い方にまで、気がいくような時がある。時々は見つめられているのだろうか？ たまには、ほこりを払ってもらっているのだろうか？ 箱に入って放りっぱなしの十字架も寂しいものだろう。(骨, 135)



西岡 常一

仕事道具の気持ちを代弁する

奈良県 斑鳩町 法隆寺西里出身（1908-1995）

法隆寺の昭和大修理、薬師寺の伽藍復興をした宮大工。

参照サイト：Wikipedia 西岡常一

URL: <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E5%B2%A1%E5%B8%B8%E4%B8%80>

参照日 2014. 1. 10

西岡常一の対無生物コミュニケーション

西岡常一に関しては著作の原本を参照しておらず、Wikipedia からの情報を使っているの、全体の著作からのごく一部しか引用していない。

西岡は、建築にまつわる道具や材料や部材を表現するために擬人化を用いる。対象がなぜそうであるか、よいか悪いかを理解するときに擬人化を用いる。「～のようだ」などの直喩でなく、断定で述べる。

「力で切るんじゃなしに、ノコギリで切るということ、よいわれますわ。

力入れて切ったらあかんちゅうて、ノコギリ自身が、おれはこんだけしかよう切らんというのをまず知ってやることですわ。」(N-2)

「(寺社建築で) 一番悪いのは日光東照宮です。装飾のかたまりで…芸者さんです。細い体にペラペラかんざしつけて、打ち掛けつけて、ぼっくりはいて、押したらこける…」(n-2)

■共感覚

モノの強さや質の良し悪しを表現する文脈では、擬人化をともなった共感覚が見られる。(共感覚とは文字に色が見える、など、ある刺激を知覚するときに異なる刺激も知覚する現象である)

「古代の釘はねっとりしとる。これが鎌倉あたりから次第にカサカサして、近世以降のはちゃらちゃらした釘になる。」(n-1)

ここでは対象の視覚情報から、対象の質感の刺激を知覚しているようでもあるが、「ねっとり」や「ちゃらちゃら」は質感だけでなく人間性を表す言葉でもある。視覚情報や経験から、対象の物質的な特質だけでなく、人間の感情を知覚するという形の共感覚が、対無生物コミュニケーションという現象にも関係していると考えられる。

西岡常一の対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ N-1 ～ 3 は対無生物コミュニケーションの箇所、n-1 ～ 3 は知覚の特徴的な箇所

N-1

「そんなことしたら、ヒノキが泣きよります。」

・・・法輪寺三重塔再建で竹島卓一教授が鉄骨補強を唱えた時の反論

西岡・青山「斑鳩の匠 宮大工三代」まえがき

N-2

「力で切るんじゃなしに、ノコギリで切るということ、よいわれますわ。

力入れて切ったらあかんちゅうて、ノコギリ自身が、おれはこんだけしかよう切らんというのをまず知ってやることですわ。」

西岡・青山「斑鳩の匠 宮大工三代」p.244

N-3

「木というやつはえらいですがな、泰然として台風が来るなら来い、雷落ちるなら落ちよ。自然の猛威を受けて二千年のいのちがありますねん。そういうこと考えると神様ですがな」

山崎佑次「宮大工西岡常一の遺言」p.81

n-1

「古代の釘はねっとりしとる。これが鎌倉あたりから次第にカサカサして、近世以降のはちゃらちゃらした釘になる。」

「宮大工の棟梁・西岡常一 口伝の重み」p.158

n-2

「(寺社建築で) 一番悪いのは日光東照宮です。装飾のかたまりで…芸者さんです。細い体にペラペラかんざしつけて、打ち掛けつけて、ぼっくりはいて、押したらこける…」

西岡常一「木に学べ 法隆寺・薬師寺の美」p.22

n-3「そうすれば、道具は、頭で思ったことが手に伝わって道具が肉体の一部になるという事や。わたしらにとって、道具は自分の肉体の先端や。」

西岡常一「木に学べ 法隆寺・薬師寺の美」p.33



星野 富弘

草花の気持ちを代弁し、教訓を得る

群馬県勢多郡東村出身（1946-）

詩人、画家。

群馬大学を卒業し、中学校の体育教師になるが、クラブ活動の指導中、頸椎を損傷し、手足の自由を失う。入院中に口に筆をくわえて文や絵を描くことを始める。草花に呼びかけるような文章や、花が自分を見て笑っているといったような記述をする。星野にとって花たちは母親のような友人のような身近な存在である。星野は彼らの健気に生きる姿に励ましと教訓を得る。

星野富弘『星野富弘 愛の贈り物 新編 風の旅』2013, 学研マーケティング

星野富弘の対無生物コミュニケーション

星野は身体付随で長い時間を病室で過ごししながら、見舞いにもらった花を描くことをして過ごす。

花たちは優しく深い心を持った存在として描かれる。花を表す言葉として、寂しい、楽しい、笑う、ソップを向く、ささやく、知っている、きまま、話す、申し訳なさそうに、ひっそりと生きる、待つ、精一杯、一生懸命、などの表現が用いられ、星野は花たちの姿と自分の運命を重ねあわせ、励ましを得ているようである。

星野自身が花がはっきりと言葉を交わしているという叙述は、調査の範囲では見つからなかった。星野の花に対する表現は、「おまえも人間に似ているなあ」「友達のように思っている」と、自分が一方的に見ているという視点を加え、直喩を用いて断言しない。

あおむけに寝たまま、次から次へと人の悪口を言った。右目の隅で、桃の花が笑いながら咲いていた (H-2)

これは花が星野を暖かい眼差しで見ているともとれるが、そうでなく単に自分の悪さを、花の善良さに対比しているともとれる。花は直喩を用いて擬人化され、花たちへの語りかけは独り言をつぶやくように表現される。ここでは、モノと一対一の関係を築いているのではなく、花は花として独立しており、特に自分だけに愛情を注いでいるのではないらしい様子がうかがえる。

「土の中の会話」というネギ同士の会話を描いた作品では、ネギがネギとしての言葉を語っているが、内容は自分に向けてでなく、人間社会に対してのものであるようだ。他の対物対話者からは、このように反文明主義的表現をするモノは見つかっていない。しかし、そのなかでも「ウッシャ」「へえー」「それもそうだね」といった間の手は、必然性がないのでネギの気持ちとして描かれている可能性が高い。

ほかの対物対話者には、モノの気持ちを自分が代弁してあげなくてはいけない、という必死さのようなものがつきまとうのに対し、星野の代弁にはそれがなく、おおらかな語り口である。



星野富弘の対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ H-1 ～ 3 は対無生物コミュニケーションの箇所

H-1

むらがって
咲いていると
楽しそうで
ひとつひとつの
花は淋しい顔をしている
おまえも人間に
似ているなあ らん, 1978

H-2

あおむけに寝たまま、次から次へと人の悪口を言った。右目の隅で、桃の花が笑いながら咲いていた (34)

H-3

いくら見なれた花でも「この花はこういう形をしているんだ」などと先入観をもって描き始めると、花にソッポを向かれてしまう (44)

H-4

竹やぶの葉のささやきを聞きながら、絵を描いていると、午前中はあつという間に終わってしまう (46)

H-5

ひとつの花のために
いくつの葉が
冬を越したのだろう
冬の風に磨かれた
椿の葉が
輝いている
母のように
輝いている
(54) つばき, 1980

H-6

ほんとうのことなら
多くの言葉は
いらない
野の草が
風にゆれるように
小さなしぐさにも
輝きがある
(60) 1980, しおん

H-7

花は
自分の美しさを
知らないから
美しいのだろうか
知っているから
美しく咲けるの
だろうか
(61) 1981, てっせん

H-8

渡良瀬川はその中をきままにうねりながら流れている (65)

H-9

くしゃみもせず、寝がえりもうたずに静かに横たわってしてくれる自然の腋の下で、人々が平和に暮らしている。

H-10

言葉でいうよりも、庭に出れば茶色になったがくあじさいの花が父に話しかけてくれるだろうと思ったからである。(中略) あやうく父の手をまぬがれた幾本かの細い枝に、うす紫の花が申し訳なさそうに咲いている (72-73)

H-11

おまえを大切に 摘んでゆく人がいた
臭いといわれ
きらわれ者のおまえだったけれど
道の隅で歩く人の足許を見上げ
ひっそりと生きていた
いつかおまえを 必要とする人が
現れるのを待っていたかのように
おまえの花
白い十字架に似ていた
(80) 1980, どくだみ

H-12

木は自分で
動きまわることができない
神様に与えられたその場所で
精一杯 枝を張り
許された高さまで
一生懸命 伸びようとしている
そんな木を
私は友達のように
思っている (88)
1979, つばき

H-13

いつだったか きみたちが
空をとんでゆくのを見たよ
(90) たんぽぽ, 1980

H-14

人間は病気になるなければ
百二十五才まで 生きられるんだって (ウッシャ)
そうゆうことを 書いた本が売れてるそうだよ (へえー)
だけど 病気がなくなったらさあ
あの人たちのことだもの からだを酷使して
かえって早死にしちゃうんじゃないかねえ (それもそうだね)
そろそろ ねようか 冬は 眠るにかぎるよ
そうだねえ 春まで おやすみなさい
(土の中の会話)



三遊亭あほまろ

空の表情を擬人化して表現する男性

庶民文化研究家 写真家

15 年間、毎朝欠かさず浅草寺境内と界隈を愛犬と散歩し、毎日同じアングルの写真を撮ってブログにのせる。よって、ブログには膨大な数の写真がアップされている。

(1) Facebook 三遊亭あほまろ

URL: <https://www.facebook.com/ahomaro.sanyutei?newwindow=true>

参照日 2013. 12. 20

(2) あほまろの秘密基地 昭和浪漫風俗考

URL: <http://www.edo.net/edo/himitsu/>

参照日 2013. 12. 20

(3) あほまろとナナちゃんの 今朝の浅草日記

<http://www.edo.net/edo/0204diary/2012/120102.html>

参照日 2013. 12. 20

三遊亭あほまろの対無生物コミュニケーション

■空への関心と擬人化

三遊亭あほまろ氏は空の表現に擬人法を用いる例が見られた。空の様子が人間の感情で表現されている。

今朝の「影」。寒いので朝焼けも遠慮さみ。12月7日，(AH-1)

今朝の「影」。鈍色の空に垂れ込めた冬雲に、恥じらいの薄紅色がほんのりと浮かんでいるようでした。12月8日，(AH-2)

スカイツリーの写真をたくさん撮っているが、それは実際は背景の空をとっているようでもある。Facebook の中では、雲と空の具合から、天気を予想したり地震を予想しようとしたりしており、空に高い関心がうかがえる。

彼のネーミングセンスの言葉の選び方は独特で、空や雲のことを「影」と呼び、(そこには「季節を感じさせる徴」というような意味も込められているらしい)スカイツリーの雲と光の現象にもそれぞれ命名する。「空のデブ」、「天空半影」など、何の説明もなくいきなりそのような使い込んだ愛称を使うのは、彼が頭の中でなんどもその愛称を用いており、定着しているからだ。これは、宮沢賢治の童話で、「山々のへっぴり伯父」などという愛称をいきなり差し込んでくるようなリズム感と類似する。以下の例からも、言葉遊びが盛んなことがわかる。同じ読みに違う感じや意味を当ててみたり、対象の性格や表情をうかがって愛称を与えるなど、頭の中ではいつも言葉をこねくり回す癖があるようだ。

ah-3

駄作・無駄・駄菓子・駄洒落と、冠に付いている“駄”は、駄目の“駄”でもあり、駄々をこねた幼稚な子供の冠でもありますね。大人になって、再び“駄”に執着するってのも、結構楽しいのかもしれない。(2)

ah-4

金が新年 (3)

■収集癖

あほまろ氏は昭和時代の葉の箱、ホーロー看板、シール、面子などの収集家であり、展示施設を個人で運営しているが、それらの収集物に対しては、「クダらないもの」「ガラクタ」と愛情を込めて呼んでいる。

■毎日繰り返される散歩と写真撮影

あほまろ氏は15年間1日も欠かさずに、早朝に愛犬と浅草寺を散歩し、界隈の写真撮影をしている。奇妙なことには、毎朝同じアングルから浅草寺や雷門通りの写真を撮り(たとえば、ah-5のような金属の取っ手の写真)ブログにアップしている。よって、ブログは毎日更新されるものの、内容は毎日ほとんど同じである。

三遊亭あほまろの対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ AH-1 ～ 4 は対無生物コミュニケーションの箇所、ah-1 ～ 4 は行動・知覚的特徴的な箇所

AH-1

今朝の「影」。寒いので朝焼けも遠慮済み。12月7日,(1)

AH-2

今朝の「影」。鈍色の空に垂れ込めた冬雲に、恥じらいの薄紅色がほんのりと浮かんでいるようでした。12月8日,(1)

AH-3

(収集してきたホーロー看板や葉の箱について)

気づかなければ、一生日の目を見なかったガラクタを眺めていると、一つ一つのモノたちが、あほまろの礎を築いてくれたようにも見えてくるのです。(中略) そんな“ダサイモノ”たちに囲まれていると、仕事をリタイアしたあほまろが、再び真剣に取り組める課題を見いだしたような喜びでいっぱいです。そんな“ダサイモノ”たちの過去の栄光をもう一度考えてあげましょう。(2)

AH-4

メインのマックがご臨終してしまった……。居間、ヤマト宅急便がマックプロ専用の輸送箱で御出棺、ち～ん！

今日からしばらく予備機で質素に過ごさざるをえない(涙)。2012年11月3日,(1)

ah-1

雨が降ろうが槍が降ろうが、石にかじりついてあほまろとナナちゃんの朝の散歩は続けているのさ(^_?)vなんて言ったら偉そうだけど、15年間一日も欠かさず(出張の時以外)写真を撮りながら歩いているのです。6月12日,(1)

ah-2

毎日、写真を撮っていると、犬や猫も嬉しい時には笑顔になる瞬間があるのですよ。あ、今、絶対に笑ってる！,2011年5月23日,(1)

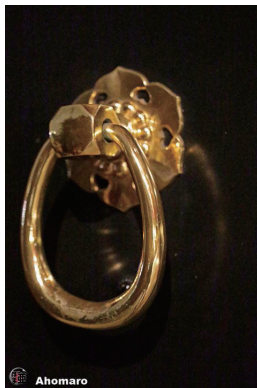
ah-3

駄作・無駄・駄菓子・駄洒落と、冠に付いている“駄”は、駄目の“駄”でもあり、駄々をこねた幼稚な子供の冠でもありますね。大人になって、再び“駄”に執着するってのも、結構楽しいのかもしれない。(2)

ah-4

金が新年(3)

ah-5



13.12.20



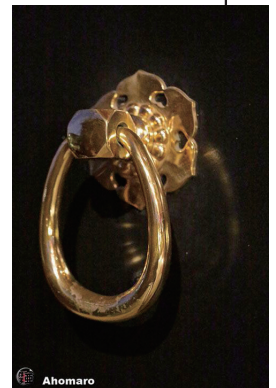
13.12.21



13.12.23



13.12.24



13.12.25



13.12.28



13.12.29



13.12.30



13.12.31



ルイス I. カーン

L o u i s I . K a h n

建築材料との対話

ロシア帝国エストニア地方サーレマー島出身の建築家（1901-1974）

レンガと話すという内容の講義と、壁と人間が話す場面がある文章を書いている。

参考文献：香山壽夫訳，建築家の講義－ルイス・カーン，1997，丸善株式会社

参考サイト：Louis I. Kahn talks to a brick - YouTube, 参照日：2014. 1.17

URL: <http://www.youtube.com/watch?v=2CYRSg-cjs4>

yatzer- “Even A Brick Wants To Be Something” - Louis Kahn, 参照日：2014. 1.17

URL: <http://www.yatzer.com/louis-kahn-the-power-of-architecture>

ルイス・カーンの対無生物コミュニケーション

カーンは講義や文章の中で、レンガや壁と対話する。これらのモノは、言う、尽くす、守る、安心させる、悲しむ、納得する、意志がある、望む、といった言葉でその感情や知性を表現され、語尾は断定である。モノが適切に扱われないと、モノは傷ついたり、意地を張ったりする。

以下の引用では、カーンは大学での講義の中で、レンガと話して設計する方法を説明しているものだ。

たとえば、レンガのことを考えてみよう。

君はレンガに尋ねる。「レンガよ、どうになりたい？」

レンガは言う。「アーチがいい」で、君はレンガに言う、

「でも、アーチは金がかかるんだ。コンクリートのまぐさを使うことならできるよ。どう思う？」

レンガは言う。「アーチがいい」（学生の笑い声）

「これが重要なんだ、つまり、自分が使う材料を賛美 (honor) すること。レンガを賛美したたえることによつてのみ、レンガを正しく使うことができる。手を抜いてはいけない。(k-1, 日本語訳筆者)

建築材料を賛美し、その意志を尊重することが設計において重要だとしている。

とはいえ、賛美するだけで建築材料を正しく使うことができるわけではない。疑問としては、モノの意見や感情は、それを読みとる側の知識や経験の差によって異なるのではないかということだ。それにたいして、カーンは「存在の意志」という観念を用いて考えを示す。モノはそれ自身意志をもち、その性質を表そうとしているという。つまり、材料の持つ性質が感情として表され、人間がモノの感情を読むことは、性質を読むことに等しいのである。であるから、モノの感情は人間の側で無意識に決めているのではなく、材料は誰に対しても同じ言葉を使うはずの存在なのである。

彼が言いたかったことは、もちろん、科学においても、

たとえそれが測り得ることがらに関わる仕事だとしても、

それ自身でありたいとする生命の意志が存在する、ということです。

細菌は細菌にならんと望み、

(何らかの神をも恐れぬ理由によって)

バラはバラにならんと望み、

人は人にならんと望む・・・・・・、

表現したいと望む・・・・・・ある性質を、

ある態度を、あるものを、

それは他ではない1つの方向に動き、

それが可能になるような手段を用意するように、

絶えず自然に働きかけてきました。

表現を求めるこの偉大な意志を、科学者であるソーーク博士も感じていたのです。(K-4)

ルイス・カーンの対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ K-1 ～ 5 は対無生物コミュニケーションの箇所

K-1

"If you think of Brick, for instance, you say to Brick, 'What do you want, Brick?' And brick says to you, 'I like an arch' And, if you say to brick, 'Look, arches are expensive, and I can use a concrete lintel over you. What do you think of that, Brick?' Brick says, 'I like an arch'"[laughter of students]"and, it's important, you see, that you honor the material that you use.[.] You can only do it if you honor the brick and glorify the brick instead of shortchanging it."・・・大学の講義において

たとえば、レンガのことを考えてみよう。君はレンガに尋ねる。「レンガよ、どうなりたい？」レンガは言う。「アーチがいい」で、君はレンガに言う、
「でも、アーチは金がかかるんだ。コンクリートのまぐさを使うことならできるよ。どう思う？」レンガは言う。「アーチがいい」(学生の笑い声)
「これが重要なんだ、つまり、自分が使う材料を賛美 (honor) すること。レンガを賛美したたえることによってのみ、レンガを正しく扱うことができる。手を抜いてはいけない。(日本語訳筆者)

K-2

「壁は、人間に尽くしてきました。
その厚さと、強さによって
壁は人間を災難から守ってきたのです。
しかし、やがて、外を見たい、という願いが出てきて
人間は壁に穴を開けました
壁は悲しんで言いました。
「君は僕に対して何てことをするんだ。
僕は君を守ってきてやったじゃないか、君を安心させてきたじゃないか。
それなのに君は、僕に穴をあけるなんて。」
人間は言った、「だけど、僕は外を見たいんだ。」
「僕はすばらしいものを知っている、
だから外を見たいんだ。」
壁は、それでとても悲しかった。
やがて人は、ただ壁に穴を開けるのではなくて、
もっとはっきりした開口部をつくり出した。
立派な石で縁取りして
そしてその開口部の上に眉石をのせた。
それでようやく、壁は納得した。

壁を作る秩序から

開口部を持つ壁を作る秩序が生み出されます。
そしてそこから、柱が生まれてきます。
それはひとつの自発的な秩序であって、
開口部というものをつくり出し、
又同時に、開口部ではないものをつくり出します。
このようにして、開口部のリズムは、壁自身によって決定されるのです。
すなわちそれはもはや壁ではなく
一連の柱と開口部となるのです。
このような生成は、自然の中から生まれることは決してありません。
それは、神秘的な感覚の内から生まれ出ます。

すなわち人は、魂の脅威を表現せずにはいられないものであり
それが表現を求めるのです。(8-10)

K-3

岩の中には岩の記録があります。
人の中には、その人がいかにつくられたかの記録があります。(11)

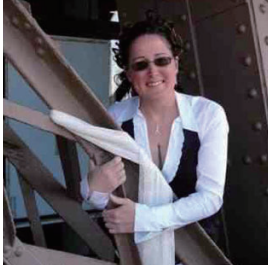
K-4

ソーク生物学研究所の場合では
ソーク博士が私の事務所にやってきて、
私に研究所を建ててくれと依頼したのですが、
企画プログラムは至って単純でした。
彼は、「ペンシルバニア大学の医学研究棟では、
面積はどのくらいになっていますか」とたずね、
私は、一〇万平方フィートですと答えました。
すると彼は言いました。「ひとつだけ、
どうしても実現したいことがあるんです。
私は、ピカソを研究所に招待したいんだ。」
彼が言いたかったことは、もちろん、科学においても、
たとえそれが測り得ることがらに関わる仕事だとしても、
それ自身でありたいとする生命の意志が存在する、ということです。
細菌は細菌にならんと望み、
(何らかの神をも畏れぬ理由によって)
バラはバラにならんと望み、
人は人にならんと望む・・・・・・、
表現したいと望む・・・・・・ある性質を、
ある態度を、あるものを、
それは他ではない1つの方向に動き、
それが可能になるような手段を用意するように、
絶えず自然に働きかけてきました。
表現を求めるこの偉大な意志を、科学者であるソーク博士も感じていたのです。
他の知的活動から、心地よく切り離されている科学者にとっても、
はかり得ないものの存在は、何にも増して必要なものであり、
それこそ、芸術の世界なのです。(24-26)

宇宙船のデザインに関して

K-5

今とはまったく違ったように見えるものをつくりたいと熱中している人達があります。しかしそのような機会はないでしょう。いや、機会がないというよりは、宇宙を浮遊するそのようなものをつくり出す、存在の意志、が存在していないからです。(p.46)



エリカ・エッフェル

Erica Eiffel

エッフェル塔と結婚

エリカ・エッフェル (1972-) はアメリカの対物性愛者。もと米軍兵でアーチェリーの世界的選手。エッフェル塔と結婚し、正式に性をエッフェルに変える。1999 ~ 2003 まで日本に滞在。対物性愛者コミュニティにおいてスポークスパーソンの役割をしており、TV などメディアに出ている。

参照サイト：

(1) OBJECTUM-SEXUALITY Internationale, 参照日 2014. 1. 6

URL: <http://objectum-sexuality.org/>

(2) Erica Eiffel, “Married” to the Eiffel Tower?, URL: <http://objectum-sexuality.org/>

(3) WOMAN WITH OBJECTS FETISH MARRIES EIFFEL TOWER, 参照日 2014. 1. 6

URL: <http://www.telegraph.co.uk/news/newstopics/howaboutthat/2074301/Woman-with-objects-fetish-marries-Eiffel-Tower.html>

エリカ・エッフェルの対無生物コミュニケーション

エリカ・エッフェルはエッフェル塔や鉄橋との愛の交流を持ち、これらのモノへの愛を賛美するためにエッフェル塔と結婚した。実際には姓をオフィシャルにエッフェルに改名し、胸にエッフェル塔のタトゥーを入れたが、結婚は正式のものではない。彼女と対象のモノとの交流は相互のものであり、セクシュアルなものでもあるという。

■対物性愛者の一般的な性質

エッフェルは対物性愛者の1人である。

対物性愛（オブジェクト・セクシュアリティ）とは、性的指向（Sexual orientation）のひとつで、性的な欲求が人間でなく無生物に向うものである。

対物性愛者らの“orientation”の語の定義は「信念や感情、価値観を含む複雑な精神状態と、特定の行為をとる性質」であり、人間同士の行為それ自体を意味するものとは若干異なる。モノに対する愛情は高いレベルに達するものであり、また、幼い頃からその性質をもっていたと主張する。また、対物性愛者の性の目覚めは一般的な性の目覚めと同じように思春期に始まり、その経過は彼らにとっては自然なことと感じられている。(1)

公共建築物を愛情の対象とする対物性愛者にとって、その関係は遠距離恋愛のようである。定期的に対象のために働くか、そのまわりで働くかなどの機械を持たなければ、関係を深めることが困難になる。この困難を乗り越えるため、彼らの多くは模型をつくるか手に入れるかする。これを人間同士の恋愛で、恋人からもらった指輪や、恋人の写真を持ち歩くようなものだたとえる。彼らはモノを一方向的に愛するだけでなく、モノからも愛情を受け取る。

対物性愛者コミュニティのWebサイトによると、世界には40人のオブジェクト・セクシュアルを自認する人々がいる。すべて女性でアスペルガー症候群である。(3)

■対話の様相と外から見た様子

対物性愛者らは対象のモノに関するあらゆる知識を得、対象の性質を内在化（internalize）することでコミュニケーションをとっているという。知識の強化と内在化を進めれば進めるほど、対象をより鮮明に知覚することができる。以下は、エリカ・エッフェルが情緒的な繋がりを持っているという鉄橋の叙述である。

Creaking sounds emanated from the contracting steel as the sun set. Retained heat escaped into the cool night air and the warmth of Kiowa Bridge reached into my heart. (E-2)

夕陽の中で鉄が縮んでギシギシという音を発散させた。溜まった熱が冷たい夜の空気の中に逃げてゆき、キオワ橋の温もりが私の心に伝わって (reach) きた。(日本語訳筆者)

■親密さ、性交、エクスタシー

対物性愛者らにとって“Sexuality”は、身体の物理的接触を必ずしも必要としない。官能 (sensuality)、親密さ (intimacy) といった言葉が必ずしも肉体関係を意味しないように、“Sexuality”という単語を精神的な意味で用いている。以下の記述は別の対物性愛者の詩である。

Entering Your mysterious realm of endless bliss and dazzling heights

There, where I can be with you

Just flowing... flowing and giving you my heart, my soul

(OS-1)

あなたの神秘の王国へ、終わりの無い祝福と目眩のする高み

その場所で、私はあなたといっしょにいられる

ただ、たゆたい・・・私の心を、魂をあなたに捧げる

■なぜ“Sexuality”という語を用いたり、結婚したりしなければならないのか？

モノに性的指向を向けると言ったり結婚したりすれば、好奇心の目で見られるのは当然だ。にもかかわらず、対物性愛者らは“Sexuality”という語を用いつける。それは、対物性愛者の内面の状態を表現するのに他の語が当てはまらないからだ。対物性愛者らがモノとセクシュアルな関係を持っているというのは内面的には事実であり、それは現実世界での事実より鮮明な体験である。また、「結婚」という言葉は第一義的には精神的な意味がある。同性愛のカップルも、子供が持てないとしても結婚を望むのは、対象と一帯となりたいと言う願望の現れだ。

■精神病理学的解釈

対物性愛についてはいろいろな精神病理学的解釈がなされている。アスペルガー症候群との結びつけや、トラウマや潜在的願望に理由を置くフロイト心理学的なものである。しかし、アスペルガー症候群にしてもフロイト心理学にしても、その症状は様々なものがあり、すべてのわからないことをアスペルガーかヒステリーとまとめているにすぎない。

エリカ・エッフェルの対無生物コミュニケーションの抜き出し

※大文字 E-1 ～ 3 は対無生物コミュニケーションの箇所、OS-1 ～ 3、エリカ・エッフェルでなく、対物性愛者コミュニティの別の人物の表現である。

E-1

Her first infatuation was with Lance, a bow that helped her to become a world-class archer, she is fond of the Berlin Wall and she claims to have a physical relationship with a piece of fence she keeps in her bedroom. (3)

彼女が初めて夢中になったのは世界級の選手になるまで用いていた弓矢であった。彼女はベルリンの壁が好きで、ベッドルームで補完している壁の一部分と身体的な関係 (relationship) があると主張する。(日本語訳筆者)

E-2

Creaking sounds emanated from the contracting steel as the sun set. Retained heat escaped into the cool night air and the warmth of Kiowa Bridge reached into my heart. (2)

夕陽の中で鉄が縮んでギシギシという音を発散させた。溜まった熱が冷たい夜の空気の中に逃げてゆき、キオワ橋の温もりが私の心に伝わって (reach) きた。(日本語訳筆者)

E-3

Nonetheless, I felt connected to the world's Bridges as if they were one entity but showing themselves in different ways. Everywhere I went, they were there, with me always... aesthetically beautiful to the world but radiating endurance under extreme forces to me. (2)

それにもかかわらず、私は世界の橋と繋がっていると感じた。それらがひとつの存在でありながら、別の形で現れているかのように。どこに行っても、彼らはそこにいた、私とともに。世界に対して、美的にすぐれ、しかし極度の力の下で、私に耐久力を放射しながら。(日本語訳筆者)

E-4

When I "married" the monumental structure, it was simply to honor my love for Bridges as La Tour Eiffel was dubbed the "Sheppardess of the Bridges" and engineered by one of the world's greatest Bridge engineers, Gustave Eiffel. (2)

私とそのモニュメントと“結婚”したこと、それは単純に私の橋たちへの愛に荣誉を与えるためでした。エッフェル塔は“橋たちのシェパーデス”をダブしており、世界で最も優れたエンジニアの一人であるギュスターヴ・エッフェルに造り出されていたからです。(日本語訳筆者)

E-5

It is also true that I have a longstanding relationship with the Berlin Wall. (snip) My feelings and expressions for the old communist icon have been transitory since I was 16. Even so, I still have a deep-rooted love and non-political connection with the remains of the Berlin Wall. And for a variety of reasons, that I do not anticipate comprehension, I relate to the Berliner Mauer as a kindred spirit of abuse and survival thereof. In many ways... I am the Berlin Wall.(2)

ベルリンの壁とも長く関係を持っているのも事実です。(中略) この古い社会主義のアイコンに対する私の気持ちと感情は十六歳からの一時的なもののですが、たとえそうでも、私は根深い愛と政治的なものでない繋がりを、ベルリンの壁の残骸に対して持っています。そして、さまざまな理由から、私は理解されることを期待してはいません。私は酷使 (abuse) と生命力 (survival) のために、ベルリンの

壁と同胞なのです。いろいろな意味で、私はベルリンの壁なのです。(日本語訳筆者)

E-6

My life has been very rich and I have achieved many personal goals empowered by the loving connection I have with what are otherwise known as inanimate objects.(2)

私の人生は豊かでありましたし、他の人には命を持っていないと思われているモノたちとの愛情関係から力を得ながら、個人的な目標をいくつも達成してきました。(日本語訳筆者)

OS-1

Entering Your mysterious realm of endless bliss and dazzling heights
There, where I can be with you
Just flowing... flowing and giving you my heart, my soul

(1), My Ode to the Magic Being Expressed by Eva K. from The Netherlands, 2005

あなたの神秘の王国へ、終わりの無い祝福と目眩のする高み
その場所で、私はあなたといっしょにいられる
ただ、たゆたい・・・私の心を、魂をあなたに捧げる

(日本語訳筆者)

魔法の存在に捧げる私の頌歌, エヴァ・K, オランダ, 2005

OS-2

But through my life-time I have learned that an object has got a soul. (snip) When something touches your body, it must have a body too. When something touches your soul, it must have a soul.(snip) You can touch any steel or stone and think it is nice, but it never will be the steel of the machine or the stone of the wall you are in love with. That what gives you this special, intense feeling and belonging to your object is its soul and your soul.

(1), The Thing with the Soul" Expressed by Rudi in Germany

しかし、私は人生を通して、モノには魂があるということを知った。(中略) なにかが私の身体に触れるならば、それと同じく身体を持っているはずだ。何かが私の魂に触れるならば、それにも魂があるはずだ。(中略) 私が触ることのできるどんな鉄あるいは石、それらをすてきだと思うことがあっても、それらは私が愛している鉄や機械や石と同じではない。私のモノに対するこの特別な強烈な感情と繋がりをつくるのは、その魂と私の魂なのだ。

(1), (日本語訳筆者), 魂を持つモノ, ルディ, ドイツ

OS-3

She explained that she feels an affinity with the wall: "I am the Berlin Wall. Hate me, try to break me apart, but I will still be here, standing."(about Eija-Riitta) (1)

彼女は壁と一体感を感じる、と彼女は説明する。「私はベルリンの壁なのです。私を憎んで、そして壊してください。それでも、私まだここにいて、ここで立っています」(エイジャ・リータについて)

(1), (日本語訳筆者)



フェルディナン・ シュバル

Joseph Ferdinand Cheval

手押し車からの賞賛の詩

フランスドローーム県生まれの郵便配達員（1879-1912）

郵便配達中、不思議な形の小石につまづき、「自然が彫刻をするなら、わたしは石を積もう」と、33年をかけて「シュバルの理想宮」と呼ばれる建築をひとりで建設する。理想宮にはシュバルの詩がそこらじゅうに彫り込まれている。そのなかに、宮殿建設に使った手押し車からの賞賛の詩がある。

参考文献

Jean-Pierre JOUVE, Claude PRÉVOST, Clovis "PRÉVOST LE PÔLE IDÉAL DU FACTEUR CHEVAL Quand le songe devient la réalité", 1994, A.R.I.E. Éditions

F. シュバルの対無生物コミュニケーション

シュバルは郵便配達と理想宮建設のために手押し車をいつも押していた。33 年を費やし 1 人で築き上げた理想宮の中には無数の詩が書き込まれており、その中に手押し車がシュバルの仕事を賞賛する内容のものがある。手押し車は、忠実な、つましい友人、と表現され、シュバルの仕事を「目撃」したとされる。手押し車はシュバルにとっていつも手助けをしてくれる家来のような存在でもある。また、手押し車はシュバルのことを「きみ 'Toi'」で呼び、親しい仲だということがわかる。

手押し車の詩は、熱烈な賞賛と、偉大な仕事をしたという喜びに満ちている。それはそのままシュバルの気持ちが投影されている。

彼の作品は終えられた今、
彼は労働の平穏を享受している。
そして彼の家で！ この私は、彼のつましい友人は
光栄にも席を占めている
宮殿の創造者
このモニュメントはとある百姓の作品だ
為せば成る、とあなたに呼びかける
(C-4)

■神秘体験のようなもの

シュバルが理想宮を建設するきっかけとなったのは、郵便配達で奇妙な形の石につまずいたことだ。

「私は自分に言った。自然が彫刻をしたがっているのだから、私はレンガを積み建築をやろう」(C-1)

偶然つまずいた石の形から、シュバルは自然の意志を感じとった。石につまずいた日の日記は長く、彼にとってこの出来事が重要であったことがわかる。ほかに、資料の中で不思議な文章を見つけた。

「未知なる突然の光が、溝から湧き出て、旅人の怪人をいきり立たせた。誰が君をそこに見捨てると思うかい？」作品に向って、私は言った。その瞬間から、私に休息は無い。(128)

未知なる突然の光に遭遇が何を意味しているのかは不明である。

■なりかわり、架空の崇拝者から賞賛される

理想宮に彫られた詩の中には「アラーとエデンの園」、「モスク」、「スイスの山小屋」といった様々なモチーフが現れ、いろいろな時代の相互に関係のない世界が宮殿のなかに混在する。建設中のシュバルの思考が世界の様々な場所を飛び回っていたことがうかがえる。

また、賞賛の詩の中には、手押し車以外にも「パリからの崇拝者」や「とある崇拝者」、その他だれともわからぬ人物からのものもある(c-3 ~ 7)。シュバルの頭の中は自分を賞賛する人がたくさんおり、シュバルは建設しながらいろいろな人物になりかわってなりかわって会話をしていた。これは誇大妄想的でもあるが、残されているシュバルの友人に当てた手紙の中では、自分のしていることが他の人から見たらおかしいことだと自覚しているという記述も見られ、日常生活では病的な人物ではなかったようだ。

フェルディナン・シュバルの対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ C-1 ～ 6 は対無生物コミュニケーションの箇所、c-1 ～ 7 は特徴的な表現表現である。

C-1

Puisque la Nature veut faire la sculpture, moi je ferai la maçonnerie
et l'architecture»

「私は自分に言った。自然が彫刻をしたがっているのだから、私は
レンガを積み建築をやろう」

(128) 日本語訳筆者

C-2

AU CHAMP DU LABEUR

J'ATTENDS MON VAINQUEUR

La bouette légendaire

Entrée de la niche

労苦の畑

私は私の征服者を待つ

伝説の手押し車

壁龕の入口

(284 左), 日本語訳筆者

C-3

Je suis la fidèle compagne

Du travailleur intelligent

qui chaque jour dans sa campagne

Cherchait son petit contingent

私は賢明なはたらき者の

忠実な友

毎日、彼の野良仕事の中で

小さな分け前を探す

(284 左), 手押し車の壁龕の中, 日本語訳筆者

C-4

maintenant

son œuvre

est

finie

il jouit en

paix de son

labeur

et chez lui ! moi

son humble

a,ie

J'occupe la place d'honneur

L'acteur du palais

Nous redirons aux

génération nouvelles

Ce monument

est l'œuvre

d'un

paysan

Rapelle toi que

vouloir c'est

pouvoir

彼の作品は終えられた今、

彼は労働の平穏を享受している。

そして彼の家で！ この私は、彼のつましい友人は

光栄にも席を占めている

宮殿の創造者

このモニュメントはとある百姓の作品だ

為せば成る、とあなたに呼びかける

(284 左), 手押し車の壁龕の中, 日本語訳筆者

C-5

Ton palais

né d'un rêve

nous tes outils compagnons

travaille d'un

seul homme

Et témoins de tes peine

De siècles en

siècles

que toi seul a bâti ce temple de

Merveilles

Moi sa brouette

J'ai eu cet honneur !

D'avoir été 27 ans

Sa compagne de

labeur .

L'auteur du palais

Aides toi

le ciel

T'aidera

Ma compagne de peine.

あなたの夢から生まれた宮殿

私たち、仕事道具はあなたに連れ添う

そして代々、あなたの痛みの目撃者となる

あなたは一人でこの驚異の寺院を築いた。

あなたの手押し車である私、

私はその名誉を受け取った！

27 年間、彼の労役を連れ添った。

宮殿の創造者

わたしはあなたを助け
天はあなたを助ける
わが労苦の友

(284 左), 手押し車の壁龕の中, 日本語訳筆者

C-6

Au chant de l'alouette le matin
avec ma fidèle brouette je parcourais
le chemin
J'apprends à tout Âge
qu'en se montrant persévérant
laborieux rempli de courage !
on arrive à tout sûrement

朝のヒバリの歌の中に
私と道を歩き回る、忠実な手押し車とともに
私はいつのときも学ぶ
粘り強く登ることによって
勇気に満ちた働き！
かならずや到達する

(285), 牡鹿の洞窟 左側, 日本語訳筆者

c-1

Derrière les trois géants, l'accès au tombeau
druide-temple indou, inscriptions des niches(2)

Septembre 1897

Nul n'échappe à sa destinée
pas plus que son corps appartient à la terre
et l'âme à l'éternité
Créature ton créateur seul
tu adorera

L'hiver comme l'été
nuit et jour j'ai marché
J'ai parcouru la plaine et le coteau
de même que le ruisseau
Pour apporter la pierre dure

Ciseler par la nature
C'est mon dos qui a payé l'écot
j'ai tout bravé même la mort

le soir à la nuit close
quand le genre humain repose
je travaille à mon palais
de mes peines nul ne saura jamais.

1897 年 9 月

誰もその運命から逃れられない
体が大地に、魂が永遠性に所属するように
君の創造主のみを
君は愛する

夏のような冬
私が歩む夜と昼
私は平野と丘を歩き回る
そして小川を
固い石を運ぶために

自然による彫刻
割当を支払ったのは私の背
私は死をものともとしない

夜の夕べは閉ざされる
人が休息をとる間に
私は宮殿の仕事にとりかかる
だれも知ることの無いであろう痛みの宮殿に

(284 中), 三人の巨人の後ろ、

c-2

TRAVAIL
D'UN SEUL HOMME

UN GÉNIE
BIEN FAISANT
MA TIRÉ
DU NÉANT

TRAVAIL
DE NÉANT

IL M'A PLACÉ
DANS CE PALAIS CHARMANTS

OÙ L'HIRONDELLE
REVIENDRA CHAQUE PRIMTEMPS

CRÉATURE
VIENT ADMIRÉR
ICI LA NATURE

TOUT CE QUE TU VOIS
PASSANT
EST L'ŒUVRE
D'UN PAYSANM

たった一人の男による仕事

一人の天才は
無からの挑戦を
成し遂げた

彼は私を
この魅惑の宮殿の中に置いた

毎春 燕の戻るこの場所に

創造物は
ここに來て自然をあがめる

ここを通りかかる者が見るのは
一人の百姓の作品

(285, 左), 日本語訳筆者

c-3

Dans la niche au cerf :

Ami de la nature
mais de naissance obscure
ce qui rend le travail dur
je l'ai subie sans murmure

Le facteur a donné à l'humanité une
leçon de génie et à fait preuve de
la plus grande énergie, que jamais
l'homme a donné et ne donnera
à ses contemporains.

Devant un tel génie, mon cœur reste
ébahi Ch. dis-moi comment et pourquoi
tu as pu faire seul tout ce que je vois
J'ai parcouru les mers et de même
J'ai visité l'univers, je n'ai rien vu de
si beau et de si fier, j'ai vogué sur l'onde
des Tropiques à Londres. Grand génie je le
Proclame la 8e merveille du monde.

雄鹿の壁龕のなかに：

自然の友
しかし、暗い起源
厳しい仕事を返す者
不平も言わず私は被った

郵便屋は人に天才の教訓を与え
活力の証を作った
同時代の誰もが与えることのできなかった
そして与えることのできないであろうものを

そのような天才の前に
私の心臓は休む
ébahi Ch. 教えておくれ
私が今見ているものを
どのようにして
なぜ君は一人で全て成し遂げたのか
私は海をわたり、世界を旅した
私はこのように美しい、
このように誇り高いものを見たことが無い
南国からロンドンまで私は波間をさまよった
偉大な天才、私は
世界で八番目に素晴らしいと宣言した

(285, 中下), 日本語訳筆者,

c-4

Bravant la chaleur, la froidure ;

et même l'outrage du temps ;
Je forçais parfois la nature
et triomphai des éléments ;

J'ai vu, j'ai admiré j'en suis
demeurée saisie de l'imagination
qu'il a produit dans l'accomplissement
de ce travail de géant qui sera
Inimitable

Vaillant
artiste de ton
œuvre admirable
Nous garderons
le souvenir durable
Et nous dirons sans
jamais nous lasser ce aue peut
l'homme par la volonté

Un admirateur parisien(…)

La biche

熱さに立ち向かい
そして時間の侮辱に
私は自然に強いた
私は素材に勝利した

私は見、私は感嘆する
私の空想を掴み保ったことに
それは実現し生み出した
誰にもまねすることのできない巨人の仕事

感嘆すべき作品の
仕事熱心な芸術家
私たちはその頑丈な土産物を守り続ける
そして私たちは
自分たちが
意志によって

パリからの崇拜者

牡鹿

(285 右下), 日本語訳筆者

c-5

PIEUVRE ANIMAL MARIN
GAULOIS RÉVEILLE
TOI LE ROMAIN
A PASSÉPAR LÂ
LE VENT
DE L'ÉNERGIE
M'A SOUFFLÉ
VOTRE GÉNIE

海の生き物、蛸
ガリアが目覚める

君はローマ人
エナジーの風が
私に吹きかける
あなたの霊を

(286 左), 日本語訳筆者

c-6

À droite de la niche du CHALET SUISSE :

chercheur et tra-
vailleur infati-
geable avant
de rentrer dans
l'éternité tu lais-
seras ici la vrai
gloire
Pour faire un hom-
me : il faut la pa-
tience du saint
et le courage d'un
grand(Un admirateur)

スイスの山小屋の壁龕の右側：
疲れを知らぬ
探求者と労働者
真実の栄光がある
永遠の中に返ることを前にして
一人の男になるために
聖人の忍耐力と
大男の勇気がなくてはならぬ
(とある崇拜者)

(286 中), 日本語訳筆者

c-7

Côté ouest, fronton de la MOSQUÉE :

1903

Le travail

fut

ma seule gloire

L'honneur

mon sel honneur

un facteur rural

J'ai contemplé ton œuvre et j'en reste ébloui
Humble et rude ouvrier, maçon aux mains sublimes
qui sans maître, sans aide et de cailloux infimes
Construisit patient ce palais inouï !
Ne crains pas que ton nom périclite
Monument du génie et de la volonté
les pierres, qu'avec goût assemble ton caprice
Des siècles défieront, la main dévastatrice
Et debout dans leur force et dans leur majesté
Transmettront ta mémoire à la postérité.

LA VIE EST UN OCÉAN DE TEMPÊTES
ENTRE L'ENFANT QUI VIENT DE NAITRE
ET LE VIEILLARD QUI VA DISPARAÎTRE

ALLAH et ses jardins de délices

MOSQUÉE

ENTRÉE D'UN PALAIS

IMAGINAIRE

西側, モスクのペディメント :

1903

仕事が私の断った1つの栄光、

栄誉

私の断った1つの栄誉

とある地方の郵便屋

君の作品に見とれ、目がくらむ

謙虚で骨の折れる労働者 崇高な手を持つ石工

主人を持たず、助けもなくわずかの小石も無い

途方も無い宮殿を根気づよく建設する！

名が消え去ることを恐れず

天才と意志のモニュメント

美的で気まぐれな石

挑戦の月日、痛めつけられた手

その力と威厳の中に立つ

その記憶を後世に伝える

人生は

生まれたばかりの赤子と

消え行く老人の間にある

嵐の海だ

アラールとエデンの園

モスク

空想の宮殿への入口

(286 右), 日本語訳筆者



ヴァージニア・
リー・バートン

Virginia Lee Burton

家や電車を主人公とした絵本

アメリカマサチューセッツ州出身 (1909-1968)

絵本作家、画家、デザイナー

参考文献：

ヴァージニア・リー・バートン著、いしいももこ訳『ちいさいうち』2001 改版，岩波書店
(B-1 ～ B-10)

VIRGINIA LEE BURTON, LIFE STORY, 1962, Houghton Mifflin Harcourt Publishing Company,
New York (B-11)

V. バートンの対無生物コミュニケーション

『ちいさいおうち』は、とある「おうち」のまわりの環境が田舎から都会へと移り変わり、人にも住まれずぼろぼろになっているところを、元の持ち主の子孫に発見され、曳き屋をして田舎にもどるという物語である。「おうち」の感情と行動の表現は、ながめる、おもう、みている、おどろく、すきになれないようなきがする、ゆめにみる、おどる、しょんぼりする、こわがる、面白と思う、なれる、うれしい、にっこりする、があった。

物語の中で「おうち」は、田舎の風景が町に変わってゆくのを「みている」、あるいは、田舎に戻ることができて「にっこりする」または、心の中でさまざまなことを思っている。「おうち」は常に声に出さずに、感情を内面に持っている。「おうち」には顔がなく、「にっこり」という表現も文章の中でだけである。つまり、擬人化せずにモノ自体の感情を表しているのである。

よるに になると、ちいさいおうちは お月さまを ながめました。(中略) おうちは ほしをながめました。(中略)「まちって、どんな ところだろう。まちに すんだら、どんなきもちが するものだろう。」と、ちいさいおうちは、そのあかりを みなながら おもいました。(B-1)

「ここがいいわ。」ちいさいおうちを たてたひとの まごの まごの まごのひとが いいました。
「ああ ここがいい。」ちいさいおうちも そう おもいました。(B-9)

(B-9) では、「おうち」は人間の言葉に対応して、自分の心の中に感情を浮かべている。

「おうち」のまわりが都会になり、住む人もなくなると、「おうち」の外装は汚れて窓ガラスも割れてしまう。この状態は、「しょんぼり」と表現される。モノの外観の様子で、それが良い状態かどうかという主観的な判断を、「おうち」の考えとして語ろうとしているのである。

子供向けの絵本は擬人化の表現が頻繁に使われるが、対無生物コミュニケーションの事例としてとくにこの絵本を参考にしたのは、バートン原作の絵本はほとんどが、電車などの乗り物が主人公となっており、表現に一貫性があるためだ。また、それらの主人公は、特定の人物像を表象していない。母親のようでもなく、老人のようでもなく、「おうち」自身、あるいは機関車自身としてその感情が表現される。おそらくバートンはほかの感じ方が難しく、単なる修辞としてでなくモノの感情を表していると考えたため、事例として紹介できると考えた。ほかの理由としては「ああ」などの感嘆詞があったので、説明的でなく、直感的なものであると判断した。

■変成岩と堆積岩は生命の一種とされる

人類の誕生についての歴史を、舞台の進行になぞらえて追ってゆく“LIFE STORY”という絵本では、変成岩と堆積岩の誕生の場面で、それらについて「最も古い生命」「初期の生命」というサブタイトルがついている。原始植物やマンモスのような生物までも、同じ “Life” ということばでくくっており、それらの間に線を引いていない。ただし、この言い方は、英国の地学の世界では一般的である可能性もある。

V. パートンの対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ B-1 ～ 11 は対無生物コミュニケーションの箇所

B-1

よるに になると、ちいさいおうちは お月さまを ながめました。(中略) おうちは ほしをながめました。(中略)「まちって、どんな ところだろう。まちに すんだら、どんなきもちが するものだろう。」と、ちいさいおうちは、そのあかりを みながら おもいました。(4)

B-2

ちいさいおうちは、じっとすわって みていました。(8)

B-3

ちいさいおうちは、それを みな おかの うえから じっとみていました。(10)

B-4

ある日 いなかの まがりくねったみちを、うまの ひっぱっていない くるまが はしってくるのを みて、ちいさいおうちは おどろきました。(14)

B-5

「ここは、もう まちになってしまったのだ。」と、ちいさいおうちは おもいました。でも、まちは あまりすきになれないような きがしました。(20)

B-6

ちいさいおうちは まちは いやだと おもいました。そして よるには いなかのことを ゆめにみました。いなかでは、ひなぎくの はなや りんごの木が、月の ひかりのなかで おどっていました。(30)

B-7

ちいさいおうちは、すっかり しょんぼり してしまいました。ぺんきは はげ、まどは こわれ、よろいどは はずれて、ななめに さがっていました。ちいさいおうちは、みすばらしくなって しまったのです……。かべや やねは むかしと おなじように ちゃんとしているのに。(31)

B-8

はじめのうち、ひっこしは こわいと、ちいさいおうちは おもいました。でもまた すぐになれて、おもしろいとおもいました。(中略)ちいさいおうちは、もうすこしも さびしくありませんでした。(37)

B-9

「ここがいいわ。」ちいさいおうちを たてたひとの まごの まごの まごのひとが いいました。
「ああ ここがいい。」ちいさいおうちも そう おもいました。(37)

B-10

こうして、あたらしい おかのうえに おちついて、ちいさいおうちは うれしそうに にっこりしました。(38)

B-11

HADEAN EON, INTRODUCING IGNEOUS ROCKS (7)

冥王代の累代、火成岩の紹介

ARCHEAN EON [Most ancient Life] INTRODUCING METAMORPHIC ROCKS (9)

始生代の累代、(最も古い生命) 変成岩の紹介

PROTEROZOIC ERA [Early Life] INTRODUCING SEDIMENTARY ROCKS (11)

原生代、(初期の生命) 堆積岩の紹介

PALEOZOIC ERA [Ancient Life] CAMBRIAN PERIOD (13)

古生代、(古代の生命) カンブリア紀



ルーシー・M・モンゴメリ

Lucy M. Montgomery

木々に手を振り、花にキッスする少女を描く

モンゴメリはカナダ、プリンス・エドワード島出身（1874-1942）の小説家。

自身の子供時代の体験を投影したアンの台詞の中に、植物や自然とコミュニケーションをとる場面が多い。

参考文献：

モンゴメリ，村岡花子訳，(1987)『赤毛のアン』新潮社

Lucy Maud Montgomery, Anne of Green Gables, 1997, Seattle, Washington, The World Wide School tm, 参照日 2014.1.1

URL: <http://www.worldwideschool.org/library/books/youth/anneofgreengables/AnneofGreenGables/toc.html>

L. モンゴメリの対無生物コミュニケーション

モンゴメリはフィクションである『赤毛のアン』を分析の対象としている。ここにはモンゴメリの幼少期が投影されているととらえる。

孤児であるアンは木や花の感情を読み、声をかけ、キスしたり手を振ったりするというコミュニケーションをとる。アンを引き取ったグリーンゲブブルズのマリラとマシウの兄妹は、アンの行動を奇妙に思いながらも好意的に見ている。

グリーンゲブブルズの美しい自然の中にある花や木はおおむね穏やかで陽気な感情表現で表される。それに対して、孤児院の小さななかいの中にあった二、三の小さな木は、孤児みたいであったと表現される。これは暗示的な表現なのかモンゴメリの心象が投影されているのかは区別がつかない。以下は、モノの感情や動作の表現に使われた言葉である。

孤児みたい、笑いかける、話す、夢を見ている、痛みを感じる、知っている、笑う、呼ぶ、気を悪くする、よろこぶ、話を聞かせる、ささやく、さみしい、惜しむ、なでさする、うれしい、手を振る、社交的、ささやきあう、眠る

M-12

アンは、ほおっとため息をついて、ゆり椅子にすわると、ボニーと名をつけたあおいの葉の一つにキスし、つりうき草の花に手をふってみせた。

「あたしがいない間、ボニーもあの花たちも、さみしかったでしょうからね」と説明した。(117)

M-14

アンが東の部屋から朝のあいさつをするのを見はっているかのように、窪地の樺はうれしそうに手をふった。(143)

M-14 では樺の木が揺れていることが、「手をふった」と表現される。また、アンも身体を使ってモノと交流する。

これらの木や花や小川といった自然物はアンの大いなる関心の対象である。その場所に行くだけでも「好きにならずにはいられない」と表現し、モノへの愛情を自分の意志で止めることができないということを表している。

外に行って、あの木や花や果樹園や小川やいろいろなものと知り合いになればあたし、好きにならずにはいられないんですもの。いまでさえつらいのに、このうえつらくしたくないの。外に行きたくってしかたがないんだけど____みんなが、何もかもが『アン、アン、わたしたちのところにいらっしゃい。アン、アン、わたしたちは遊び相手がほしいのよ』って呼んでるようなんだけ____でも行かないほうがいいの。そういうものからひきはなされなければならないのなら、好きになる必要はないんですもの。そうでしょう？ ものを愛さずにいなくてはならないのは、とてもつらいことだと思いますか？ (M-7)

■自分が悲しい時は、部屋の壁も痛みを感じる

人間の感情にモノの側が反応するという知覚がここでは現れる。

マリラが行ってしまうと、アンはみたされぬ思いで、まわりを見まわした。むきだしの白壁は眼が痛くなるほど白かった。壁だって、ずきずきした痛みを感じているにちがいないと、アンは思った。(M-5)

人間の感情がモノに写るといふ知覚については、近藤とカーウエイが表現したが、全体においては少ない。

■擬人法が突然混じる

アンがグリーンゲブブルズのまわりを探索するという場面では、「発見した」、「楽しんだ」、「はえていた」、「かかっていた」、という表現に混じって、「知り合いになった」、「近づきになった」という表現が混じる。

もう家の近くの木や、藪とは全部近づきになったし、ひと筋の小径がりんごの果樹園の下を通って、細長い森につづいていることも発見した。(中略) 窪地のすばらしい泉とも知り合いになった。(M-10)

人間がモノを発見するというだけでなく、人間とモノが、人間同士と同じようにお互いに発見され、知られるという感覚を持って

おり、手塚の表現に類似するものがある。

■空想上の友人、無生物への命名

小説の中でアンは、ガラス戸にうつる自分の姿にケティ・モーリスという名を付けて仲よくしていたといい、また、谷から帰ってくるこだまにヴィオレッタという名を付けて愛していたと、過去の自分を述べる。(87)

グリーンゲルブルズでは、あおいの花にボニーという名をつける。モノに愛称をつけるのは、手塚、三遊亭あほまろにも見られる傾向である。

「あの、そういうんじゃないくて、小母さんがつけた名前よ。名前つけないの？ ならあたしがつけてもよくって？ あれに____ええと____ボニーがいいわ、私がここにいる間だけ、あれをボニーと呼んでもいいこと？ (中略) あのね、あたしはたとえあおいの花でも一つ一つにハンドルがついてるほうが好きなの。手がかりがあって、よけい親しい感じがするのよ、ただあおいと呼ばれるだけだったらきっとあおいが気をわるくするんじゃないかしら。小母さんだっていつもただ女とだけしか呼ばれないのはいやだと思うわ (後略)」(M-8)

■美しい風景を見たときの恍惚感の表現

「きれい？ あら、きれいなのはあれにびったりする言葉じゃないわ。美しい、でもいけないし、どっちも言いたらないわ。ああ、すばらしかったわ____すばらしかったわ。想像をつけたすことのできないものなんて、これがはじめてよ。ここところが、すうっとしたわ」____と片手を胸に当てて____「へんにずきりとするようで、いやな気持ちじゃない痛みなのよ。そんな痛みを感じたことがあって？ 小父さん」

「そうさな、どうも思いたせないようだが」

「あたしは何回あったかしれないわ____ (後略)」(31)

・・・白い花を咲かせたりんごの並木道を通り抜けているとき。

「うっとりとした顔を頭上の白い花を向けていた」(30)

「どうしてお祈りをするときに、ひざまずかなくてはならないのかしら。あたしがほんとにお祈りしたいとき、どうするか教えてあげましょうか。たった一人で広い広い野原か、深い深い森へ行って、空を見あげるんだわ。上の上の上のほうを____底知れず青いあの美しい青い空を見あげて、それからお祈りをただ心に感じるの。(後略)(76)

(原文) "Why must people kneel down to pray?" If I really wanted to pray I'll tell you what I'd do. I'd go out into a great big field all alone or into the deep, deep, woods, and I'd look up into the sky--up--up--up--into that lovely blue sky that looks as if there was no end to its blueness. And then I'd just FEEL a prayer.

「赤毛のアン」では風景の美しい描写が多く、幼少期のアンは多幸福感に包まれている描写が印象的に書かれている。石原良純がただダムを見上げてダムの思っていることを見るように、あるいは、宮沢賢治の「虻十公園林」や「風のまた三郎の中で」上をじっと見あげる人物が描かれるように、上を見あげるという体勢は、恍惚や神秘的な感情に関係が大きいようである。

この体勢をしているときに、彼らがモノと話しているという記述がある箇所は、先の石原の発言と、宮沢の「風の又三郎」のなかで少し見られただけだった。

Ⅱ. モンゴメリの対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ M-1 ～ 19 は対無生物コミュニケーションの箇所

M-1

木が大好きなんですもの。孤児院にはちっともなく、ただ、前のほうに二、三本、小ぢやなの、白い小さなこいのなかにあるつきりなんですもの。その木も孤児みたいだったの、それを見るとあたし、いつも泣きたくなったの。それで言ってやったのよ。『あかわいそうにね。もしお前たちが大きな大きな森にいて、まわりにはぐるっとほかの木が立っていて、お前たちの根もとには、小さな苔や花がはえていたり、枝では小鳥が歌っていたりしたら、お前たちも大きくなれるのにね。そうじゃないかい？ でも今のままでは大きくなれないわね。お前たちの気持ちがあたしにはよくわかるのよ、小さな木たちよ』ってね。けさ、あとに残してくるとき悲しかったわ。そういうものには、とても心をひかれるんですものね。(27)
(原文) I just love trees. And there weren't any at all about the asylum, only a few poor weeny-teeny things out in front with little whitewashed cagey things about them. They just looked like orphans themselves, those trees did. It used to make me want to cry to look at them. I used to say to them, 'Oh, you POOR little things! If you were out in a great big woods with other trees all around you and little mosses and Junebells growing over your roots and a brook not far away and birds singing in you branches, you could grow, couldn't you? But you can't where you are. I know just exactly how you feel, little trees.' I felt sorry to leave them behind this morning. You do get so attached to things like that, don't you?

M-2

あたし、もの心がついてから、ほんとの家というものをもらったことがないでしょう？ ほんとうの家へ行くところだと思っただけで、あたし、あの気持ちのいい痛みを感じるの(32)
(原文) You see, I've never had a real home since I can remember. It gives me that pleasant ache again just to think of coming to a really truly home. Oh, isn't that pretty!"

M-3

そら、わたってしまった。さあ、ふりかえってみましょう。おやすみなさい、輝く湖水さん。あたし、いつも人間の言うのとおなじように、好きな物にも『おやすみなさい』を言うのよ。そうするとよろこぶらしいんですもの。あの水はあたしに笑いかけているようだよ(34-35)
(原文) There we're over. Now I'll look back. Good night, dear Lake of Shining Waters. I always say good night to the things I love, just as I would to people I think they like it. That water looks as if it was smiling at me."

M-4

まわりでポプラの葉がさらさら鳴っていた。
「木々が眠りながらお話ししているのを、聞いてごらんなさい」マシュウが抱きおろしてやるとこどもはささやいた。「きっとすてきな夢を見ているにちがいないわ」(37)
(原文) The yard was quite dark as they turned into it and the poplar leaves were rustling silkily all round it.
"Listen to the trees talking in their sleep," she whispered, as he lifted her to the ground. "What nice dreams they must have!"

M-5

マリラが行ってしまうと、アンはみたされぬ思いで、まわりを見まわした。むきだしの白壁は眼が痛くなるほど白かった。壁だって、ずきずきした痛みを感じているにちがいないと、アンは思った。(44)
(原文) When Marilla had gone Anne looked around her wistfully. The whitewashed walls were so painfully bare and staring that she thought they must ache over their own bareness.

M-6

「ああ、あの木だけじゃないの、あたしが言っているのは。もちろん、あれも美しいわ____そうだわ、まばゆいばかりに美しいわ____自分が美しいってことを知ってるようね____でも、何もかものことを言ってるんです。庭も果樹園も小川も森も、大きな、なつかしい世界全体のことなの。小母さんこんな朝には、ただただ世界が好きでたまらないという気がしない？ それに小川がずっと笑いつづけながらここへ流れてくるのが聞こえるの。小川ってどんなに愉快なものか小母さん考えたことがあって？ いつも笑っているんですもの。(後略)」(50)
(原文) "Oh, I don't mean just the tree; of course it's lovely--yes, it's RADIANTLY lovely--it blooms as if it meant it--but I meant everything, the garden and the orchard and the brook and the woods, the whole big dear world. Don't you feel as if you just loved the world on a morning like this? And I can hear the brook laughing all the way up here. Have you ever noticed what cheerful things brooks are? They're always laughing.

M-7

外に行って、あの木や花や果樹園や小川やいろいろなものと知り合いになればあたし、好きにならずにはいられないんですもの。いまでさえつらいのに、このうえつらくしたくないの。外に行きたくってしかたがないんだけど____みんなが、何もかもが『アン、アン、わたしたちのところにいらっしゃい。アン、アン、わたしたちは遊び相手がほしいのよ』って呼んでるようなんだ____でも行かないほうがいいの。そういうものからひきはなされなければならないのなら、好きになる必要はないんですもの。そうでしょう？ ものを愛さずにいなくてはならないのは、とてもつらいことだと思いませんか？(54)
(原文) And if I go out there and get acquainted with all those trees and flowers and the orchard and the brook I'll not be able to help loving it. It's hard enough now, so I won't make it any harder. I want to go out so much--everything seems to be calling to me, 'Anne, Anne, come out to us. Anne, Anne, we want a playmate'--but it's better not. There is no use in loving things if you have to be torn from them, is there? And it's so hard to keep from loving things, isn't it?

M-8

「あの、そういうんじゃないくて、小母さんがつけた名前よ。名前つけないの？ ならあたしがつけてもよくって？ あれに____ええと____ポニーがいいわ、私がここにいる間だけ、あれをポニーと呼んでもいいこと？(中略) あのね、あたしはたとえあおいの花でも一つ

一つにハンドルがついてるほうが好きなの。手がかりがあって、よけい親しい感じがするのよ、ただあおいと呼ばれるだけだったらきっとあおいが気をわるくするんじゃないかしら。小母さんだっていつもただ女とだけしか呼ばれないのはいやだと思うわ(後略)」(55)
(原文) "Oh, I don't mean that sort of a name. I mean just a name you gave it yourself. Didn't you give it a name? May I give it one then? May I call it--let me see--Bonny would do--may I call it Bonny while I'm here? Oh, do let me!" (snip) "Oh, I like things to have handles even if they are only geraniums. It makes them seem more like people. How do you know but that it hurts a geranium's feelings just to be called a geranium and nothing else? You wouldn't like to be called nothing but a woman all the time.

M-9

あの花は自分がばらなことをよろこんでるにちがいありませんわね? ばらが話せたらすてきじゃないかしら。きっと、すばらしく美しい話を聞かせてくれると思うわ。(57)
(原文) Oh, look, there's one little early wild rose out! Isn't it lovely? Don't you think it must be glad to be a rose? Wouldn't it be nice if roses could talk? I'm sure they could tell us such lovely things.

M-10

もう家の近くの木や、藪とは全部近づきになったし、ひと筋の小径がりんごの果樹園の下を通して、細長い森につづいていることも発見した。(中略)窪地のすばらしい泉とも知り合いになった。(91-92)
(原文) Already she was acquainted with every tree and shrub about the place. She had discovered that a lane opened out below the apple orchard and ran up through a belt of woodland; (snip) She had made friends with the spring down in the hollow

M-11

木々にかけわたしたくもの巣が銀の糸のように光り、樅の枝と花々が親しげにささやきかわしているかのように思われた。(92)
(原文) Gossamers glimmered like threads of silver among the trees and the fir boughs and tassels seemed to utter friendly speech.

M-12

アンは、ほおっとため息をついて、ゆり椅子にすわると、ボニーと名をつけたあおいの葉の一つにキッスし、つりうき草の花に手をふってみせた。
「あたしがいない間、ボニーもあの花たちも、さみしかったでしょうからね」と説明した。(117)
(原文) Anne sat down on the rocker with a long sigh, kissed one of Bonny's leaves, and waved her hand to a blossoming fuchsia.
"They might have been lonesome while I was away," she explained.

M-13

つんとすましかえったじゃこう草の上には、燃えるような緋色の花が真っ赤な槍をふるっている、といったぐあいで、この庭には日光もうすれるのを惜しんでいるようであり、蜂はのどかにうなり、風もたゆたいがちに、木々の梢をなでさすっていた。(125-126)
(原文) scarlet lightning that shot its fiery lances over prim white musk-flowers; a garden it was where sunshine lingered and bees hummed, and winds, beguiled into loitering, purred and rustled.

M-14

アンが東の部屋から朝のあいさつをするのを見はっているかのように、窪地の樺はうれしそうに手をふった。(143)
(原文) The birches in the hollow waved joyful hands as if watching for Anne's usual morning greeting from the east gable.

M-15

「楓ってとても社交的な木よ」とアンは言う。「いつもさらさら言っ
ては人になにかをささやいているのね」(153)
(原文) -"maples are such sociable trees," said Anne; "they're always rustling and whispering to you"

M-16

空気にはいつも快い香気がただよっていた。木々の梢では小鳥がさえずりかわし、風がひそひそささやきあったり笑ったりしていた。(154)
(原文) and always there was a delightful spiciness in the air and music of bird calls and the murmur and laugh of wood winds in the trees overhead.

M-17

橋をわたるとき、アンは幼いころのような半ば心地よい恐れを感じて全身をすくませた。(332)
(原文) sometimes it crossed rivers on bridges that made Anne's flesh cringe with the old, half-delightful fear

M-18

いまは森の中がすてきなよ。しだも、しゅす地のような葉も、いろんな木の実も、森のものはみんな眠ってしまったの。(343)
(原文) It's lovely in the woods now. All the little wood things--the ferns and the satin leaves and the crackerberries--have gone to sleep.

M-19

アンは屋根部屋から教科書をおろしてきて言った。「ああ、古いお友達よ、またあんたがたのなつかしい顔が見られてうれしいわ――幾何さん、あんたでさえもなつかしいわ。(後略)」(358)
(原文) she declared as she brought her books down from the attic.
"Oh, you good old friends, I'm glad to see your honest faces once more--yes, even you, geometry.



ウォン・カーウアイ

王家衛

住人の悲しみを映す部屋、ビール瓶と話す男

上海出身（1958-）香港の映画監督、脚本家

参考：ウォン・カーウェイ監督・脚本 映画『恋する惑星』（原題：重慶森林， Chungking Express ）1995 日本公開， 制作会社：ジェットトーン

W. カーウアイの対無生物コミュニケーション

カーウアイは映画『恋する惑星』を研究の対象としている。フィクションであるが、カーウアイの知覚が表現されているものとして取り上げることにした。『恋する惑星』映画は2つの恋愛エピソードから成っているが、2番目のエピソードに部屋のモノが住人の感情を投影している描写がある。

警官の 663 号はスチュワーデスの恋人と別れる。恋人が去った後の部屋で、「彼女が出て行って家中の物がとても悲しんでいた」と、663 号は石鹸やタオルに話しかけ、タオルを乾かす、シャツにアイロンをかけるなど言葉と行動でコミュニケーションをとる。

「泣くなよって言ったのに。強く生きろよ。本当に情けない姿だ。おいで（タオルを絞って、窓枠にかける） ご気分は？」（W-3）・・・水を滴らせているボロボロのタオルに向かって

「（ナレーション）寂しいか？ 少しの間の辛抱だよ。寒いか 暖かくしてやる」（吊るされた元恋人の制服シャツを見上げながら。663 号はシャツにアイロンをかける）

ここで、「情けない姿」「寂しい」というのは、いうまでもなく 663 号である。普通の見方をすれば、部屋のモノたちは恋人との時間を過ごした思い出させ、それによって 663 号が悲しんでいる。しかし、ここでは 663 号の気持ちが部屋のモノに投影され、部屋のモノが悲しんでいるとして、663 号が逆に部屋のモノたちをなぐさめようとしているのだ。

一方、売店の客である 663 号に好意を寄せるフェイは、不意のことから 663 号の部屋のカギを手に入れる。フェイは 663 号の留守中に勝手に上がり込んで部屋を掃除し、模様替えする。元恋人との思い出の詰まった品々が知らない間に取り替えられてゆき、気づかないうちに 663 号は失恋を乗り越えていく。フェイの想いに気がついた 663 号は、フェイをバーで待ち合わせる約束をする。しかし、約束の場所にフェイが来ず、663 号はバーテーブルの上のビールびんと話す。

「（ナレーション）俺はビールびんと話し始めた
がっかりか？（瓶）
そうでもない（663 号）
帰って寝ろ 彼女は来ない（瓶）」
（663 号は瓶の残りを飲み干す）（W-12）

家の中のモノは、悲しむ、やせる、泣く、寂しい、寒い、泣き虫ヤケになる、太る、多感、隠れる、などの言葉で状態が表現され、感情だけでなく、その形状を人体に対応させている。また、タオルを窓にかける、アイロンをかける、ビールの残りを飲み干す、など実際の行為は、ひとりでごっこあそびをしているようでもあり、モノとじゃれあっているようでもある。

663 号は恋人との思い出が詰まったモノたちが知らないうちになくなっていくとともに、失恋を乗り越えてゆく。これはつまり、モノがなくなると、モノにまつわる感情がなくなっていくということを意味する。

■特定のモチーフを繰り返し使う

カーウアイの映画は、登場人物が極端に少なく、ストーリーの展開は、主人公たちの内面に集中する。独り語りのナレーションは人物同士の会話と同じくらいの分量である。それも、心象を断片的につぶやくような言葉で、これはカーウエイの作品を通しての特徴である。また、同じ俳優を自分の作品で繰り返し起用する。

『恋する惑星』は 1 つの映画に 2 つのエピソードが入っているという不思議な構成となっており、2 つのエピソードは基本的に絡み合わず独立している。

カーウアイのほかの映画でも、恋愛風景を印象的に撮るようなものがほとんどである。ストーリーの組立てがシンプルであり、時系列的な展開があまりない。特定のイメージをツギハギしているような構成となっている。また、タバコ、スチュワーデス、掃除をする女性、制服の男性、食事、めくり時計など特定のモチーフをいろいろな映画で登場させる。

また、カーウアイの映画ではナレーションは男性側から語られるのがほとんどであり、一番の関心はいろいろな女性像を描くことにあるようで、これは女性像を収集しているようでもある。

カーウアイの映画に登場する人物の職業はかなり限られている。警官、殺し屋、スチュワーデス、売店の店員といった職業の人物をカーウアイは映画のなかにたびたび登場させるが、彼らが勤務している姿をリアリティをもって描かれることは少ない。警官やスチュワーデスという職業は、彼らが普段どのようなことをしているかではなく、アイコンとして重要であるようだ。カーウアイは世の中の職業について、かなりシンプルに捉えているようだ。

W. カーウアイの対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ W-1 ～ 12 は対無生物コミュニケーションの箇所

※ 基本的にぬいぐるみは対無生物コミュニケーションの対象としないが、
映画の中ではほかのモノと同列で登場したので書き出した。

W-1

「彼女が出て行って家中の物がとても悲しんでいた」

W-2

「やせたな 前はもっと丸っこかった 気の毒に。もっと自分に自身を持て」(石鹸に向って)

W-3

「泣くなよって言ったのに。強く生きろよ。本当に情けない姿だ。おいで(タオルを絞って、窓枠にかける) ご気分は？」(水を滴らせているボロボロのタオルに向かって)

W-4

「何か言え。彼女を許せ」(ねずみのぬいぐるみに向かって)

W-5

(吊るされた元恋人の制服シャツを見上げながら)
「(ナレーション、以下N) 寂しいか？ 少しの間の辛抱だよ。寒いか 暖かくしてやる」(663 号はシャツにアイロンをかける)

W-6

「部屋も感情を表わし始めた 部屋は相当な泣き虫だった 部屋が泣き出すと 始末におえない」(水浸しになった部屋を見て)

W-7

「どうしたんだ なぜ急にこんなに丸々と太った 彼女がいないからといって ヤケになって太るな」(新品の石鹸に向かって)

W-8

「お前もずいぶん変わったもんだ 個性がなくなった 彼女がいないからって変わることはない 反省しろ」(新品のタオルに向かって)

W-9

「(N) タオルが泣くのを見てうれしかった 本質は前と同じ多感なタオルだ」(水を滴らせたタオルを見て)

W-10

「最近いろんな物がきれいに見える 前はマヌケに見えたけど可愛く思えてきたよ でもあまり遊び回るなよ 真っ白だったのに 今は黄色だ ほら こんな傷までつけて ケンカでもしたのか？」(シロクマのぬいぐるみが黄色いトラ猫になっているのを見て)

W-11

「隠れてたのか？ ずいぶん搜したぞ 隠れてないで 現実に関わり向かえ カビだ 明日 日光浴させてやるからな」(彼女がのこしていったシャツに向かって)

W-12

「(N) 俺はビールびんと話し始めた
がっかりか？ (瓶)
そうでもない (663 号)
帰って寝ろ 彼女は来ない (瓶)」
(663 号は瓶の残りを飲み干す)
・・・約束の場所にフェイが来ないシーン



アンネ・フランク

Anne Frank

日記に話しかける

ドイツのフランクフルト市出身（1929-1945）

裕福なドイツ系ユダヤ人家庭の次女として生をうける。隠れ家生活に入る直前の1942年6月から1944年8月まで綴られた秘密の日記と、手紙の宛先である架空の友人”キティー”“に対してアンネは話しかける。

参考文献

アンネ・フランク著、深町眞理子訳『アンネの日記 完全版』1994、文春文庫

A. フランクの対無生物コミュニケーション

アンネは架空の友人「キティー」にあてて、隠れ家生活について綴った日記を残した。毎日の日記は「親愛なるキティーへ」で始まり、「じゃあまた」などと締められる。内容はアンネ自身のこと、身のまわりで起こったことなどである。アンネの中では、日記はいつも同じ話を聞かされて「うんざり」したり、「飽き飽き」したりする。感情表現は以下のようなネガティブなものである。うんざりする、わかる、飽き飽きする、辛抱強い、理解しようと努める、話を聞く、わかる、うれしくないと思う、知らない、言う、見る、驚く、茶毘に付される、秘密を守る、牛みたいな気分になる、想像する、笑う、即答する、悲鳴を上げる、我慢する

■日記に重ねられた3つの意味

アンネにとって日記は、「架空の友達」、「書簡体小説」、「モノ」の3つのそれぞれの存在として存在し、扱われている。

日記の中では“あなた”という呼びかけが多いが、それが日記をさしているのか「キティー」をさしているのかは不明確である。「日記を書くこと」と「キティーに手紙を書くこと」は彼女の中で混同しているようだ。アンネにとって、日記に記述することは、日記自体とキティーに手紙を書くこと両方であり、どの程度分けて捉えているのかが明確でない。

日記を書くことが彼女の中で日記に話しかけていることであるとは考えにくい。「キティー」への呼びかけは、一日の日記の冒頭と終わりにほぼ限られ、あとはまわりで起きたことと自分の気持ちを一方的に書いているだけだからだ。また、日記自体に知覚があるのなら、日記はアンネと一緒にいるのであるから、隠れ家の中で起きていることを知っているはずであるし、アンネの心の中も読み取ることができるはずである。

これまであなたにはずいぶん元気づけられてきました。同様に、いつものわたしの手紙の宛先になっているキティー、彼女もやはり大きな励ましになってくれます。(中略) おかげでいまでは、つづきを書くのがほとんど待ちきれないくらいです。(F-2)

たとえば、ここでは、「あなた」は日記のことをさしているが、「キティー」とは別のものとしてとらえられている。キティーの名は毎日綴られており、単なる書簡体小説のようである。

もういいかげんうんざりさせられてる人たち、いつもわたしの気持ちを曲解する人たち、そういう人たちを我慢しなくちゃならないためです。近ごろわたしが結局はこの日記帳にもどってくるのは、それだからなんです。キティーはいつも辛抱づよいので、このなかでなら、わたしの言い分を最後まで聞いてもらえるからなんです。(F-33)

■万年筆が茶毘に付される

日記へとも架空の友人ともつかない「キティー」への呼びかけよりも、対無生物コミュニケーションをより明確に表わしている箇所は、アンネが日記と出会ったときのエピソード(F-3,F-4)と、万年筆を間違えて燃やしてしまったときのエピソード(F-55)である。これは他の対物対話者の事例と似ていて、モノをモノとして捉えながら、同時に人間のように扱っている。

七時を過ぎるとすぐに、パパとママにおはようの挨拶をしにゆき、そのあと居間へ行って、贈り物の包みをあけにかかりました。真っ先に出てきたのが、あなた——ひょっとすると、いちばんすてきな贈り物かも。(F-5)・・・日記帳について

「わが万年筆の思い出にささぐる頌歌」

わたしの万年筆は、どんなときにも、わたしの持ち物のなかでいちばん貴重なものでした。(中略) わたしが十三になってからは、万年筆もいっしょにこの《隠れ家》へき、これまで数えきれないほどの日記や作文を書きつづるのに役立ってくれました。いまわたしは十四になり、わたしたちは過去一年間をここでもともに過ごしてきたことになります・・・(中略: アンネは万年筆の人生(英文ではLife)を自分の成長と一緒に説明する。九才のときに万年筆が“やってきた(arrive)”ときから、一年ずつ、自分が年を重ねるとともに万年筆のその時々活躍や隠居を書き記す) たったひとつ、ささやかながら慰めがあります。わたしの万年筆は、火葬に付されたということです。わたしもいずれは火葬にしてもらいたいと思っていますから。(F-55)

■人物の理想化と恋愛妄想

キティーはアンネの考えをなんでも共感してくれるはずの、いくらでも我慢強く話を聞いてくれる理想の友達であるが、その他にも、祖母、初恋のペーテル、お父さんも理想化されている。また、アンネはときおり愛の発作にかられ、同じ隠れ家のペーターに対して、また、既に亡くなった祖母や初恋のペーテル (285) に対して、熱烈な愛情を燃え上がらせ、妄想的な傾向がある。

今夜、蠟燭の光に見っていると、心がなごやかになり、幸福を感じました。蠟燭の光のなかに、お祖母ちゃんがいるみたい。そしてわたしを護り、かばってくれて、どんなときにも幸福を味わわせてくれるひと、それもやっぱりお祖母ちゃんです。(346)

ペーターの表情からも、彼が大なり小なりわたしとおなじ気持ちでいるのが見てとれます。(350)

ああ、ペーターとペーテル、あなたがたはひとりです。おなじひとなんです！(414)

■なりかわり、自分や神との対話

アンネはキティーに話しかけるだけでなく、隠れ家の住人になりかわって日記を書いたり、心の中で自分とだけ対話することをしている。

ファン・ダーン夫人――「キッチンの女王と言う役割にも、もうとつくに魅力なんか感じなくなったわ。なんにもせずにただすわってるのは退屈だから(後略)」(369, 508)

新しい思いつき。食事の席ではひとに話しかけず、心のなかで自分とだけ対話することにしました。(223)

「さあ、外へお行き。お笑い。そして新鮮な空気を吸うんだよ」そうわたしの内なる声が叫びます。(244)

思わずこう自問しました。「アンネ、ほんとうにあんたが書いたの、“憎らしい”なんて？ よくもこんなことが書けたわね」って。(271)

そうです、アンネ、あなたは心の奥底で、あの手紙があまりにどぎつく、また真実でもないことを感じていたはずです。(488)

■空と自然から多幸感を得る

窓から見える青空や、木や枝のしずく、空を飛ぶカモメをみて口も聞けないほど感動するなどの記述がある。

孤独なとき、不幸なとき、悲しいとき、そんなときには、どうかお天気のいい日を選んで、屋根裏部屋から外をながめる努力をしてみてください。街並みだの、家々の屋根を見るのではなく、その向こうの天をながめるのです。恐れることなく天を仰ぐことができるかぎり、自分の心が清らかであることを自覚し、そして、これからもきっと幸福を見いだせると信じているかぎり、いつも。(334)

ひょっとして、わたしが自然に関するあらゆることにこれほど熱中するようになったのは、あまりに長いあいだ、外の世界からへだてられてきたせいでしょうか？ いまでもよく覚えていますけど、以前は、澄みきった紺碧の空にも、鳥たちの歌声にも、月光や花々にも、これっぽっちも魅力を感じなかったときがあります。それがここへきてからすっかり変わりました。たとえば、せんだつてのひどく暑かった精霊降臨節のとき、ひとりきりで心ゆくまでお月さまをながめていたいと思い、ある晩、わざわざ十一時半まで目をさましていました。(中略) またべつのときには――もう何ヶ月も前のことですが――ある夜たまたま上へ行くと、窓がひらいていたことがあります。そのときは、窓をしめなくちゃならなくなるまで、下へ降りる気にはなりません。暗い雨もよいの空、強風、ちぎれとぶ雲、すべてがその力で完全にわたしをとらえてしまいました。ここへきてから一年半たって、はじめてわたしは、夜空ととともに向かいあったのです。それ以来、もう一度それを見たいという欲求が強まって、泥棒とか、鼠とか、家に踏みこまれて連行されることとか、そういった恐れを忘れさせるほどになり、何度かたったひとりで階下へ降りて、社長室やキッチンの窓の隙間から、そっと外をながめてみました。(中略) わたしは空を見あげ、雲を、月を星をながめるとき、心が落ち着いて、辛抱づよくなれます。これはけっして気のせいではありません。(中略) あいにくわたしはその自然を、ごくときたま、それも埃だらけの窓にかかった、汚れたレースのカーテン越しに見るだけです。でも、そういうものを通して見るだけでは、もう満足できません。自然こそは、ぜったいに純粹無垢でならなくてはならない唯一無二のものなんですから。(541-542)

アンネ・フランクに関しては、日記の冒頭ではたしかに日記のことを「あなた」と呼んでいたのに、「あなた」と書かれている部分をすべて取り出した。しかし、「あなた」の示す対象は、日記のかなり早い段階で日記自体から架空の友人へと移行していたの

A. フランクの対無生物コミュニケーションの抜き出し

※ F-1 ~ 103 は対無生物コミュニケーションの箇所

注意1

「あなた」「キティ」と直接呼びかける表現、また、「紹介します」「もう言いましたっけ？」など相手がいることを前提とした表現を含む箇所を抜き出した。

また、『アンネの日記』にはオリジナルバージョンと清書バージョンがあり、かつ、編集者によって、退屈な部分、不適切と思われる箇所が取り除かれている。ここで使用した資料は、編集されたバージョンの日本語訳である。

注意2

日記に話しているのか架空の宛先に話しているかはわからないところが殆どであるが、すべて抜き出した。

F-1

あなたになら、これまでだれにも打ち明けられなかったことを、なにもかもお話できそうです。どうかわたしのために、大きな心の支えと慰めになってくださいね。(13)

F-2

これまであなたにはずいぶん元気づけられてきました。同様に、いつものわたしの手紙の宛先になっているキティー、彼女もやはり大きな励ましになってくれます。(中略) おかげでいまでは、つづきを書くのがほとんど待ちきれないくらいです。(13)

F-3

ほんと、あなたもいっしょにここへ連れてきて、とってもよかった！(13)

F-4

まずはあなたを手に入れるまでのいきさつから始めましょう。いえ、もっと正確に言えば、お誕生日のテーブルに、あなたが置かれているのを見たときから（なぜって、買ったときにはわたしもその場にいたんですけど、それは数のうちにははいりませんから）。(14)

F-5

七時を過ぎるとすぐに、パパとママにおはようの挨拶をしにゆき、そのあと居間へ行って、贈り物の包みをあけにかかりました。真っ先に出てきたのが、あなた——ひょっとすると、いちばんすてきな贈り物かも。

F-6

さて、そろそろやめなくちゃ。このつぎもまだまだたくさん書くことがあります。あなたにお話したいことがどっさり。じゃあね、バイバイ。いいお友達になりましょう！

F-7

というわけで、いよいよ問題の核心、わたしがなぜ日記をつけはじめるかという理由についてですけど、それはつまり、そういうほんとうのお友達がわたしにはないからなんです。

もっとはっきり言いましょう。十三歳の女の子が、この世でまったくひとりぼっちのように感じている、また実際にひとりぼっちなんだと言っても、信じてくれるとはいえないでしょうから。わたしには、愛する両親と、十六歳のお姉さんがいます。友達と呼べるひとを三十人ぐらいは知っています。ボーイフレンドもぞろぞろいます。(中略) そう、なにひとつ欠けてるものなんかなさそうです。ただひとつ、その“ほんとうの”お友達を除いては。でもそれは、ほかのお友達みんなについても言えることで、だれもがただふざけあったり、冗談を言ったりするだけ。それ以上の仲じゃありません。身のまわりのごくありふれたことのほかは、だれにもぜったいに話す気になれませんし、どうやらみんな、おたがいそれ以上に近づくこ

とは無理みたいです。そこが問題の根本なんです。あるいはわたしにひとを信頼する気持ちが欠けてるのかもしれませんが、そうだとすると、それは厳然たる事実ですし、それをどうにかすることもできそうにありません。そこで、この日記を付けることにしたので。(22-23)

F-8

長いあいだ待ち望んできたこのお友達の姿が、わたしの心の目にいっそう輝いてみえるよう、たいがいのひとがするように、日記のなかにあけすけな事実を書きつらねることはしないつもりですけど、それでも、この日記帳自体はわたしの心の友として、今後はわが友キティーと呼ぶことにしましょう。

あらやだ、ばかみたい！ わたし自身の紹介を忘れちゃいけませんよね。

ここでいきなりキティーに宛てて手紙を書きはじめても、いったいなんの話をしているのかさっぱりわからないでしょうから、気はすすみませんが、ひとまずわたしの生い立ちを簡単にしるしておきます。(23)

F-9

あらためて本腰を入れて日記を書きはじめることにします。(23)

F-10

さあ、これでお友達になる下地ができました。ではまたあした。

F-11

きょうまであなたに手紙を書くひまがありませんでした。(33)

F-12

だれよりもたいせつなキティーへ(38)

F-13

日曜日からきょうまでのあいだに、何年もたってしまったような気がします。いろんなことが起こって、まるで世界中がひっくりかえったみたい。でもキティー、わたしはちゃんと生きてますし、いまはそれがいちばんだいじなことだとパパも言ってます。

ええ、そうです、たしかにわたしはまだ生きています。でも、どこで、どうやってか、それは訊かないでください。聞いたって、とてものみこめないでしょう。ですからとりあえず、日曜日の午後起こったことからお話しします。(41)

F-14

長々とわたしたちの住まいについての説明をきかされて、さぞかしうんざりしているでしょう。でもやっぱり、わたしがどういうところに落ち着いたか、それを是非とも知っていただきたいかったです。(50)

F-15

パパも、ママも、マルゴーも、いまだに角の西教会の時計塔から流れて来る、十五分ごとの時鐘の音に慣れません。でもわたしは平気です。最初からこの音が気に入っていましたし、とくに夜は、忠実なお友達のような気がしますから。(52)

F-16

とにかく、ママたちとはどうにも気が合いません。このことは以前から感じてきましたが、近ごろはそれをとくに強く感じます。うちの家族同士のべたべたした関係には、もううんざり。あれならわたしは孤立してるほうがまだましです。なのにママたちは、こうして四人いっしょに暮らせて、しかも仲よくやってゆけるのは、どんなにしあわせか、そんなことばかり言って、ひょっとしたらこのわたしなんか、ぜんぜんそんなふうには感じていないかもしれない、などとはこれっぽっちも考えたことがないみたい。(57)

F-17

おまけにときどきモールチェのことを話題にしますが、それこそわたしのいちばん触れられたくない、いちばんヨワイ点なのです。一日じゅう、モールチェのことを思わないときはありませんし、どれだけ彼女のいないのを寂しく思っているか、だれにも想像できないでしょう。モールチェのことを思うと、涙が出てきます。ほんとにかわいい猫で、わたしはいまでも心から愛しています。いまからでも彼女をとりもどせたらなあ、なんて、あれこれ計画を夢に思い描くほどです。ここではたえずそういうすてきな夢想にふけています。(57)

F-18

このごろパパはとってもやさしくなって、完全にわたしを理解してくれます。いつかパパと、いつものように話の途中で泣きだしたりせずに、ほんとうに胸中を打ち割って話しあえたら、そう思います。でも、やたらに泣くって、年ごろのせいもあるみたい。(58)

F-19

おじさんたちはわたしに、ペーターのほうはとてもわたしのことが好きなんだから、なんとかすこしでもペーターをすきになってやってくれないか、なんて言うんです。わたしは「わあいやだ!」と思って、「えーっ、とんでもない!」なんて言ってしまいました。まあ気持ちはわかるでしょ?(75)

F-20

猫のムッシーは、だんだんわたしに馴れて、親しみを見せるようになりました。でもわたしは、いまだにこの雄猫がちよっぴり恐ろしく思えます。(77)

F-21

きょう、ママといわゆる、“話し合い”をしました。でも、われながらうんざりしたことに、わたしは例によってろくに話もしないうちから、すぐさまわっと泣きだす始末。この泣き虫癖ばかりは、自分でもどうにもなりません。(77)

F-22

マルゴーもママも、性格的にはおおよそわたしと正反対です。実のおかあさんよりも、お友達の方がよっぽどよく理解できるなんて——悲劇ですよ、これって!(78)

F-23

きのうはまだまだ言いたいことがあったんですけど、途中で切りあげなきゃなりませんでした。(81)

F-24

ねえキティー、こんなふうにわたしがさんざんばかにされたり、あざけられたりしながら、ときには内心で煮えくりかえる思いをしてるんだってこと、これがあなたにわかってもらえさえしたら。じっさい、それをいつまでおさえておけるか自信がありません。(中略)でもまあ、この話はこれでやめます。喧嘩の話には、きっとあなたも飽きあきしているでしょう。(82)

F-25

こういう隠れ家生活をしていると、いろいろ変わったことが起こります。まあ想像がつくでしょうけど、ここにはお風呂がないので、たらいを使って行水します。(86)

F-26

八時ごろ、急に呼び鈴がけたたましく鳴ったんです。(中略)だれのことか、おわかりでしょう?(88)

F-27

ベップが(中略)マルゴーとペーターわたしとのために、速記の通信講座を申し込んでくれました。まあ楽しみにしてください。(90)

F-28

しめくりにひとつ、ファン・ダーンのおじさんのとびきりしゃれたジョークをご披露しましょう。

F-29

ぜんぜんあなたに手紙を書いているひまがありません。(100)

F-30

それから、フランス語の不規則動詞を五つ覚えました。すごい奮闘ぶりでしょう?(105)

F-31

まあ考えてもみてください、ここではお医者さんを呼ぶこともできないですよ!(106)

F-32

居間書いているこの手紙、これをわたし以外のだれが読むでしょう?自分以外のいったいだれから、わたしは慰めが得られるでしょう?(114)

F-33

もういいかげんうんざりさせられてる人たち、いつもわたしの気持ちを曲解する人たち、そういう人たちを我慢しなくちゃならないためです。近ごろわたしが結局はこの日記帳にもどってくるのは、それだからなんです。キティーはいつも辛抱づよいので、このなかでなら、わたしの言い分を最後まで聞いてもらえるからなんです。(115)

F-34

どうかわたしを責めないでください。むしろ、このわたしだってたまには爆発しそうになる、そういうことがあるというのをどうか覚えていてほしいんです。(116)

F-35

それにしても、どうしてこんなくだらない話であなたを煩わすのかしら。わたしって、ひどい恩知らずですよ、キティー。それはわかってます。でも、あんまりみんなから非難ばかり浴びせられ、

(後略)(131-132)

F-36

ああ、やれやれ、どうやらあなたまで混乱させてしまいそう。ごめんなさい。(中略)ですからあなたには、いまの最後の一説は読まないでほしいし、ましてや、読んで理解しようなんて努めるのはやめてほしい、そうお願いだけです。どうせうまくいきっこありませんから！(134)

F-37

もう薄暗くなっていますが、あなたに手紙を書けるくらいの明るさがあります。
(140)

F-38

でもまあ、これ以上こんなお年寄りの話を聞かせて、あなたをうんざりさせるのはやめましょう。(144)

F-39

ところで最近、この家でなにがあったかわかりますか？(153)

F-40

ぜひ紹介させてください。われら若者の擁護者、ママ・フランクです！(159)

F-41

モッフィーのこと、まだご存じじゃありませんでしたよね。

F-42

速記の講習が終わりました。これからはいいよスピードをあげる練習です。ずいぶん利口になったとは思いませんか？ ついでですから、ここでもうすこしわたしの暇つぶし学科についてお話ししましょう。(169)

F-43

わたしのお誕生日のためにパパが書いてくれた氏は、とてもすきなので、あなたにもご紹介しします。(中略)上手な翻訳かどうかは、御判断に任せます。(185)

F-44

いろんなことが起こりました。ただ、ときどき思うんですけど、あなたはわたしの愚にもつかないおしゃべりにうんざりして、そうたびたび手紙をもらってもうれしくない、なんて思ってるかもしれません。(187)

F-45 ねえどうでしょう、わたしにだって、たまには苦情を言う理由があるとは思いませんか？

F-46

ところでキティー、あなたはまだ戦時体制を生き抜いたことがないはずですし、わたしがいろいろと手紙で知らせてあげるとはいえ、隠れ家生活についてはほとんどご存じないでしょう。ですから、ほんのお慰みまでに、いずれまた外で暮らせるようになったとき、わたしたちひとりひとりが真っ先になにをしたいか、それをご紹介しましょう。(201)

F-47

こう書くと、たぶんあなたは、騒ぎのない日は一日もないのね、なんて言うんじゃないでしょうか。(203)

F-48

(前略)あなたにもわたしたちの暮らしかたが多少はわかっていただけだと思いますけど、(中略)それでも、わたしたちの暮らしをいっそうよく知っていただくために(211)

F-49

ママがこの種のことをなんと読んでるか、おわかりですか？(223)

F-50

そしてわたし自身は、ごらんのように、下手くそな文字しか書けません。(224)

F-51 あなたに手紙を書くたびに、なにか特別なことがおこっているみたいですが(234)

F-52

ご存じのように、わたしたちはみんなクレイマンさんが大好きです。(235)

F-53

クレイマンさんがまったく普段どおりにわたしたちにさよならを言ったときのようす、ぜひあなたにも見せてあげたかった。(235)

F-54

あなたがもしわたしの手紙の山をつぎつぎに読みかえすことができれば、きっと、それらを書いたときの気分が、あまりにもまちまちなのに驚くことでしょう。(247)

F-55

「わが万年筆の思い出にささぐる頌歌」
わたしの万年筆は、どんなときにも、わたしの持ち物のなかでいちばん貴重なものでした。(中略)わたしが十三になってからは、万年筆もいっしょにこの《隠れ家》へき、これまで数えきれないほどの日記や作文を書きつづるのに役立ってくれました。いまわたしは十四になり、わたしたちは過去一年間をここでともに過ごしてきたことになります・・・(中略：アンネは万年筆の人生(英文ではLife)を自分の成長と一緒に説明する。九才のときに万年筆が“やってきた(arrive)”ときから、一年ずつ、自分が年を重ねるとともに万年筆のその時々活躍や隠居を書き記す)たったひとつ、ささやかながら慰めがあります。わたしの万年筆は、火葬に付されたということです。わたしもいずれは火葬にしてもらいたいと思っていますから。(250-253)

F-56

きのうの夜、眠りに落ちる直前、ふいにわたしの目の前にあらわれた人影、だれだったと思いますか？

F-57 あなたに手紙を書いたら、“身も世もない嘆き”がいくらか晴れました。

F-58

ベップって、なんて親切なんでしょう。そう思いませんか？(270)

F-59

これを見ると、激しい憤激に煮えくりかえり、憎悪にあふれてるように見えるけれど、どうしてそこまで思いつめて、それをあなたにぶちまけなくちゃいけなかったんだろう、って。(271)

F-60

きょうは三つのことを告白しなくちゃなりません。時間はかかりますが、もしどうしてもだれかに話さなくちゃならないとしたら、あなたに勝る相手はないでしょう。たとえなにがあらうと、あなたはぜったい秘密を守ってくれるはずですから。

F-61

なんてばかだったんでしょう。うっかり忘れてましたけど、かつてのわたしのおおいる恋の物語について、まだあなたにはお話ししたことがなかったんでしたね。(282)

F-62

そういつもいつも、わたしたちの喧嘩や口論のことばかりを事細かにお話ししてみてもしかたありません。(290)

F-63

追伸——パパからケーキのことをあなたに話したかと訊かれました。おかあさんへのお誕生日のプレゼントとして、事務所の人たちが戦前のような本物のモカケーキを贈ってくれたんです。ほんとにすてきな贈り物！(293)

F-64

人間って、どうしていつもほんとうの感情を懸命になって隠そうとするのか、あなたにはそれがわかりますか？ どうしてわたしは人前に出ると、本心とはまるで裏腹な行動をとってしまうんでしょうね？ どうして人間って、これほどまでにおたがいを信頼できないんでしょうね？(294)

F-65

こう聞くと、あなたはきっと言うでしょうね、キティー。「ええっ？ まさかアンネったら、それがほんとにあなたの口から出た言葉なの？ いままで四階の人たちから、さんざんひどいことを言われてきたのに？ あれほど不当に扱われてきたのに？」って。でもまちがいありません。このわたしがはっきり言うんです。(295)

F-66

けさ、ふと考えてみました。ひょっとしたらあなたは、古いニュースの断片をくりかえしくりかえし反芻させられて、ときには牛みたいな気分になってるんじゃないだろうか。そしてついにはそれにうんざりして、大あくびをしながら、アンネもたまにはなにか斬新な話題を持ちだせばいいのに、なんてひそかに願ってるんじゃないだろうか。やれやれ、わたしも退屈なことはわかってるんです。でも、ちょっとだけわたしの立場になって、ここでしょっちゅう古い話を持ちだしてくる年寄りたちに、わたしがどれだけうんざりしてるかを想像してみてください。(304)

F-67

連合軍の上陸作戦を待望する気分は、日ごとに全国で高まっています。もしあなたがここにいたら、いっぽうではわたしとおなじに、それにたいする防備がすすんでいるのを肌で感じることでしょうし、またいっぽうでわたしたちのことを、空騒ぎをしていると笑うかもしれません。(308-309)

F-68

いまの気持ちをお伝えすることは、とてもできそうにありません。(314)

F-69

また土曜日。そして土曜日と言えば、もうそれだけで状況はおわかりでしょう。(325)

F-70

あなたとおなじに、わたしもそれを寂しく感じているのです。(333)

F-71

追伸——あなたがわたしたちのために名探偵を見つけてきてくれたら、みんな大喜びするでしょうね。(339)

F-72

追伸——うっかり言い忘れるところでしたけど、ゆうべ、大雪が降りました。(349)

F-73

追伸——わたしがいつの場合もあなたにたいしてだけは正直であること、このことはご存じでしょう。ですから、これも告白なくてはなりませんけど、いまわたしはじつのところ、彼に会うことだけを目的に生きています。(352)

F-74

わたしがマルゴーには言わなかったこと、でもキティー、だれよりもたいせつなあなたにだけはぜひ打ち明けたいと思うこと、それは、最近よくペーターの夢を見るということです。おとといの晩は、こんな夢でした。(359)

F-75

だからといってキティー、あなたまでうんざりさせるには及びませんものね。(363)

F-76

なんだか話が混乱してきたみたいですね、キティー。(364)

F-77

ええ、たしかにそうです。でも、こうしてあなたにいっさいをぶちまけてしまったら、あとは一日じゅう、できるだけつつぱって、陽気に、自信ありげにふるまってみせます。(365)

F-78

たぶんあなたにはおもしろいでしょうから（わたしにはちっともそうじゃありませんけど）、きょうはわたしたちがこれからなにを食べようとしているかをお話ししましょう。(367)

F-79

屋根裏部屋にいるとき、そしてあなたといっしょに過ごすとき、そのときだけ、つかのまわたしは自分をとりもどせます。(373)

F-80

そうですとも、キティー、アンネは頭のおかしな子。でも、わたしの生きてるのは異常な時代、暮らしているのは、もっともっと異常な環境なのです。(374)

F-81

これまで、わたし自身について、わたしの気持ちについて、あなたほどにいろいろお聞かせした相手はひとりもありません。ですから、セックスの問題についても、いくらあなたにお話ししたっていいんじゃないかと思います。(379)

F-82

それは結婚そのものとは無関係なことですから。でしょう？ (379)

F-83

ごめんなさい、キティー、きょうはいつもより文章が乱れているのをお詫びしなくちゃ。(386)

F-84

このようすだと、ほんとにこの《隠れ家》に一大ロマンスの花が咲くかもしれませんよ、キティー。(392)

F-85

あなたにはずいぶんいろんなことをお話してますけど、それでも、わたしたちの生活のごく一部しか、あなたはご存じないのです。(416)

F-86

ちょっと想像してみてください。(418)

F-87

あなたからおたずねがありましたから、わたしの趣味とか、関心を持っていることなどについて、お答えしたいと思います。でも、前もってご注意申し上げておきますけど、あんまりたくさんあって、どうかびつくりなさらないでください！(428)

F-88

ねえキット、ほんとにきょうのわたしって、ちょっとへんですよ。(448)

F-89

きのうの日付を覚えておいてください。わたしの一生の、とても重要な日ですから。もちろん、どんな女の子にとっても、はじめてキスされた日と言えば、記念すべき日でしょう？(453)

F-90

とはいうものの、キティー、たぶんあなたにも察しがつくでしょうけど、わたしはやっぱり迷っているのです。(457)

F-91

ねえキティー、即答してください、カバには足の指が何本あるでしょう。(467)

F-92

政治のニュースはお休みです。なにひとつ、まったくなにひとつお知らせすることはありません。(468)

F-93

おとうさんがなんと言ったか、わかりますか、キティー？(485)

F-94

追伸——たしか、新しくきたお掃除のおばさんのこと、お話しましたよね。(495)

F-95

ああキット、外はすばらしいお天気です。こんな日に外へ出られさえしたら！(495)

F-96

四階の人たちのお昼寝（二時半まで）を邪魔するわけにゆきませんので、今回にかぎり、鉛筆書きの手紙で我慢してください。(501)

F-97

四番めに、秘蔵の映画スターの写真がぜんぶごっちゃになってしまっ、て、早急に整理してほしいと悲鳴をあげてるんですけど（後略）(502)

F-98

ねえキティー、わたしがいまにも破裂しそうなこと、わかってもらえますよね？(502)

F-99

やれやれ、ついに、ようやくのことで、わずかにあけた窓の前のテーブルに落ち着き、いっさいをあなたにお伝えできるまでになりました。(520)

F-100

わたしは絶望のあまり痲痺を起こしたり、わざと反対のことをしたりしはじめ、やがてはお察しのとおり、いつものアンネのおなじみのスローガン、「だれもわたしを理解してくれない！」が始まるわけです。

いまやこの言葉はわたしの心にこびりついてます。(539)

F-101

こう言えば、あなたはすぐさま、じゃあペーターはどうなの、そう思うでしょうね、キット。(540)

F-102

とはいえ、この話はすべて真実そのままだったこと、あなたもきっとわかってくださってますよね。(569)

F-103

わたしの言わんとすること、すこしはわかっていただけますか？



アルチュール・ランボー

Arthur Rimbaud

「夜明け」と「戸棚」の中の擬人化

フランス、アルデンヌ県シャルルヴィル出身（1854-1891）の詩人。詩集の中に、擬人法の詩が数編を存在した。

参考文献：宇佐美斉訳『ランボー全詩集』1996，筑摩書房

A. ランボーの対無生物コミュニケーション

ランボーはたくさんの詩を書いていて、全体的に対物対話者の雰囲気があるが、それがはっきりと現れていたのは「夜明け」と「戸棚」の二編だけであった。モノを表す言葉は、善良、お年寄りに似て、知っている、話したいと思う、名前を告げる、倒れ伏す、髪を振り乱す、などが使われた

「戸棚」

彫物のある大きな戸棚 くすんだ檜材
とても古いもので お年寄りに似ていかにも善良そ
うだ
扉の開いた戸棚は その影のなかに流し込んでいる
なみなみと注がれる古い葡萄酒のようなもの 人の
気をひく
さまざまな香りを

なかにはぎっしりと古いがらくたが詰まっている
黄ばんで臭いのするシャツ類 女子供の
着古した衣裳 色あせたレース類
グリフォンの描かれたお祖母さんの肩掛

———まだまだ隠されている 首飾りのロケット
白髪や金髪の房 肖像画
果物の香りが混じったいい匂いのする押し花

———おお 年代ものの戸棚よ 君はいろんな物語
を知っているね
それらをきっと話してみたいと思っているだろう
黒い大きな扉が開くとき 君は微かな物音を立てる
のだ

古い戸棚とその中に入っているモノたちから、その戸棚が過去にどのような人々に使われていたのかを想像している詩である。

R-1
お年寄りに似ていかにも善良そうだ
a pris cet air si bon des vieilles gens

戸棚はお年寄りにたとえられるが、それは風貌がお年寄りのような風格をしていることと、昔のいろんな物語を知っていることがお年寄りのようだという二つの意味がある。

R-2
おお 年代ものの戸棚よ 君はいろんな物語を知っているね
それらをきっと話してみたいと思っているだろう
- O buffet du vieux temps, tu sais bien des histoires,
Et tu voudrais conter tes contes,

戸棚は自分が見てきた物語を話してみたいと思っているようにランボーには感じられた。モノに人生があり、しかもそれがモノの中に記録されているという感じ方は、対物対話者の一般的な傾向である。

「夜明け」

ぼくは夏の夜明けを抱きしめた。

宮殿の正面ではまだなにも動いてはいなかった。水は静止していた。野営する影たちは森の街道から立ち去ってはいなかった。生き生きとしたなまあたかい息吹を目覚めさせながら、ぼくは歩いた。すると宝石類が目を見張り、翼あるものたちが音もなく飛び立った。

最初の企ては、すでに冷たく青白い光に満たされた小道のなかで、ぼくに自分の名前を告げた一輪の花だった。

ブロンドのヴァツサーファル、滝にほほ笑みかけると、滝は樅の林ごしに髪を振り乱した。銀いろに輝くその頂きに、ぼくは女神を認めた。

そこでぼくは、そのヴェールを一枚一枚めくって覗いた。並木道では、両腕を振り動かしながら。平野では、雄鶏に彼女のことを知らせてやった。都会では女神は、鐘楼やドームの間を抜けて逃げていった。ぼくは大理石の河岸を乞食のように駆けながら、彼女を追いかけていった。

街道を登りつめたところ、月桂樹の森のほとりで、ぼくは乱れて重なったヴェールともども彼女を抱擁した。するとその巨大な肉体がわずかに感じられた。夜明けと子供は、森の裾に倒れ伏した。

目が覚めたのは、正午だった。

R-3

ぼくは夏の夜明けを抱きしめた。

J'ai embrassé l'aube d'été.

夜明けはモノではなく、空気のようなものである。しかし、それをランボーは抱きしめた。それは、立原が夜を容積をもったもののように知覚していたことと似ている。また、ここでいう「抱きしめる」とは、脳内の身体の体験を話している。対物性愛者たちがモノと性交を持つことや、立原が本たちと「手を取り合う」という体験と同質のものであろう。

R-4

最初の企ては、すでに冷たく青白い光に満たされた小道のなかで、ぼくに自分の名前を告げた一輪の花だった。

La première entreprise fut, dans le sentier déjà empli de frais et blêmes éclats, une fleur qui me dit son nom.

R-5

ブロンドのヴァツサーファル、滝にほほ笑みかけると、滝は樅の林ごしに髪を振り乱した。

Je ris au wasserfall qui s'échevela à travers les sapins:

ここでは、花が自分に名前を告げ、またランボーも滝にほほ笑みかける、という相互のコミュニケーションがある。

R-6

ぼくは乱れて重なったヴェールともども彼女を抱擁した。するとその巨大な肉体がわずかに感じられた。夜明けと子供は、森の裾に倒れ伏した。

je l'ai entourée avec ses voiles amassés,

et j'ai senti un peu son immense corps.

L'aube et l'enfant tombèrent au bas du bois.

夜明けは女神に擬人化される。それは、ランボーが人間の姿の女神を幻視のではなく、抱きしめたという実感が先に立って、あとから人の形を当てはめたものである。女神のヴェールをめくるといのが何を意味しているのかは不明である。

r-1

そこでぼくは、そのヴェールを一枚一枚めくって覗いた。並木道では、両腕を振り動かしながら。平野では、雄鶏に彼女のことを知らせてやった。都会では女神は、鐘楼やドームの間を抜けて逃げていった。ぼくは大理石の河岸を乞食のように駆けながら、彼女を追いかけていった。

Alors je levai un à un les voiles.

Dans l'allée, en agitant les bras.

Par la plaine, où je l'ai dénoncée au coq.

A la grand'ville, elle fuyait parmi les clochers et les dômes,

et, courant comme un mendiant sur les quais de marbre,

je la chassais.

ランボーの対無生物コミュニケーションを外から見た様子は、単に散歩をしたり駆けたりしているように見える。



ヘンリー・ダーガー

Henry Darger

感情を持った空

シカゴのカトリックの病院で掃除夫をしていた男 (1892-1973)

彼の死後、部屋から『非現実の王国で』(In The Realms If the Unreal)、正式名称は『非現実の王国として知られる地における、ヴィヴィアン・ガールズの物語、子供奴隷の反乱に起因するグランデコ・アンジェリニアンせん相の嵐の物語』(The Story of the Vivian Girls, in What is Known as the Realms of the Unreal, of the Glandeco-Angelinnian War Storm, Caused by the Child Slave Rebellion) という 15,145 頁、15 巻に渡る長編の絵物語が発見される。ダーガーの絵の中の空はいつも活動的で、嵐や稲妻、家財や花々が舞い飛ぶ。鉛筆で雲の稜線を細かく描き、それらはしばしば顔や手がついていて擬人化されている。

※注意

ダーガーの作品は多くをネット上の情報に頼らなければならなかった。書籍が手に入らなかったためだ。Cabinet というニューヨークのアートマガジンの記事と、ダーガーの作品を収蔵しているカル・ハマー・ギャラリーのホームページの情報も使っている。また、水彩画もネット上から集めたものである。

参考文献

(1) ヘンリー・ダーガー、ジョン・M. マグレガー 著、小出由紀子訳『非現実の王国で』2000、作品社

参考サイト

(2) CARL HAMMER GALLERY

<http://www.hammergallery.com/artists/darger/darger.htm>

参照日 2014. 1. 13

(3) Cabinet, ISSUE 3 WEATHER SUMMER 2001

The Moral Storm: Henry Darger's Book of Weather Reports

<http://cabinetmagazine.org/issues/3/henrydarger.php>

参照日 2014. 1. 13

(4) Henry Darger | clouds , STRANGE FLOWERS

<http://strangeflowers.wordpress.com/2012/09/09/henry-darger-clouds/>

参照日 2014. 1. 13

ART SEDIMENTS

<http://www.artsediments.com/2011/01/masterpiece-darger-0156.html>

参照日 2014. 1. 13

deviantART

<http://metal-kiwi.deviantart.com/art/Henry-Darger-Hands-of-Fire-297452921>

Vintage Printable

<http://vintageprintable.com/wordpress/vintage-printable-art-and-design-2/art-paintings-miscellaneous/vintage-printable-art-thematic-outsider-art/henry-darger-storm-brewing-3/>

【H. ダーガーの対無生物コミュニケーションの様相】

顔のついた雲、表情がある空



ダーガーの絵の中の空はいつも活動的で、嵐や稲妻、家財や花々が舞い飛ぶ。鉛筆で雲の稜線を細かく描き、それらはしばしば顔や手がついていて擬人化されている。

ヘンリー・ダーガー（1892-1973）はシカゴのカトリックの病院で掃除夫をしていた男である。割れた眼鏡をつけ、ボロのコートを手につけて、友人はおらず、話すことといえば天気のことだけで、社会からは孤立していた。彼の死後、部屋から『非現実の王国で』(In The Realms of the Unreal) という 15, 145 頁、15 巻に渡る長編の絵物語が発見される。物語の内容は、ヴィヴィアン・ガールズという 7 人姉妹の少女戦士が敵と戦うというものである。美術の教育を受けたことはないダーガーの水彩画は、雑誌の切り抜きなどをトレースするという方法で描かれた。

ダーガーは事例の中で唯一、言葉でなく絵で知覚を表現した人物である。入手できた資料の中で、『非現実の王国で』の文章部分を断片的に読むことができたが、対無生物コミュニケーションの部分はなかった。であるから、ダーガーがモノと話したかどうかは不明である。天候日誌や自伝を参照したさらなる研究が必要である。

■顔と身体をついた雲と痛みの表現

雲にはしばしば身体や顔が重ねられ、殴られる、叫ぶなど痛みを表現している。また、別の絵では雲の上に人間の少女の顔が重ねられ、雲に首を絞められている。どのような文脈でこうした痛みを表す絵が入れられたかはわからないのだが、天候日誌では、空の描写には人間の感情の表現を用いることをしていた。「不安な (unsettled)」とか「威嚇的な (threatening)」といった単語は、「寒い」「暑い」という単語と同じくらい頻出する (3)。また、洪水などの災害や火事や爆煙にも関心を示しており、『非現実の王国で』には国々を水浸しにした大洪水の描写が、何百ページにもわたって描かれる (1), 108。

■天候と災害への高い関心

ダーガーは、1957 年 12 月 31 日から 1967 年 12 月 31 日までほぼ毎日の気象をレポートしたノートを残している。日記の内容は以下のようなもので、ダーガーは天気予報士の予報が当たっていたかどうかいちいち確かめていた。

にわか雪と強風を彼は正しく予報した。しかし、雪はとて細かった。彼は気温はほとんど変わらないと言ったけれど、その点はまったく間違っていた。最低気温は 8 度、最高気温は 5 度で、もっとも暖かかった。また、彼は 20 日には高くなると言った。これは彼が正しかった、西から北西の風はしかし、18 から 28 マイル / 時で強まるというのは間違っていた。実際は 30 ～ 40 マイル / 時であった。

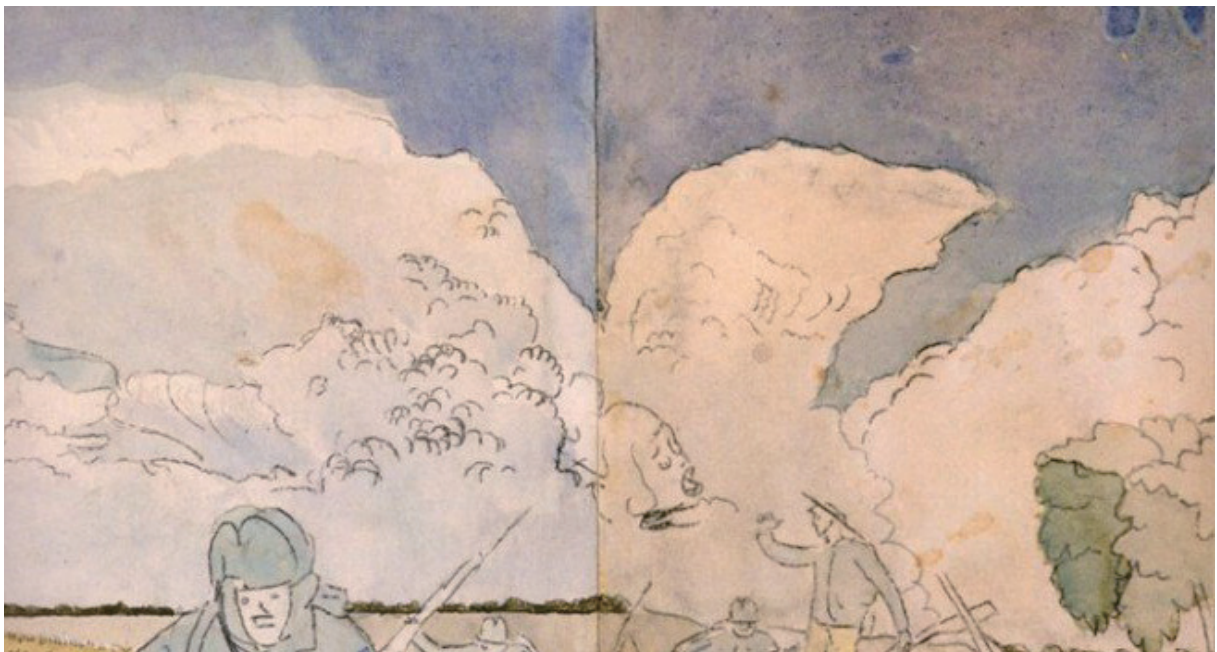
ヘンリー・ダーガー， 1月20日， 1963年
(天候日誌より、日本語訳筆者)

■発声を伴う「なりかわり」

ダーガーも「なりかわり」の傾向があったが、それは発生を伴っていた。彼はひとりだけの部屋で、いろいろな人と話し合っていたようである。

ダーガーの生存中、彼の部屋に足を踏み入れた人はほとんどいない。ひとりぼっちで、自分の殻に閉じこもっていた。おとなになってからというもの、友人はなく、訊ねてくる人もいなかった。それなのに家主は、彼が自分の部屋でにぎやかに話しているのを耳にしたという。実際には存在しない訪問者と何時間も話しこんでいたのだ。
「ヘンリーは声帯模写がうまかった。誰かと話をしているようで、彼のしわがれ声と女の声がかわるがわる聞こえてきたものだ。時々歌っていることもあった」(1)







聖テレジア

T e r e s a d ' A v i l a

神の言葉を聞く

スペイン、アビラ県出身の宗教家（1515-1582）

『イエズスの聖テレジア自叙伝』は、神父に促されて書いた一連の神秘体験の記述である。聖テレジアの神秘体験は、対物対話者の心理状態と部分的に類似する。対無生物コミュニケーションの愛情が、宗教的な対象と結びついた例として興味深い。

参考文献：東京女子カルメル会訳『イエズスの聖テレジア自叙伝』1960，中央出版社

聖テレジアは自身が体験した神秘体験を自叙伝として残している。恍惚体験の描写から対物対話者である可能性が感じられたので、調べてみたが、モノと話す部分はなかった。しかし、神秘体験の叙述に関しては対物対話者の証言と似ている箇所があり、対無生物コミュニケーションの現象を理解する上で役立つと思われるため参照する。

■疑うことができない明瞭さで、直接悟性に刻み込まれる神の声

聖テレジアによれば、彼女は肉体の耳や目でキリストを知覚するのではなく、靈魂の耳や靈魂の目で身、あるいは悟性に直接刻み込まれ、しかもそれは、聴覚を通してよりもずっと明瞭に聞き取れるという。

神の声を聞くということ

これらの言葉はたいへんはっきりしておりますが、肉体の耳に聞こえるものではありません。とはいえ、聴覚を通してよりもっとずっと明瞭に聞きとれます。それらを聞くまいとのあらゆる努力もむなしいのです。もしも私たちが人間の言葉を聞きたくなければ、耳をふさぐこともできますし、あるいはほかのもののほうに注意を向けて、声は聞こえても言われていることがわからぬようにすることもできます。ところがこの神のお言葉となりますと、どうすることもできません。私たちが欲もうと欲むまいと、悟性は神が聞かせたいとおぼしめされることに全注意を向けるようにさせられてしまいます。(292-293)

神を見るということ

目では見なくてもあまりにも明らかな認識が印刻されて、もう疑うことができないように思われます。聖主はご自分のみ姿が悟性のなかに強く刻みつけられていることをお欲みになるので、目で見たのと同様の、否それにもまさる確信を生じるのです。なぜなら、目で見た場合には時としてそれが何かの間違いではなかったかとの疑いが残ります。ここではたとえこういう疑いが急に起こったとしても、靈魂はあまりにも強い確信を持っているので、この疑いは靈魂に対してなんの力もありません。(320)

神が聞いているということ

私たちは念祷をはじめようとするや否や、ただちに話し相手を見いだしたように思われ、その効果と熱烈な愛や、生き生きした信仰や靈的感情や、愛情に満ちた決心などによって、私たちの言うことが聞かれていることがわかります。(319)

神が話すということ

しかし、それがイエズス・キリストだといったいだれが言ったのか？ と聴罪神父様はおたずねになりました。“ご自分でたびたびそうおっしゃいました”と私は答えました。ところで、彼がそうおっしゃる前に、私の悟性のうちにそれが彼であるということが印刻され、さらにその前に彼は私にそれをお知らせになったのでした。(320)

私はこれが比喩だとは申しません、比喩は、いずれも正確ではありませんから。これは真実です。生きているものと、それを表わす画との間にある相違が正しくここにあります。なぜなら、もしも私が見たものが映像なら、それは生きた映像です。私に現れたのは死んだ人ではなく、生きたキリストです。(339)

神の声であれ、モノの声であれ、あるいは妄想であれ、それらの内的体験が疑うことができない強さのあるものだという点で、対物対話者と神秘家の体験は同質である。対物対話者の多くはモノの気持ちを断定で話す、それはこうした内的体験に裏打ちされているからである。自分の体験が強烈過ぎて疑うことができなくなっている人の語り方は独特の雰囲気がある。一方で、彼らは自分の体験が自分のなかでだけ起きているということも自覚している。

■テレジアの神秘体験の外的様相

聖テレジアの説明によると、恍惚体験をしている人物は、無感覚になり、手足が動かず、その場に倒れ、息が絶え絶えになり、多少うめき声を発するという。これは、その場に倒れるという点を除けば、石原や宮沢の叙述した体験にかなり似ている。石原良純はダムの前に立つとしばらく身動きが取れないし声も出なくなり、そこでダムが何を語ってくれるのか、何を考えているのかを見るという。聖テレジアはこの体験を宗教的な対象である「神」で説明したので神秘家になるのであり、石原は、「ダム」で説明したため、ダムファンとなる。

■対話型の思考

自叙伝の中で聖テレジアは神様に、新婦様に、そして読者に交互に呼びかけ、語りかける。そのつど、彼女の目の前に設定している対話の相手が入れ替わっている。どちらにしろ、彼女にとって説明することはだれかに語りかけることと切り離せず、常に対象を必要とするのである。

■対物対話者の体験と異質な点

聖テレジアはキリストの手や顔を見た（333）というが、こうした幻視の叙述は対物対話者の体験談の中には見つからない。（ダーガーが雲の中に描いた顔は現時点では比較できない）また、聖テレジアは悪魔を幻視し、精神的混乱をもたらしたと述べているが、そのようなネガティブな対象を幻視する証言は対物対話者にはない。

聖テレジアの神とのコミュニケーションの抜き出し

TA-1

数々の軽佻なことによって靈魂を墮落させてしまうようになりましたので、神に近づき、念祷の、あのように特別な親密さのうちに神と語ることが恥ずかしくなりました。(65)

TA-2

私は肉眼で見るよりも、いっそうはっきりと、靈魂の目で主を見奉りました。主のみ姿は、私のうちにあまりにも強く印刻され、二十六年以上を過ぎた今でも、それはまるで眼前にあるかのように思われます。(71)

TA-3

私は病気の時がいちばん、神様と仲よしでした。(88)

TA-4

ああわが神の御慈しみよ！ 私は、確かに、このようにあなたを見、また自分を見ているように思えます。おお天使らの楽しみよ！ 私は、こうして、あなたに対する愛にまったく灼きつくされとうございます。(90)

TA-5

ある日、祈禱所にはいりました、修道院で行われるはずの、ある祝典のために持って来られ、その日を待ってそこに置かれていた一つの聖像が目につきました。(中略) 私は、これを見て、魂の奥底からゆり動かされるほどの強い敬虔の情熱を感じました。(97)

TA-6

私がお話ししたような方法で、聖主のおそばにとどまるよう努めておりました間、あるいは時としては読書をしておりました時、突然、神の現存の内的感じが起り、神が私のうちにおいでになる、または、私が神のうちにまったく沈められているということを、少しも疑うことができませんでした。この恩寵は一種の幻視ではありません。それは神秘神学と呼ばれるものだと思います。靈魂は、まったく無我夢中となったかのようにで停止状態となります。意志は愛します。記憶は失われてしまったかのように見え、悟性は私の考えでは働きませんが、失われているわけでもなく、ただ、推理の様式で働きません。それは自分の見ているすべてに驚いているかのようです。なぜならば主は、悟性に、主がお見せになるものが何もわからないことを、お示しになりたいのですから。(105)

TA-6

いま、一つのよいたとえを思いつきました。念祷のこういう喜びは天国の喜びに似ているに違いありません。(106)

T-7

私たちは精神的にキリストの尊前に身をおき、その聖なるご人性に対する最大の愛に少しずつ燃え立ち、常に彼のおそばに侍り、彼に語り、私たちの必要とすることをお願いし、悲しみにあっては彼に向かって嘆き、慰めにあっては彼とともに喜び、幸運にあっては彼を忘れないように警戒し、複雑な祈禱文など求めず、自分の望みや、必要を打ち明ける単純な言葉でお話するようにしましょう。これこそ短時日で進歩させるすぐれた方法です。このように、とうとい伴侶とともに生活することに専心し、(中略) そこからくみだす者こそ、念祷の道に進歩した者であると私は断言します。(130)

T-8

おお、わが神よ、靈魂が、この状態にあります時、どんなことを感じるのでしょうか？ 彼は、主をたたえるために、すっかり舌になってしまいたいと望みます。彼は、無数の聖なる愚かなことを言いますが、これをもって、自分をこのお恵みに高められるおかたをお喜ばせすることに、いつも成功いたします。私の知っているある人は、詩人でもないのに、情緒に満ちた詩を即座につくり、そのなかで自分の悩みを、人の心を感動させるような言葉で言い表していました。そこには彼の理智の働きは少しもありませんでした。しかし、これほどの楽しさに満ちた苦しみのなかに、彼を沈めた光栄をよりよく楽しむために、彼はこのように神に向かって嘆声を発していたのでした。彼は、この苦しみが自分にもたらす内密な喜びを表すために、身も魂も全部粉碎されてしまえばとさえ思うでしょう。(180)

TA-9 《一致》

私が説明したいと思うこと、それは、この神的一致にある時、靈魂が何を感じるかということです。一致ということの意味は、ご承知でしょう、それは、別々な二つのものが、一つとなった状態です。おおわが神よ、あなたはなんとよいおかたなのでしょう！ あなたはとこしえに祝せられ給え！ おおわが神よ、すべての被造物があなたの賛美を歌いますように！ 私たちに対するあなたの愛は、この流涕の地において、もはや、あなたが靈魂たちとともにし給うこの交流について、真実に語ることができるほど、すばらしいものなのです。(196)

TA-10

時として、靈の高揚、または天的愛との一致と呼ばれることが生じます。私の考えでは、一致それ自身において、単なる一致は靈の高揚とは異なります。このあとのものを、経験したことのない人は、相違はないと想像します。けれども私の考えでは、この二つの恩寵は、本質的には同じであっても、聖主はそこで異なった様式でお働きになります。(198)

TA-11

このように靈魂は、自分の神を求めている間に、最も深い、最も快い楽しみの中にはほとんど完全に氣を失ってしまうのを感じます。それは、だんだんに呼吸と肉体のすべての力を奪ってしまう一種の失神です。それで最大の努力をしなければ、ちょっと手を動かすことさえできません。目は別にそうしようと思わなくても自然に閉じてしまいます。あけていてもほとんど何も見えません。ものを読んでも、文字を発音することができず、文字を見分けるとしても、やっとのことです。文字があるということはよくわかりますが、悟性が協力しませんので、いくら読みたいと思っても、読めないのです。聞かなくても聞かえることがわかりません。このように、感覚は靈魂がすっかり喜びにひたり切らぬようにする以外、靈魂にとってなんの役にも立ちません。それでむしろ妨げとなります。いくら話したいと思っても、言葉を形づくることができず、たとえてきたとしてもそれを発音する力さえありません。なぜなら、外的なすべての力は停止しますから。でも内的力は大きくなり、このように、靈魂はおのが“光栄”をよりよく楽しむことができます。外的に感じる楽しみも、きわめて大きく著しいものです。(201-202)

TA-12

私が言えることはただ、靈魂は自分が神に一致しているのを見ると、この恩寵のあまりにも強い確実性が靈魂に残るため、靈魂はそれについて少しの疑いも持つことができないということです。(204)

TA-13

靈魂はこの念縛と、この一致から、神に対する極度の愛情に満たされて出ますので、悩みによってではなく、喜びの涙によっておのが身を消滅したいと思います。涙の流れるのを感じもせず、自分がいつ、どのように流したかも知らないのに、涙にすっかりぬれている自分を見いだします。この水が、自分を焼き尽す火の激しさを静め、しかもまた、それを増大させるのを見る時の彼の喜びはこの上もありません。(206)

TA-14

繰り返して申しますが、信仰については、もっとも小さい疑いさえも私は決まっていたことがありませんでした。そこで、私は、このようにふさわしくない私に賜った悦楽や恩寵を、さきほど申しましたとおり、あなたのきわめて忠実な婢女であるこれらの修道女の大多数に対して、正義によってお拒みになるのはどうしてかと考えておりますと、あなたはこうお答えになりました「おまえは私に仕えるがよい、そんなことを気にしてはならない」と。これは、あなたが私に向かっておおせられるのを、私が聞いた最初のお言葉でした。それで私はすっかり驚いてしまいました。(214)

TA-15

私が恍惚に抵抗しようとした時、何に比べてよいかわからぬほど強大な力が、私を足もとから持ち上げるように思われました。その力は、私がお話した霊のほかの事柄におけるよりも、もっとずっと大きな激烈さで私を捕らえました。それで私はそのためにすっかり疲れ果ててしまいました。なぜなら、それこそ恐ろしい戦闘ですから。(中略) こういう恵みを受ける靈魂のうちに表れる効果は大きなものです。第一のものは神の至高の権能を示すことで、御稜威高き神がそれを欲し給う時、私どもは、靈魂と同様、からだをおさえることもまったくできず、私どもはもはや、この両者の主ではないということを悟られます。欲もうと欲むまいと、私どもは、自分より強いだけかがいて、これらのお恵みはそのみ手のたまものであり、私たち自らは何もできない、絶対に何もできないことがわかり、靈魂に深い謙遜が刻印されます。打ち明けて申しますが、私は、自分のからだがこのように地から上げられるのを見て、たいへん恐ろしく、特に初めのころは、最も激しい恐怖に捕われました。なぜなら抵抗しなければ、靈魂は、肉体を最大の快味のうちに引き上げるとはいえ、人は感覚の働きを失いませんから。少なくとも私は、自分が地から上げられたということがわかる程度にこれを保っていました。こういう現象を生じうる御者の御稜威を見て、髪の毛は頭上に逆立ち、このように偉大な神にそむくことをたいへん恐ろしく思います。しかし、この恐れは、最も熱烈な愛に包まれていて、そしてこの愛は、聖主が、このように腐った虫にすぎない者に、これほど過ぎた愛をお持ちになるのを見て、さらに増大します。(224-225)

TA-16

では、ただいまから、恍惚と、通常そこで起こることにまどろみましょう。たびたび、私のからだはたいへん軽くなって、その重量をすっかり失ったかのように思え、時としては、自分の足が地についていることをもう感じなくなるほどでした。事実、恍惚がある時、肉体は死んだもののようになり、たびたびまったく何もできなくなり、いつも恍惚に捕われた時のままの姿勢でいます。座しているか、手

を開いているか、むすんでいるか、いずれにせよ、恍惚がきた時のままでおります。感覚の働きを失うことはまれであるとはいえ、時として、私は、すっかりそれを奪われたことがあります。しかしこういうことはまれで、ちょっとの間しか続きません。(233)

TA-17

主はご自分を愛する者をお愛しになります。しかもなんとという愛人でしょう！ なんと忠実な友でしょう！ (268)

TA-18

さてある日長い間お祈りをし、万事についてあなたをお喜ばせることができるように私をお助けくださいと主に懇願してから、賛美歌を唱えはじめました。私がこれを唱えている間に急激な恍惚におそわれ、私はいわば自分の外に引きだされてしまいました。この恍惚はあまりにもはっきりしていて私は少しもそれを疑うことができません。これは主が私に恍惚のお恵みをくださった最初でした。私は、次の言葉を聞きました「私はもはや、おまえが人間と語ることが欲まない、ただ天使らとのみ語れ」と。私は非常に恐怖に捕われました。なぜなら、脱魂は急激に感じられ、これらの言葉は霊の最も深いところで言われましたから。そのために私に恐れをいだかせたのでした。とはいえ、いっぽうでは大きな慰めを感じました。そして、このようなお恵みの経験が初めてのことであったために、たぶん、ひき起こされたこの恐怖が去りました時、慰めは残りました。(289-290)

TA-19

さて私は、心を乱すかくも多くの憂慮のたねを胸にいだいて悲しみに沈んでおりますと、聖主はこうおっしゃいました。「何を恐れているのか？ おまえは私が全能であることを知らないのか？ 私はおまえに約束したことを果たすであろう」と。(そして実際、のちにこのお言葉は立派に果たされました)。(中略) また、たびたび主は私をお叱りくださいました。またいまでも私が何か不完全なことをいたしますと、そうなさいます。(311)

TA-20

その時、靈魂の諸能力は、まったく神に専念するということ以外の何ものもなし得ず、そのいずれもあえて動こうといたしません。それらを動かすことは不可能でさえあります。そして気晴らしをしようと、いくらくふうしたところで、その時はそれに完全に成功することはできないように思われます。その時、神を賛美する多くの言葉を発しますが、それらの言葉には秩序がありません。神が秩序づけられるなら別ですが、悟性にとって、そうすることは不可能です。靈魂は神の栄光を、いと高らかに宣言したいのです。靈魂はもう無我夢中で、最も快い熱狂に捕われております。

TA-21

さて、私は金の長い矢を手にした天使を見ました。その矢の先に少し火がついていたように思われます。彼は、時々それを私の心臓に通して臓腑にまで刺しこみました、そして矢をぬく時、いっしょに私の臓腑も持ち去ったかのように、私を神の大いなる愛にすっかり燃え上がらせて行きました。痛みは激しくて、先に申しましたあのうめき声を私に発しさせました。しかし、この苦しみのもたらす快さはあまりにも強度なので、靈魂は、もうこの苦しみが終わることも欲まなければ、神以下のもので満足することも欲しません。これは肉体的な苦しみではありません。霊的のものです。とはいえ、肉体もいくぶん、時には相当多くさえ、これにあずかります。これは神と靈魂との間のきわめて快い愛の交換で、私は、私の言葉に信をおかぬ人々に、このお恵みを味わわせてくださるよう、主の御憐れみに接岸しております。(359-360)

第2章

傾向の分析

表1. 概要

		近藤麻理恵	手塚宗求	立原道造	石原良純	宮沢賢治	岩崎紘昌	西岡常一	三遊亭あほまろ	星野富弘	L. カーン	E. エッフェル	F. シュバル	V. パートン	モンゴメリ	W. カーウアイ	A. フランク	A. ランボー	H. ダーガー
1	出生年	非公開	1931–2012	1914–1939	1962–	1896–1933	1946–	1908–1995	不明	1946–	1901–1974	1972–	1836–1924	1909–1968	1874–1942	1958–	1929–1945	1854–1891	1892–1973
2	性別 (M: male, F: female)	F	M	M	M	M	M	M	M	M	M	F	M	F	F	M	F	M	M
3	職業	片付けコンサルタント	山に住んでいる人)	詩人、建築家	俳優、テレビタレント、天気予報士	小説家、教師	アンティークショップ経営、鑑定家	宮大工	庶民文化研究家、カメラマン	元教師	建築家	アーチェリー選手、格闘家	郵便配達員	絵本作家	教師、小説家	映画監督	なし	詩人	教会の清掃員
4	成年するまでに過ごした場所	非公開	長野県	東京日本橋区	逗子	岩手県稗貫郡里川口村	札幌	奈良県斑鳩町法隆寺西里	不明	群馬県勢多郡東村	ロシア帝国(当時)のエストニア地方サーレマール島、フィラデルフィア	アメリカ	ドローム県の小村	マサチューセッツ州ニュートンセンター	プリンス・エドワード島	上海、香港	ドイツ フランクフルト市	アルデンヌ県シャルルヴィル	イリノイ州リノカーン

表2. 関心対象

		近藤麻理恵	手塚宗求	立原道造	石原良純	宮沢賢治	岩崎紘昌	西岡常一	三遊亭あほまろ	星野富弘	L. カーン	E. エッフェル	F. シュバル	V. パートン	モンゴメリ	W. カーウアイ	A. フランク	A. ランボー	H. ダーガー
5	空	－	◎	◎	◎	◎	－	－	◎	－	－	－	－	－	－	○	◎	△(太陽)	◎
6	夜	－	○	◎	－	◎	－	－	－	－	－	－	－	－	○	－	◎	－	－
7	植物	－	◎	－	－	◎	－	－	◎	◎	－	－	－	◎	◎	－	○	－	－
8	自然	－	◎	○	○	◎	－	－	○	○	－	－	○	○	◎	－	◎	○	－
9	風や嵐	－	○	－	◎	◎	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	◎	○	◎
10	巨大構造物	－	－	－	◎	－	－	－	◎	－	－	◎	－	－	－	－	－	－	－
11	機械・乗り物	－	－	－	◎	○	－	－	－	－	－	－	－	◎	－	－	－	－	－
12	動物	－	◎	－	－	◎	－	－	◎	－	－	－	－	－	－	－	◎	－	－
13	語呂、名前、文字	－	◎	－	－	－	－	－	○	○	－	－	－	－	◎	－	－	○	－

【対物対話者の人物像】

【対物対話者の人物像】

＜職業＞

この研究では18人の対物対話者を発見したが、彼らのうちの8人は文章や絵、映像など、表現を仕事にしている人々である。その他は、片付けコンサルタント、建築家、宮大工、スポーツ選手、俳優など、職人として1人でできる仕事をしている。これらの人々だけを見ると、対物対話者はものすごいクリエイティビティを発揮するというふうに見える。しかし、彼らよりも興味深いのは、山で暮らす手塚宗求、病院の清掃員をしていたダーガー、郵便配達員をしていたシュバルである。彼らの仕事は単純作業である。とくに、ダーガーやシュバルはたまたま奇妙な作品を残していて、それが世の中に面白がられているから私が発見することができたが、発見されず、そのきっかけも残らなかったような人が潜在しているはずだ。

＜空への執着＞

対物対話者は空に関心をもつ者が多い。また、風や夜、嵐や空気そのものに興味を示す者も多い。空は彼らにとって幸福感と高揚感の尽きせぬ源泉である。対物対話者らにとっては空気というのが無の空間でなく、容積を持った実体であり、あるいは何かが満ちあふれている存在である。

そして、この空気自体を擬人化したものがランボーの「夜明け」に描かれた女神であるのではないと思われる。もしかすると、空気が善意や悪意を持っていると知覚され、そのときにたまたま視界に入ったものが彼らにとってしゃべっているとか意志を持っているとか知覚される可能性がある。

- 宮沢賢治 → 空が鳴るなど不思議な表現を多用
- 立原道造 → 手記や詩集を通して空の描写がとても多い
- ダーガー → 11年間のウェザーレポート、繰り返し描かれる雲の絵（擬人化）
- 手塚吉求 → 日常的なウェザーレポート、空を見ることの重要性を訴える
- 石原良純 → 「風が見えるようになりたい」と、とつぜん天気予報士になる
- A. フランク → 外へ出て空を見ることで多幸福感を得る
- 三遊亭あほまろ → 空の写真と擬人法による表現

また、「自然」という単語を、18人のうち11人が重要な文脈で用いる。奇妙な共通点としては、モノの名前や語呂、文字自体に執着するということがある。手塚、三遊亭、星野、モンゴメリ、ランボーの5人である。（ランボーは「母音」の詩があるので数に含めた）宮

沢や立原、パートン、カーウアイは作家であるからもちろん文章に興味があるだろうが、モノの名前自体へのはっきりした関心は証明できないので一応除いたが、それにしても18人中5人というのは無視できない数だ。また、対物対話者の命名センスにはなにかの共通点があるように思う。手塚は山に「北の耳」「南の耳」と命名した。三遊亭あほまろは、スカイツリーと雲を被写体とした写真のタイトルに、「空のデブ」という名前をつけていた。「空のデブ」は近所のカフェの壁にかけてあったものだが、パネルに書かれたそのタイトルの不思議さが、三遊亭を調べるきっかけとなった。擬人化されているかどうかよりも、いつもその愛称を自分のなかでくり返し使っているという感じがある。事例をもっと集めれば、何らかの傾向が見えてくるかもしれない。

近藤、カーン、岩崎、西岡、エッフェル、シュバル、カーウアイは、対物対話者が関心を持ちやすい対象への関心が現れている箇所が見られなかった。カーウアイを除けばこれらの人物は心象表現を生業としていないので、見つからなかったのかもしれない。しかし、これ以上の調査は本人に聞か秘密の日記でも手に入れないかぎり不可能である。

表3. 行動の特徴

		近藤麻理恵	手塚宗求	立原道造	石原良純	宮沢賢治	岩崎紘昌	西岡常一	三遊亭あほまろ	星野富弘	L. カーン	E. エッフェル	F. シュバル	V. パートン	モンゴメリ	W. カーウアイ	A. フランク	A. ランボー	H. ダーガー
14	収集癖	-	-	-	-	石、植物、昆虫	アンティーク	-	写真、看板、殺虫剤、面子、薬の箱	-	-	-	石	-	-	-	映画スターのポスター、家族の写真	-	雑誌の切れ端
15	毎日繰り返す習慣がある	◎	-	-	○	-	-	-	◎	◎	-	-	◎	-	-	-	◎	-	◎
16	習慣の内容	片づけ	-	-	マラソン	-	-	-	写真撮影、犬の散歩	病室で過ごす、絵を描く	-	-	理想宮建設	-	-	-	日記	-	ウェザーレポート、絵と執筆
17	エクスタシー、瞑想、神秘体験の記述の有無	○	○	△	○	○	-	-	-	○	-	○	-	-	○	-	○	-	-
18	博物学的関心	-	○	-	○	○	○	-	○	-	-	○	-	-	-	-	-	-	○

表4. 空想や妄想

※ランボー、パートン、カーウアイに関しては、文学・芸術作品なので評価しない。宮沢に関しては、詩を「心象スケッチ」としているので評価の対象とする。モンゴメリも、自己の少女時代が投影されているとして評価する。

		近藤麻理恵	手塚宗求	立原道造	石原良純	宮沢賢治	岩崎紘昌	西岡常一	三遊亭あほまろ	星野富弘	L. カーン	E. エッフェル	F. シュバル	V. パートン	モンゴメリ	W. カーウアイ	A. フランク	A. ランボー	H. ダーガー
19	具体性のある空想をする	-	◎	-	◎	○	-	-	-	-	-	-	○	-	○	-	◎	-	△
20	夢にこだわる	-	-	○	-	-	○(162)	-	-	-	-	-	○	^	-	-	◎	-	-
21	妄想的な記述	-	◎	◎(恋愛妄想)	-	◎(幻視)	-	-	◎	-	-	○(恋愛妄想)	◎(誇大妄想)	-	◎	-	◎	-	◎
22	死んだ人、昔の知人、よく知らない人への執着	-	○	◎	-	◎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-
23	人あるいはモノに対するはげしい愛情、賛美	◎	◎	◎	-	○	-	-	-	○	○	○	◎	-	◎	-	◎	-	-
24	対象の自己同一化、身体拡張	○	-	○	◎	-	-	○	-	-	-	○	-	-	○	-	◎	-	-

【対物対話者の行動の特徴】

＜収集癖と毎日繰り返す習慣＞

全体の3分の1にあたる6人がなにかしらの収集家であった。これは文献資料から見つかっただけで、実際はこれ以上の値になる。また、7人は仕事以外でほぼ毎日繰り返す習慣がある。それも、情性で行っているのではなく、熱心に取り組むべき習慣である。

＜他者への「なりかわり」＞

手塚、立原、宮沢、シュバル、フランク、ダーガーの他者への「なりかわり」は著しい。「なりかわり」とは、他人の台詞を自分が話すのであるが、その特徴は、対象の人物の台詞をかなり細かく言うということだ。そして、しばしば自分が他人になりかわって言ったことにたいして、自分が答える。1人で他人と会話をすると言うものである。こうした脳内の対話は、彼らの中では現実を増して強い印象を残す。手塚の「なりかわり」を伴う脳内の対話は熱烈で、しかも感動的なエピソードであることが多い。それは現実起こったこととは違うけれども、手塚やフランクは現実にいるよりも気高く思慮深い人物や優しい心を持つ人物をつくり出し、それから影響を受けているようであるから、より高いものを目指すことに役立つと言う点で、「なりかわり」や他人の極端な理想化は役に立っているとも言える。対物対話者が一般的に持っている熱烈な雰囲気は、そうした脳内の人物に励まされているためかもしれない。

＜恍惚体験に関する記述＞

事例のうち9人は恍惚体験にまつわる記述をしている。「うっとりする」林の中を歩いていて「酔っぱらったようになる」という軽めの表現から、瞑想しているような状態になる、口も聞けなくなる、といったものまで、その強さは1人の人物の中でもまちまちだ。恍惚体験の記述は9人だったが、シュバル、ランボー、ダーガーは、「自分はうっとりした」などの客観的な表現はないが、その作品には酩酊の余韻がある。

＜夢で体験したものに執着する＞

立原、岩崎、シュバル、フランクは、夢で見たことに対して熱烈な執着を見せる。シュバルの理想宮は夢に着想を得ており、フランクも夢で久しぶりに思いだした友人に、泣き出さんばかりの同情を綴っている。

＜他人の極端な理想化と激しい愛情、妄想＞

手塚と立原の2人は、ただ見かけただけの通りすがりの人や、二言、三言話しただけの他人に対して、激しい愛情や尊敬や共感を抱くという叙述があった。フランクも、亡くなった祖母や初恋の人など、もう会う可能性がない人に対して、激しく愛を燃え立たせている。しかしフランクに関しては父親を完璧な理解者と考えたり、隠れ家で一緒に住んでいた青年を激しく愛したりするので、激しい愛情の発作は身近な存在にも注がれる。

対物性愛者は、人間との関係がうまく結べないために、自分が一方的に限りなく愛することができ、裏切ることのないモノと関係を結ぶのだというふうに解釈されることがあるが、それは半分正しく半分間違っている。対物性愛者がモノを愛することの始まりには、熱烈な内的体験があり、人間の代替物として扱っているわけではない。熱烈な愛の発作は、人間に対しても同様に起こる。ただし、人間は変化のスピードが速く、状況によっていつも違う行動をとる、つまり理想を裏切るのに対し、モノは一貫した存在であるので理想が長続きするのである。全体として、対物対話者は愛にかられやすい。

＜妖精や女神はいるが幽霊はいない＞

手塚とモンゴメリの記述の中には、妖精のようなものや、獣とも人物ともはっきりわからないものへの言及が少しあった。幽霊に関する記述は、『赤毛のアン』の中で幽霊の森のエピソードがあったが、それは想像の遊びとしてとらえられていた。フランクとシュバルは神への言及があった。対物対話者の宗教観や世界観は、この研究でわかった範囲では、まちまちであった。

【モノの性質】

表5. モノの性質

		近藤麻理恵	手塚宗求	立原道造	石原良純	宮沢賢治	岩崎紘昌	西岡常一	三遊亭あほう三	星野富弘	L. カーン	E. エッフェル	F. シュバル	V. パートン	モンゴメリ	W. カーウアイ	A. フランク	A. ランボー	H. ダーガー
24	モノの種類	服、雑貨、家	ストーブ、山、木、薬缶	本、風、集落	地図、ダム、新幹線	森、山、芒、草、風、野ばら	アンティーク、仏画	のこぎり、木	空	花、川	レンガ、壁	エッフェル塔、鉄橋	手押し車	家、乗り物	花、木、部屋の壁、教科書	瓶、タオル、石鹼、ぬいぐるみ、シャツ	日記、万年筆	自然、森、食器戸棚、家具、星	空
25	モノとの距離	至近距離	至近距離・遠距離	至近距離・遠距離	至近距離・遠距離	至近距離・遠距離	至近距離	至近距離	至近距離・遠距離	至近距離・遠距離	至近距離	至近距離・遠距離	至近距離	至近距離	至近距離・遠距離	至近距離	至近距離	至近距離・遠距離	遠距離
26	日常的に手に触れるもの、日用品	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×
27	日常的に手に触れるものでないもの	×	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	○	×	×	×	×	○
28	モノの大きさ（小▲ portable, 中■ not portable, 大●view）	▲■	▲■●	▲●	▲■	▲●	▲	▲■	●	▲●	■	▲●	▲	■	▲■●	▲	▲	■●	●
29	モノの可動性 (M: movable, S: still)	S	M, S	M, S	S	M, S	S	S	S	M	S	S	S	S	M	M	M	S	S
30	自然物か人工物か (N: Natural, A: Artificial)	A	A・N	A・N	A	A・N	A	A・N	N	N	A	A	A	A	A・N	A	A	A・N	N

【対無生物コミュニケーションが起こる状況】

＜田舎か都会か＞

今回の研究では、育った場所と対無生物コミュニケーションの起こりやすさの関係はわからなかった。当初は、田舎育ちか都会育ちかでそうした感性の育まれやすさがわかるかと予想していたのだが、対象の半分以上が近代の人であり、つまり、20 世紀においては現代と比べれば、どこも田舎だったはずだから、比べられなかった。また、都会育ちといっても、個人が見てきた具体的な風景は不明である。これを調べるためには個々の人物をより深く調べなければならない。文献調査でなく実際の人物を調査する必要がある。

＜屋外と屋内＞

対無生物コミュニケーションは屋内でも屋外でも発生する。

近藤、手塚、立原、石原、岩崎、星野、カーウアイ、ランボーは屋内でのコミュニケーションが見られる。対象は家の中のモノや壁である。

屋外のコミュニケーションは、手塚、立原、石原、宮沢、三遊亭、エッフェル、パートン、ランボー、ダーガーにその描写が見られた。対象は、空、風、木、鉄橋、家、花、ダム、と人工物と自然物を分けない。対象の大きさも花からダム、空までまちまちである。

屋内外両方でコミュニケーションをとっていたのは、手塚、立原、石原、モンゴメリ、ランボーであった。その中でも、手塚、立原、モンゴメリ、ランボーの4 人は、文章表現がとくに詩的な人物である。ただし、屋内か屋外どちらかしかコミュニケーションの描写が見られなくても、報告されていないだけで、実際はどこでも対話を行っている可能性もある。

＜対象の大きさ＞

対象のモノの大きさに関して、人物によってそれぞれ関心の対象が違うのか比較してみたが、いまひとつ一貫性が見当たらなかった。

＜対象の数＞

対物対話者は通常複数の対象と対話するが、すべてのモノと対話しているわけではなく、特に愛着のあるいくつかのモノと対話する。

＜モノとの距離＞

コミュニケーションの対象との距離は、身近な触れられるモノとの至近距離のタイプと、山や空など直接触れることができないものとの遠距離のタイプがある。要約すると、対物対話者はほぼ全員、至近距離でコミュニケーションをとることができ、そのうち半分は遠距離でもコミュニケーションをとる。至近距離でコミュニケーションをとる 17/18 人ということで、ほぼ全員。遠距離でコミュニケーションをとるのは 10/18 人で、ほぼ半分であった。至近距離から遠距離まで、どの距離でもコミュニケーションをとるタイプ 9/18 人。次に多いのが至近距離のみでコミュニケーションをとるタイプは 8/18 人。遠距離のみでコミュニケーションをとるタイプは 1/18 （ダーガー）だった。

【対無生物コミュニケーションの対象】

＜自然物か人工物か＞

人工物と話すケースがもっともよく見られた。

18 人中 15 人が人工物とのみ話す。

18 人中 9 人が自然物と話す。

18 人中 6 人が人工物・自然物の両方と話す。

人工物の中でも、とくに日用品や道具が対象となっている。家や窓や壁も感情を持ちうる。また、これらのほとんどは静物である。

＜モノの古さとの関連＞

モノに歴史が記録されるという感覚を持つ傾向がある。カーンは以下のようにのべる。

岩の中には岩の記録があります。

人の中には、その人がいかにつくられたかの記録があります。(K-3)

岩崎はモノの過去の扱われ方を「生き方」と表現する。

どっちが良い悪いではなく、古い物の宿命のようなものである。古い物の過去の生き方で骨董と生活骨董は分かれる。(I-1)

手塚、宮沢、モンゴメリ、ランボーは、モノが物語を語りかけてくる、などという表現をし、エッフェルは、ベルリンの壁がたどってきた苦難の歴史と自分の過去を重ねあわせる。新品のモノとコミュニケーションをとったのは、フランクが誕生日にもらった日記に対してのケースだけだった。カーウアイは、『恋する惑星』の中でボロボロだったタオルが知らないうちに新品になっていたことに対して、以下のような台詞で表現した。

「お前もずいぶん変わったもんだ 個性がなくなった 彼女がいらないからって変わることはない 反省しろ」(W-8)

近藤はお店に売られているモノと家にあるものは出している空気が違うと感じている。

商品としてお店にかけられているモノは、家のクロゼットのポールにかけられているモノに比べて明らかに「ツン」としているのです。商品としてのモノと、家で個人のモノとして働いているモノとでは、出している空気が違います。 値札がついたままの服は、その「ツン」とした感じが残っているように見えます。(KM-32)

表6. コミュニケーションの現れ方

		近藤麻理恵	手塚宗求	立原道造	石原良純	宮沢賢治	岩崎紘昌	西岡常一	星野富弘	三遊亭あほま	L. カーン	E. エッフェル	F. シュバル	V. バートン	L. モンゴメリ	W. カーウアイ	A. フランク	A. ランボー	H. ダーガー
31	物の性別	なし	なし	なし	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	あり	なし	あり	あり	なし
32	物との関係	家来、こども、協力者	連れ、恋人	親しい関係	友達	対象そのもの	対象そのもの	対象そのもの	対象そのもの	不明	建築家と材料	伴侶	忠実な連れ	対象そのもの	友達、知り合い	対象そのもの	親友	老人、女神	不明
33	モノの呼び方	固有名詞	固有名詞	固有名詞	固有名詞	固有名詞、おまえ	固有名詞	固有名詞	固有名詞	固有名詞	You, 固有名詞	固有名詞	忠実な連れ	固有名詞	固有名詞、愛称	固有名詞、なし	愛称	固有名詞	不明
34	自分からモノに話しかける (S→O)	○	○	-	-	○	○	-	○	-	○	○	-	-	○	○	○	○	-
35	モノから自分に話しかける (O→S)	○	○	△	○	○	-	○	△	△	○	○	○	-	○	○	○	○	△
36	モノが第三者に話しかける (S→T)	○	-	-	-	○	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
37	モノが誰にともなくひとりで話す、感情表現をする	-	○	○	-	○	-	○	○	○	-	-	○	○	○	-	-	-	○
38	モノが自分の物語を聞かせてくる	-	○	-	-	○	-	-	△	△	△	△	-	△	-	-	-	○	-
39	モノのようすを顔の表情で表現(ほほえむ、泣くなど)	○	○	○	-	○	-	○	○	○	-	-	-	-	○	○	-	-	○
40	モノのようすを身体で表現(手を振る、伏せる、休む、死ぬなど)	○	○	-	○	○	-	-	-	○	-	-	○	-	○	-	-	○	○
41	モノを人物や職業にたとえ、擬人化	○	○	-	-	○	-	○	○	-	○	-	-	-	○	-	-	○	○
42	恋愛感情とセクシュアルな表現	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
43	身体でコミュニケーション(手で触れる、キス、抱擁)	○	-	-	○	○	-	-	-	-	-	○	-	-	○	○	-	○	-
44	脳内の身体でモノと触れ合う	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-	○	○
45	の歴史を思い浮かべることができる	-	○	-	-	-	○	-	○	-	-	○	-	-	-	-	-	○	-

【対無生物コミュニケーションの様相】

＜コミュニケーションの3つのやり方＞

対物対話者たちが実際にどのようなやり方でモノとコミュニケーションをとっているかという
と、以下の3つの形がある。

1. 言語による交流
2. 身体による交流
3. 脳内の身体による交流

言語による交流は、多くの場合頭の中で行われる。身体による交流は、手で触ったり、キスしたり、
片づけや家事をするという形で行われ、言語のコミュニケーションも伴う。3つめの脳内の身体
による交流は、立原は「本の群れと手を取りあう」と、実際には手のない本との交流を表現している。
エッフェルをはじめとする対物性愛者は、実際に性欲を満たす方法でなく、かつセクシュアルで
官能的な交流を結んでいるという。

＜一方的か、相互か＞

ほぼ全員がモノから自分への働きかけを描写しており、その数は16/18人。自分からモノへの
働きかけを描写したのは11人であった。

自分が話しかけ、向うも話しかけてくる、あるいは感情を表してくる、という相互のコミュニケー
ションが見られたのは11人で、およそ半数であった。

モノの感情を人間が感じ、それを創作や生活の方法にするのは近藤、手塚、カーン。
人間の感情をモノが感じ取る描写をしているのは、モンゴメリとカーウアイの2人で、具体的
には、人間の悲しみに自分の部屋の壁やモノが共鳴するという形であった。

人間のポジティブな感情にモノが共鳴するということの描写は、シュバルの手押し車が自分の
仕事を誇らしく思っていることは、シュバルの気持ちに共鳴していると読める。

また、対物対話者は一般的に、モノには人生がありそれが記録されるという感覚を持っている
ことである。つまり、モノに記録されている持ち主の悲しい記憶を、対物対話者が読みとってい
るというようでもあるということである。たとえば、エッフェルはベルリンの壁の苦難の歴史を
感じとり、そこに共感する。また近藤は、「扉を開けると焼きそばのように服がこんもり積もって
いる様子は、もはやゴミ捨て場のようで、服たちがせつなそうなことこのうえない。(KM-30)」と

述べているが、持ち主がモノに対して無感動で、あるいはモノに気が行かないほど忙しく荒んだ
生活をしている様子に対してせつないと言っている可能性もある。モノの感情は対象のモノを見
続けた人にだけわかる細かな観察眼によってのみ読まれることができるのかもしれない。

＜モノとの関係性は「友人」、「恋人」、「協力者」＞

対物対話者にとってモノは友達、連れ、協力者といった関係であることが多い。おおむねの関係
は気さくで平等だ。近藤とシュバルは自分の活動を助けてくれる忠実な連れ、協力者というよう
な捉え方をしている。手塚にとっての山と、立原にとっての本、エッフェルにとってのエッフェ
ル塔は、単なる友情を越えたロマンティックな関係であった。

表7. モノの感性と知覚

		近藤麻理恵	手塚宗求	立原道造	石原良純	宮沢賢治	岩崎紘昌	西岡常一	星野富弘	三遊亭あほまろ	L. カーン	E. エッフェル	F. シュバル	V. パートン	L. モンゴメリ	W. カーウアイ	A. フランク	A. ランボー	H. ダーガー
46	モノに心地よさや幸福を感じる能力がある	○	-	○	-	-	-	-	-	-	○	-	○	○	○	-	-	-	-
47	モノは悲しみを感じる	○	○	○	-	-	-	○	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-
48	モノに繊細な感性がある	○	○	○	-	○	○	○	○	○	○	-	○	-	○	○	○	-	○
49	モノの部位は人体の部位に対応する	○	○	○	○	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○

＜対物対話者が注目する３つの点＞

対無生物コミュニケーションで、人間がモノの何に注目しているかという点をまとめると、以下のようになる。

- 1位　モノが楽しい気分かどうか（・・・モノの状態が正しいかどうか）
- 2位　モノの人生や歴史（・・・モノがそれまでどのように扱われてきたか）
- 3位　モノとの相互の愛情、関係性　（・・・モノへの愛着と親しみ）

モノが楽しい気分かどうかは、モノが「安心している」「笑っている」「ごきげん」などという言葉で表現される。これらの表現は、モノが正しく扱われているかどうかを表す文脈や、木や水面の美しさを表す文脈で現れる。モノの悲しみは、「泣く」「せつなそう」などの言葉で表され、主にモノが粗末に扱われている様子の描写に使われる表現である。近藤などはこうしたネガティブな感情を抱いているモノを救出しなければならないという正義漢にかられている。モノに人間の気持ちが投影される場面でもネガティブな感情の表現が使われることがある。

モノの人生や歴史はについてはしばしば、「モノが自分の歴史を語りかけてくる」と表現される。これは、人間が対象を観察し、モノが過去にどのように扱われてきたか、どのような環境にあったのか、その周辺の背景を予想するときの表現である。

モノとの相互の愛情は、対象のモノの描写の細やかさや執拗さに現れている。

対物対話者にとってモノは単に「楽しい」「悲しい」という漠然とした感情だけでなく、「恥ずかしい」とか「めんぼく丸つぶれ」「うんざりする」「ヤケになる」など繊細で豊かな感情表現で表される（表8）

＜１人で何かを見ているときにモノとの対話が起こる＞

対無生物コミュニケーションが起こる場面の描写を見ると、近藤は片づけをしているときで、手塚はストーブの火を見ているとき、石原は地図を見ているとき、エッフェルは夕陽の中の鉄橋を見ているとき、カーウアイは部屋のモノを見ているとき、など、１人で何かを見ていることが必要な条件であるようだ。

とくに多いのが、

- ・散歩をしているとき
- ・部屋でぼんやりしているか、なにかの作業をしているとき

であった。ただし、手塚が恋しい山のことを思って切ない気持ちになるように、対象のモノが目の前にないときに、寂しさや恋しさを覚えるということはある。

また、対象との交流は、「全く不意に」訪れる場合と、対象の知識を得る中で徐々に開花しているらしき場合があった。

＜「うつむき型」と「のけぞり型」＞

対無生物コミュニケーションは大きく分けると「うつむき型」と「のけぞり型」がある。

＜うつむき型（屋内型）＞

うつむき型は、主に仕事道具や身の回りの生活用品に関心を示し、それらが手に持てるサイズであることが多く、対話のときに首を前かうつむきの状態にする。今回調べた中で代表的なのは、近藤とカーンである。うつむき型コミュニケーションの特徴は、モノの意志を細かく感じ取り、セリフを代弁すること。また、モノと親しい日常的な会話を交わすことである。（うつむき型のコミュニケーションが見られたほかの人物：手塚、石原、立原、シュバル、ランボー、フランク、西岡、カーウアイ、岩崎、モンゴメリ）

＜のけぞり型（屋外型）＞

のけぞり型は、壮大な景観や天気に関心を示し、対話のとき首をのけぞらせる状態である。対象はより漠然としており、モノの持つ意志もより抽象的である。具体的にどうしてほしい、というようなことを言わない。それは、一つの対象を見るのではなく、目に風景全体の情報が入っているからだ。

今回調べた中で一貫してのけぞり型の表現をしていたのは、手塚、石原、宮沢、エッフェル、モンゴメリである。

彼らにとって、モノとの対話はしばしば衝撃的な体験となる。そのため表現も大げさになり、モノに対してドラマチックな愛情を抱く。のけぞり型は多くの場合、モノは不平不満などの感情を持っていない。また、のけぞり型の比重が高い人物は「なりかわり」などより妄想的な傾向がある。

（のけぞり型のコミュニケーションが見られたほかの人物：石原、手塚、ダーガー、宮沢、エッフェル、ランボー、モンゴメリ、三遊亭）

ただし、実際は２つのタイプ両方の形態でコミュニケーションをとる対物対話者が多く、かつどちらとも判断できないタイプの表現もある。

＜対無生物コミュニケーションの根本は、対象を知ること＞

対物性愛者らによると、モノを愛するということは、対象のモノの知識を集め、それを自己の中に内在化させるということである。性愛の関係を持たないまでも、これは対物対話者一般に当てはまることである。手塚が一つの薬缶の形状を隅々まで観察して記述したように、あるいは、フランクが万年筆がどのような過去をたどってきたか、手に入れた時から誤って暖炉で焼いてしまうまで１年単位で記述したように。その対象のすべてを知りたいという情熱と、知識を獲得する試みの経過こそが対無生物コミュニケーションの根幹を為しているのである。

【コミュニケーションの表現方法】

表8. モノの感情の表現

状態描写	近藤麻理恵	手塚宗求	立原道造	石原良純	宮沢賢治	西岡常一	星野富弘	三遊亭あほまろ	L. カーン	F. シュバル	V. パートン	L. モンゴメリ	W. カーウエイ	A. フランク	A. ランボー	H. ダーガー	聖テレジア
	寝ている	休む	滯しさまよう	頑張る	身体を横たえる	知っている	ささやく	ご臨終		忠実な	夢に見る	夢を見る	やせる	辛抱強い	善良		よいおかた
	知っている	病気になる	どうする意志もない	思っている	手を伸ばす・振る		知っている			つましい	なれる	孤児みたい	ふとる	知らない	お年寄りに似て		愛人
	働き者	痛々しい若死	ひとりぼっち	休む	伏せる		きまま			席を占める		痛みを感じる	泣き虫	茶里に付される	知っている		友人
	休む	表の顔、裏の顔がある	夢みる		つぶやく		ひっそりと生きる					知っている	多感	秘密を護る			いる
	息を吹き返す	表情を見せる	さまよう		寝ている		待つ					社交的	眠る	悲鳴を上げる			
	弱る	骨格たくましい雄姿	信じあう		だまっている		精一杯							我慢する			
住所不定である	明朗な風貌	身悶えする		思う		一生懸命											
感情表現	つらい	優しい顔をする	切なげに		笑う	泣く	寂しい	恥じらい	悲しむ		しょんぼりする	笑う	悲しむ	うんざりする		威嚇的な	
	うれしい	微笑をたたえる	殆ど切ない情欲によって		面白そう		楽しい	遠慮気味	納得する		怖がる	気を悪くする	泣く	飽き飽きする		不安定な	
	せつない	魔性の形相	笑う		悪く思わない		笑う				面白いと思う	よろこぶ	ヤケになる	うれしくない			
	ごきげん	胸に一物を持った陰険な	おそれる		かなしむ		ソッポを向く				うれしい	惜しむ	寂しい	驚く			
	よろこぶ		笑おうにも笑えない		威張る		申し訳けなさそう				にっこりする	うれしい		牛みたいな気分になる			
	安心する				受け取らない									笑う			
	ツンとする																
不安																	
目覚める																	
泣く																	
動的表現	(持ち主を)大切に思う	仕返しをする	よろこびたいとうたう	語る	息をする	話す	話す		言う	目撃する	眺める	笑いかける	隠れる	わかる	話したいと思う		言う
	役に立ちたいと思う	息づかい	かなしいという	答える	悪口を返す				尽くす	呼びかける	見ている	話す		理解しようと努める	名前を告げる		叱る
		話しかけてくる	見つめあう		自分ら同志で相談する				守る	分け前を探す	驚く	呼ぶ		話を聞く	倒れ伏す		知らせる
		私を呼ぶ	言葉を語る		答える				安心させる		踊る	ささやく		言う	髪を振り乱す		働く
		物語る	ながめる		どなる				望む			ささやきあう		見る			
		招く	ささやきかわす						意志がある			話を聞かせる		想像する			
		語りかけてくる	旅立つ									なでさする		即答する			
			息をひそめる									手を振る					
			奪う														
			ほほえみあう														
			対話する														
			迎える														
	休む	快感	不快感	快感	話す	聞く	見る										

【対象の描写に用いられる言葉】

【対象の描写に用いられる言葉】

表8には、対無生物コミュニケーションに関わる表現の語尾をすべて抜き出し、分類した。上段の「状態描写」はモノの状態の擬人化した表現であり、中断の「感情表現」はそのなかでも顔の表情で表現したもの。これらは人間の方が読みとり判断するものであるが、下段の「動的表現」はモノが能動的に「語りかけてくる」「話す」「見る」などの行為をしている表現である。対物対話の対象のほとんどは静物であるにもかかわらず、こうした能動的な表現を使っている点が興味深い。「動的表現」は発語にまつわる行動が最も多く、続いて視覚を使った行動が多い。フランクは「わかる」「話を聞く」といった聴覚にまつわる表現をする。

＜共通の表現＞

「笑う」「うれしい」「泣く」「悲しい」「眠っている」「休む」といった表現が複数の事例で見られた。手塚とモンゴメリは、対象のモノを初めて見ることを「初対面」と表す。それは、初めて見るということを表し、「知り合いになる」と表現するのは、たいへん気に入ったという意味である。「病気になる」「つらい」という身体感覚てき表現は、モノが通常の状態、あるいは適切な状態にないことを意味する。

表9. 語尾表現

※フランクの資料は対象との対話そのものなので、比喩がなく評価できない。ダーガーは資料がなく評価できない

近藤麻理恵	手塚宗求	立原道造	石原良純	宮沢賢治	岩崎紘昌	西岡常一	三遊亭あほまろ	星野富弘	L. カーン	E. エッフェル	F. シュバル	V. パートン	モンゴメリ	W. カーウエイ	A. ランボー
いろんな語尾表現を用いる	断言がほとんど	断言のみ	断言のみ	断言がほとんど	間接表現	断言のみ	断言のみ	断言のみ	断言のみ	断言のみ	断言のみ	断言のみ	いろいろな語尾表現	断言のみ	断言のみ
断言 な様子 ・・・そう なはず(がない) な気がする 明らかに・・・している のように見える かのように感じる だと思う ているのがわかる 伝わってくる	断言 を見る思いだ と思う と思えてならない ようだ。 な感じだ			・・・そう ように見える	と、思っている という感触である								断言 みたい らしい ようだ に違いないと思う ように思われる		

【語尾の表現と自己理解】

表9には語尾表現をすべて抜き出した。

近藤、岩崎、モンゴメリは「思う」「感じる」という語尾表現を使う割合が高い。しかし、ほかの対物対話者の多くは、モノが「・・・した」、「・・・と言った」と、なんの歪曲も説明もせず断定する。断定で表現する人物の割合は最初に予想していたよりはるかに高かった。これは内的体験の疑いようななさを表しているのかもしれないが、逆に比喩だと割り切っており、主観であることは説明するまでもないという態度と言うこともできる。あるいは、自分の心象を描くことだけに興味があり、他人に伝わるかどうかはどうでもいいという投げやりな態度なのかもしれない。

私が調べた対物対話者は自分がモノと話したりコミュニケーションをとったりしているのは自分のなかでだけ起こっていることを完全に理解している。また、自分がモノの声を聞いている、モノが笑っているように見えると感じているのは、肉眼や実際耳で聞いているのではないということも自覚している。彼らの擬人化を用いた表現には切実な様子があるのは、自分の中の感覚を他者に伝えるのは難しいと自覚しており、それでもなお、それ表現以外で伝えられないからだ。

第3章

解釈と考察

なぜ対無生物コミュニケーションが起きるか
周辺環境と癒着した人体イメージ

まとめ

対無生物コミュニケーションとは何か

＜対物対話者の特徴と知覚体系＞

対物対話者は特定の対象やイメージに固執する傾向がある。ひとつの事物に集中して細部まで観察し、観察に没頭しながら様々な思いを巡らせる。宮沢、立原、モンゴメリ、カーウエイの作風は、特定のイメージやモチーフ、場面を繰り返し作品の中で登場させ、場面の展開が希薄であり、1つのエピソードは1つか2つのイメージから構成される。ものとの関係性を時系列に、あるいは俯瞰的に見て組み立てることをしないようである。ダーガーは大長編の物語を書いたが、それはいつも何かから逃げる少女たちと、嵐や雲のある奥行き深い風景から構成されている。少女たちが逃げるということだけを描くためだけに背景を替えているようでもある。

また、ものごとの説明はいつもイメージと会話調の言葉で話される。対物対話者らは概念で論理を組み立てることをしないので、ものを論理的に説明することも困難である。しかしこれは、対物対話者らがみな直感的に判断をしており、まったく論理的でないということの意味するものではない。対物対話者はモノの外観を細部までよく観察する。そして、目で見た情報を概念に変換せず、かわりに感情に変換する。対物対話者らは常に頭の中で対話しており、その対話はそのまま理論の組み立て作業である。論理の組み立ての要素が、対象の内在化によって得られる内的体感と会話となっているのである。

＜対物対話者の脳の情報処理＞

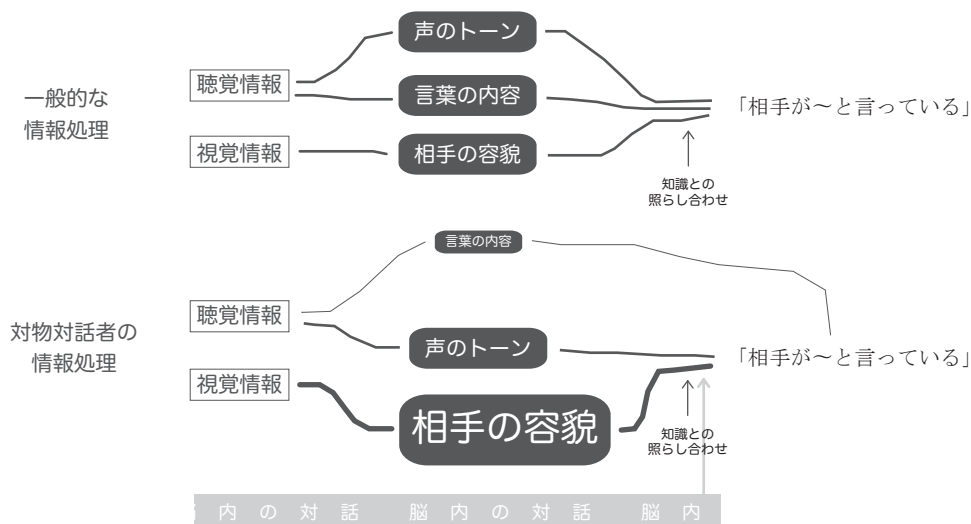
私たちは、相手の口の動きや表情の視覚情報と、聴覚情報を合成し、その言語の意味を自分の知識に照らし合わせながら読み解き、相手が自分に何を話しているのか理解し、自分の意見や感情を持つ。

対物対話者は人間と話しているときからして、そもそもその内容が異なっている可能性がある。彼らは聴覚の情報を十分に処理しておらず、理解のかなりの部分を視覚情報に頼っているのではないかと推測する。視覚情報は、相手の表情や身につけているものから相手の過去を読み込み、相手の言いたいことの内容を推測している。相手が言葉を発しているのは、声のトーンを読み解く情報として処理され、話している内容はそれほど注意を払われない。

また、頭の中では対話しながら思考する癖がついており、そのときたまたま目に映ったものによって「対話の相手」を無意識に補完している。宮沢の対話式の詩はそれの表現である。カーウエイやモンゴメリが「部屋が悲しんでいる」と叙述したのは、感情が先にわいてきて、後から聴覚や視覚や言葉を補完するパターンである。

対無生物コミュニケーションで対象の内在化が行われるとき、脳内では「対象の情報の読み込み（視覚と知識）」、「脳内の対話」、「視覚の合成」が同時に起きている。

以下は、「相手が～と言っている」という認識を持つにおいて、普通に行われる脳の情報処理の過程に比較した、対物コミュニケーションにおける脳の情報処理の図である。



一般的な情報処理のバランスに比較すると、対物対話者たちは、視覚情報の重要性が示す割合が大きく、かつ「言葉の内容」は、付加的なものである。さらに絶えず脳内で自問自答や、頭の中に想定した相手との対話が起きている。

対無生物コミュニケーションは、「情報の読み込み」「脳内の対話」「視覚の合成」の3つの働きが連動して起きる現象で、「脳内の対話」の度合いが強く「情報の読み込み」の度合いが弱いのがけぞり型のコミュニケーションとなり、「情報の読み込み」の度合いが強く「脳内の対話」の度合いも強く、かつそれらの対象が目の前のモノに注がれているのがうつむき型のコミュニケーションである。

「モノが話す」という現象は以下のようにまとめられる。

「情報の読み込み（視覚＋知識）」＋「脳内の対話」＋「視覚の合成」＝「対象の内在化」

この情報処理は対物対話者は脳の中で常習的に行われており、そのため疑うことが難しい事実になる。

対物対話者にとって対話や会話は、視覚だけでかなりの部分が成り立っている経験である。それであるから、対物対話者が「モノと対話している」というのは、彼らの経験から照らし合わせて、事実なのだ。

＜類縁関係にある現象＞

類縁関係にある現象としては、ピアジェの「幼児のアニミズム」と「シャーマニズム」がある。

児童心理学者のピアジェはモノが動くことをモノに意志があるとして考える幼児のアニミズムについて、心理的なものと物理的なものとの間の未分化に原因があると述べている。幼児は精神の発達とともに自分と外界の独立性を学んでゆく。ゆえに、子どもの思考は直感的なものであるという。この研究で調べた人々は、対象と自分が分化されていないという点で、子どもの思考をもっている。しかし、対象との結びつきは対象の知識を得、対象を内在化するという過程を踏んでいる。つまり、分化された状態から、未分化の状態へ戻って行っているのである。

また、シャーマニズムに関しては、“通常意識の低下した”恍惚状態があることと、憑依に対応する現象である「なりかわり」が対物対話者らと類似している。シャーマニズムにおける恍惚や脱魂の外的表現は、うっとりとした表情になるなど比較的軽度のものから、顔面紅潮、全身けいれんして暴れ回ったりする激しいものまでさまざまで、脱魂した身体に精霊や死者の霊が憑依してその言葉を代弁するのがシャーマンであるが、対物対話者の場合は、傾向分析でみたように、半数が軽度の恍惚体験の叙述をしている。また、宮沢は「春と修羅」のなかで、死んだ妹の台詞を詩の中で書いたり、1つの詩の中に2人の人物がいるような詩を多数書いている。手塚やフランクは他人の心情を代弁する「なりかわり」の癖がある。また、近藤やカーンは、死者でなく、モノの気持ちを代弁する。それが近藤の片付け術などとして人々の生活を改善したり向上したりさせ、呪医のような役割をはたしている。対無生物コミュニケーションは現代におけるシャーマニズムの現われであると言える。

＜人口の中の対物対話者の割合＞

シュバルやダーガーのように、田舎に暮らしていたり単純な仕事をしていて生前は世に知られず一般人に過ぎなかったように、無名な人の中にも対無生物コミュニケーションをしている人々は存在する。私の知人が聞かせてくれた話によると、彼女の知人で料理人の卵の人が、ユズと話していたそう。「送られてきたユズはとても素直な子たちで、煮られたがっていたからジャムにした」そうである。

また、主婦の中にもたまにそうした人がある。我々の祖母たちは、いつも家をきれいに保つことができるが、それは自分の身体と家とを一体化しているからだ。また、今思えば、私の地元の小さな町のスーパーの500円弁当をつくっていた人は、おそらく対物対話者であった。コミュニケーションの頻度や強さの差はあれど、対物対話者は身近にいる。

＜対象との癒着または身体の周辺環境への拡張＞

対物対話者の描くモノには、人間らしい性格がある。恥ずかしがりやであったり、権威におどおどしたり、罪悪感をもっていたり、人間と同じくらい感性が豊かである。それはそのまま、対物対話者自身の人間性を投影しているのである。逆に言うと、私たちの人間性が投影されているはずの周辺環境が、無感覚、無感情ではありえない。

対物対話者は、対象のモノの身体や心の痛みを敏感に感じ取る。また、対象のモノも人間側の気持ちを敏感に感じとり、共鳴するように表現される。対物性愛者らはモノの知識を集めて対象を内在化することでモノと愛し合うのだという。対物対話者は、対象の深い観察によって対象を内在化することによって、自分とモノの間に目に見えない神経系を構築しているようだ。これは研究の中で紹介した対物対話者だけの体験ではない。だれしもモノへの愛着をもっており、それらの状態の変化が人間の感情に影響を及ぼすという意味では、だれでもがモノと対話している。

我々が生きていてうえで、望まなくても新しい場所を知り、新しい人を知り、あるいはそれらの新しい側面を絶えず発見して知識を得ていくと同時に、周辺環境を絶えず内在化していく。そして、内在化された対象はその度合いが深くなればなるほど、失ったときの痛みが強い。この意味において、人間と対象は共通の神経系をたしかに持っている。また、この神経は鏡のような性質を持っている。一方の感情に反応して他方の感情が働き、また、一方の痛みに反応して、もう一方も痛む。モノがなくなれば、そのモノにまつわる記憶ははがれ落ちる。片方が死んだら、もう片方も死んでしまうのだ。人体は周辺環境から独立しては存在し得ず、分ちがたく癒着している。常に環境と対応した一対の存在なのである。

結論にかえて

〈景観や建築を保存するための方法〉

我々のまわりにあるモノは我々の存在の一部なのであり、我々の存在の根拠であり、我々がどのような存在か決定するものである。また、私たちの活動は私たちの外部環境にあるそれらのモノから引きだされている。

我々を構成している周辺環境やモノが失われ、忘れられるということは、私たちの存在の一部が失われ、忘れられることを意味する。問題は、私たちの記憶と存在に重要な影響を及ぼすモノのうち、どれを残してどれを捨てるのかという問題について、絶えざる生産と消費によって成り立つ現代都市においては考える暇がないということだ。

土地を資源と見、建築を消耗品と見てそれらを扱う過程で、私たちは友達や恋人を、すなわち自分自身を知らぬうちに失い、あるいは失われるのがわかっていてもなす術がない場合も多い。

しかし本当は、そうした愛着と愛情の問題を無視しなくてはならないほど、私たちに時間がないわけではないはずだ。モノがなくて急速な成長が必要だった時代は終わり、現在は衣食住が充分すぎるほど満たされている。だから、私たちはこうした複雑な問題にあてる時間を充分持っているのである。

土地や建築への愛着の問題を解決するために、以下のような方法を考えた。

百年以上受け継がれた土地と建物に人権を認める

対物対話者の知覚から、かれらが古いモノや使われたもの、歴史を持っているモノにより深く繋がるという傾向があることを前章で述べた。よって、古いモノは一般に人間と結びつきやすく、それらの周辺に住む人々の身体の一部にすでに含まれている可能性が高い。そして、建築も土地が私たちの身体の一部であるならば、それらにも人権があってしかるべきである。実際に法律で人権を与えることはできないにしても、人間の一部として尊厳を持って扱われるべきものである。

土地の精霊と聖地を人工的につくる

もっと身近にできるのは、対象の内在化を他者の中にも起こさせることである。実際的には、その建物や土地にまつわる詩を詠み、物語を書き、写生をすることだ。あるいはもっと単純に、手や頬をくっつけてもよい。対象についての知識を得、情緒的にもつなげさせることである。このようにして、土地の精霊や聖地は人工的につくることができる。つまり、精霊や聖地を感じる知覚をつくるのである。土地や景観の変化に関わる建築家や建設業者、都市計画プランナーも率先してそうするべきである。それがどのくらい効果があるのか証明することは難しいが、土地とつながろうとしたという努力だけでも、住民の慰めになる。

謝辞

この研究にあたってご指導を頂きました大野秀敏教授、
辻誠一郎教授、また、日常の議論によって多くの示唆
を頂いた大野秀敏研究室の同期・後輩のみなさまに感
謝の気持ちとお礼を申し上げたく、謝辞に代えさせて
いただきます。

2014年度 修士論文 対無生物コミュニケーションの諸相 18人の事例とその知覚体系 南 さくら